年毎にもみぢ葉ながすたつ田川みなとや秋のとまりなるらむ

釋 ○秋のはつる云々　立田川を想像して、暮秋盡の意を詠めるとの意。○とまり　泊舟の繫る處をいふ。

大意　毎年々々紅葉を流し下す立田川の川下の湊がサ、あの暮れて行く秋の泊り處であらうか。

評　湊は百船の泊る處なので、紅葉の流下によつて、立田川の湊は秋の泊だらうとの想像は、甚だ巧趣がある。上なる「もみぢ葉の流れてとまる湊には」の歌に似通つた所もあるが、六帖に、

もみぢ葉の流れてよどむ湊をぞくれ行く秋のとまりとはする

は殊に類想類型である。但用語は一層の洗煉を經てゐる。「ながす」は、舟や筏を流し下す趣に聞えて、湊、或は泊の語に打ち合ひ、例の細やかな叙法である。舌音、及びァ韻の語の多いのは、勁く花やかな聲調を成す所以と思はれる。

長月のつごもりの日、大堰にてよめる

夕づく夜をぐらの山に鳴く鹿の聲のうちにや秋は暮るらむ

釋 ○長月の云々　「長月」は、陰暦の九月の異名。夜長月の略かといふ。「つごもりの日」は晦日。「大堰」は京都府下葛野郡嵐山の麓を流れる大堰川に沿うた里の名。小倉山はその北岸に當る。○夕づく夜　夕就夜の義で、夕方になるをいふ。故に小闇き意をいひかけて、小倉山の枕詞に使ふ。「づく」は、月の意でない事は、朝づく夜、夕づく日、秋づけばの語を思ひ合はすればわからう。さて「夕づく夜小倉の山」と續いた例は萬葉集にあるが、それは大和の立田の小倉山である。

大意　あの小倉山に鳴く鹿の聲のするうちにサ、秋はもう暮れることであらうか。

評　蕭條たる山本の里に、物悲しい夕闇を傳うて、曳聲に鹿の鳴く音の聞えてくる、いかに遊子の悲を催すことであらう。こゝに今遊子といつた。この時代では都から出て、嵐山や交野邊ぐらゐを歩いても、旅であつた。この氣分で、この歌の味ひを曉らなければならぬ。況やそれが九月盡の當日ときては、溜るものではない。又「聲のうちに秋暮る」といふに、秋の果の九月盡のその日も、早暮方にまでおし詰まつて、殘餘の秋の幾ばくもない趣をいひ現はし、秋のいとゞ惜まれる所以を構成してゐる。家集にある、

くれぬとてなかずなりぬる鶯のこゑのうちにや春のへぬらむ

はその初稿で、更に推敲されて今の歌とはなつたのであらう。想は清聲、措辭は縝密、調は流暢である。

同じつごもりの日よめる　みつね

道しらばたづねも行かむもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり

大意　えゝ道を知らうなら、跡追つて尋ねても行かうよ、散紅葉を道の神へ幣のやうに手向けて、秋は旅立して去つてしまつたわい。

評　しかし道を知らぬから、あとの追ひやうもないの餘意がある。秋を擬人して、その暮れ行くを旅立つものと看なし、さて人の別を惜む情を、秋の別に擬した。人の別はなほ道が分明だが、秋の別となつては道がわからぬ。その惜まれる所以は偶然でない。巧を竟めて纖弱の弊がないのが、この作者の壇場であらう。但春上の、

素性の歌、

花散らす風のやどりは誰れか知るわれにをしへよ行きて恨みむ

と構想が似寄つて、曲折自在は彼れにあり、歌の位はこれが勝つてゐる。どちらが先に詠まれたものか。古本に、二句たづねもいなむとあるは、結句にさしあつてゐる。又同じ本に、結句秋はいぬめりとある。又六帖に、下句ぬさに手向けて秋はいぬともとあるは、調が舒暢でない。

古今和歌集卷第六

冬歌

題しらず　よみ人しらず

たつ田がは錦おりかくかみな月しぐれの雨をたてぬきにして

釋 ○おりかく　織り懸く。但、懸くに重い意のない事は、春上「あを柳の絲よりかくる春しもぞ」の條にいつた。

○かみな月　陰暦十月の異名。

大意 立田川が、紅葉の錦を織りかけるわ、神無月のこの節降る時雨の雨を、竪横の絲にしてサ。

評 上の秋下の、

たつ田川もみぢ葉流る神なひの三室の山にしぐれ降るらし

と同一の詩境で、但これは眼前に時雨を見、紅葉の散り浮くを見たものだ。紅葉を錦と譬喩した緣によつて、時雨をその經緯の絲と見做した。尤も雨脚を絲に譬へることは、漢詩にも例ある事で、秋下、

霜のたて露のぬきこそよわからし山のにしきの織ればかつ散る

などの構想も、これと似通つた巧だか、一段格調が高くて、纖細の弊のないのが嬉しい。又、その實況に讓つ

て、紅葉の一語を着けないのも、この歌の餘情ある一因として數へられよう。

初句、新撰和歌、及び六帖に立田山、家持集に佐保山とあるはいかゞ。山の錦を時雨の織りかける頃、卽ち紅葉の色付く頃は、寧ろ長月がふさはしからう。神無月では季節後れだから、山の紅葉は盛り既に過ぎて、最早落葉してゐる頃だらう。されば本文のまゝに、立田川の落葉の趣が妥當である。又家持集は後人の僞撰だから、これによつて家持の歌と心得てはならぬ。又或書に、延喜の御製とあるも妄りである。それは新古今集の序に、「抑、於二古今一者、不レ載二當代之御製一」と見えてゐるではないか。

冬の歌とてよめる　源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

釋 ○人め　人の見る目をいふ。「め」は見えの約。○かれぬ　枯れに、離れを寄せた。離るゝは、遠離るなどの離るると同じい。

大意 山家は、冬がサ取り分け寂しさが增るわい、今まではたまゝながらも見えた人目も離れ、草も枯れてしまふと思へばサ。

評 幽閑寂寥は山家の常ながら、尙春は花、夏は時鳥、卯花、秋は鹿、紅葉などにつけつゝ、稀には都人の音信れる事もあつて、寂しい中にも、自然賑はしい點もあつたのを、冬となつての山家は、はかない小草までも枯れ渡つて、人の訪ねてくる種はひもないので、全く世に超えた寂しさである。さて、草の枯れるは何處でもある事だが、人目の離れるのは山家に限る事なので、「人目」が主眼の語である。結句の「おもへば」を、宣長が、「只、枯れぬればといふに同じく、思ふに意味なし」といつたのは甚だ粗い。これは只その遣ひなしが稍輕いだけで、意味のないのでは決してない。辭句の彫琢はやゝ見られる。

題しらず　よみ人しらず

おほ空の月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける

釋 ○きよければ　古本幷に新撰萬葉、六帖、朗詠等に、さむければとあるに據つて釋した。

大意 この大空の月の光がサ大層寒いから、嘗て月影を映して見た水がサ、他の水よりは一番先に氷つたわい。

評 大空の色は玄く澄み、月の光は氷と冴えた冬の夜、遣水などの今は氷つてゐるのを見ての作だらう。さうした寒い夜は、何處の水とても氷らないのは無いが、そんな理窟を放下して、單に目前の實境に卽した感興のまに、月を映した水が、流石に一番に氷つたわといふ。極めて只ありのまゝの作である。これを舊註は素より眞淵、宣長、景樹等を始めて皆、

昨夜の空の月がきつく冴えた故に、その影を見た水がサ、今朝はあれあのやうに、

の意に解いたのは贊成し難い。何で月の光を昨夜のと定めたのか。清かりければなど、過去にいつたなら知らず、清ければとあるではないか。歌は月の光と氷れる水と相須つて、凜乎たる霜氣が骨に徹つて、寒いやうに覺える。

三八四

夕さればころも手さむしみよし野の吉野の山にみ雪ふるらし

釋 ○夕されば　夕べになればの意。萬葉集に夕去者とあるが、去は借字である。○み雪　「み」は美稱。深雪と書くはこれも借字。

大意　夕方になると、袖のあたりが格別寒い、これではあの三吉野の吉野の山に、きつと雪が降るらしいわ。

評　初句「夕されば」の句、力強く聞えるので、晝の間はさもなかつたがの餘意を生ずる。日の暮れ〳〵から、何となく底冷して、働く手許の寒さを覺えるにつけて、この分では、かの氣疎げな高山の吉野の山はと思ひ遣つたのは、吾人が日常の應對にも、「今宵は大層冷エマスナ、多分遠山ハ雪デセウ」など語ると同想である。萬葉集卷十に、

ゆふされば衣手さむし高まどの山の木毎に雪ぞ降りたる

降雪を現在に看たのと、想像したのとの差別があるばかりで、大體は同調ながら、高圓は吉野ほどは寒くない土地だから、「夕されば衣手さむし」が生きない。流石にこの歌は自然で實情で、格調も高古莊重である。「み吉野の吉野の山」は諧調ではあるが、或は時代の好尚に惹かれて、撰者が引き直したのではあるまいか。集中に同調のが三首ある。しかもこの歌は六帖に、初句夕ぐれば、四句高きみ山にとあり。家持集といふものには、四句を高まの山とあれど、高間山は河内國だから、「み吉野」からは續け難い。顯註に「常には深き野山とあれども、崇德院の御本にも高きの山と侍り」とある。これ等を併せてみると、高きみ山も、高きの山も、ふかき野山も、皆、たかぎの山の誤寫から起つて、さま〴〵に字を塡めたらしい。たかぎの山は、萬葉集卷三に、三吉野の高城の山にしら雲は行きはゞかりてたな引ける見ゆと見えて、吉野山の奥、子守神社の左方にある山で、俗にこれを城山といふ。實際高山なる上に、名稱が既に崇高の概念を表して、峰の上の雪を聯想するに尤も緣由がある。

○

いまよりはつぎて降らなむわが宿の薄おしなみふれるしら雪

釋 ○つぎて　引き續きて。○おしなみ　おしなべの轉。推し靡けの約語。

大意　これからは、どうぞ打ち續いて降つてもらひたいわい、こちの庭の薄を推し靡かして降つてゐる白雪が、大層面白いによつてサ。

評　下句は萬葉集の、

めひの野のすゝきおしなみ降る雪に宿かるけふし悲しく思ほゆ　（卷十九）

の二三の句をそのまゝだ。然し主意は全く違つて、萬葉のは旅人の羈愁を主とし、これは自然の感興を主としてゐる。然も同じ薄の雪でも、めひの野のと、わが宿のとは全く場處が違ひ、隨つて趣を殊にして居るから、踏襲とはいはれまいと思ふ。羅一重覆つたやうに降り布いた雪に、前栽の枯生の薄の靡き伏したのが、殊にいちじるしく見え渡つた風情は、全く面白い。白雪とあるに、その色彩が強く印象されるのも、この場面では興味を一段と助ける。そんな薄雪だから、すぐにも消えさうなので、今よりは間斷なく降れと希つたのは、卽ち今より間斷なくめではやしたいの下心と見えた。わざ〳〵巧まない巧で、情景相協つた作である。貫之が、

よるならば月とも見ましわが宿の庭しろたへにふりしける雪

は、實にこれを藍本として、一節をかしくは詠み成したが、遙かに單調で味ひが淺く、雪を月影と見るのも類想が多い。但この歌、「降らなむ」と「降れる」と、同語が重複してゐる。古歌には例ある事ながら煩はしい。

㊇

ふる雪はかつぞけぬらし足引の山のたぎつ瀬おとまさるなり

釋 ○かつ　片一方からといふに當る。春下「咲くと見しまにかつ散りにけり」の條參看。○けぬ　「け」は消えの約語、「ぬ」は現在完了の助動詞。○たぎつ瀬　漲り立つて流れる激湍をいふ。「たぎつ」は沸（タギ）ると同意の動詞で、古意の瀧と同じい。瀑布（タキ）ではない。

大意　山の雪は積りもあへず、降る傍からサ消えてしまふらしいわ、其の證據には、この谷川の早瀬の水の音が、あれ高く鳴るわい。

評　山陰などに住む人の作だらう。屋後の溪聲が、常に變つて鳴高なので、降るまゝに雪が消えるのだらうと想像した。以て寒氣のさのみは烈しくない、初仲冬の頃なる事が知れよう。想はさしもないが、なほ古調の面目がある。

二句、顯本かつぞけぬらむとあるは、この歌體に協はない。結句、六帖に聲まさるなりとある。

○

この川にもみぢ葉ながるおく山の雪けの水ぞいままさるらし

釋 ○雪け　雪消（ユキゼケ）えの約で、雪解（ユキゼケ）のこと。清んで訓む。けを濁ると雪氣の意となる。紛へてはいけない。

大意　この川についぞ見ぬ紅葉の葉が流れる、こりやこれ、川上の奥山の雪解の水がサ、今增るらしいわ。

評　秋歌下なる、

たつた川もみぢ葉流る神なひの三むろの山に時雨ふるらし

と殆ど同想で、今一きはその規模を小さく、その格調を卑くした縮圖の觀がある。劈頭第一、「この川に」と打ち出したのは、驚歎から發した意調で、紅葉の流れたのを意外と感じた樣子が出てゐる。さてその紅葉を、必ず川上の奥山の物と見なして、雪解の水に推し流されたとするのは、想像としては當然なことである。その實は途中何處からか散り込んだ物かも知れないが、必ず奥山◎と定めたのは、卽ち詩の理路に着せぬ所以である。「今」の一語、輕く看過してはならぬ。初句の驚歎に呼應があつて、紅葉が今はじめて流れ出た趣さへ推定されるのである。無論立田川の歌よりは、後出の作である。

○

ふるさとは吉野の山し近ければひと日もみ雪降らぬ日はなし

釋 ○ふるさと　都址、又は故京の意。○し　强辭。

大意　この吉野の古里は、奥深い吉野の山がサ近いによつて、一日とても、雪の降らぬ日といふは無いわ。

評　吉野の里人の作だらう。日本書紀、應神天皇の卷に吉野宮に幸し、又齊明天皇の卷に吉野宮を作られた事が

載つてゐる。いはゆる秋津の離宮で、奈良時代の末からは全く荒廢したから、古里といふのは協つてゐる。抑も吉野は全部北受の土地で、天武帝の御製にも、「三吉野の耳我の嶺に、時なくぞ雪はふりける、ひまなくぞ雨はふりける」とある如く、その雨雪の影響を受ける事は一通りでない。かうした山陰沉寒の冬景を、ありのままによく詠み得てゐる。況や「古里は」と打ちあけるからして、人氣遠く物寂しい聯想があつて、その日毎に降る雪は殊に侘しさうに感ぜられる。「ひと日も」を「降らぬ日」と受けた「日」の語の反復が、一層その意を強くする。又み雪一日もといふべき順序を轉倒して、「一日もみ雪」と四音三音の組織にしたのも、強い迫つた感じを與へる。體格は純古とまではいへないが、素朴で高調である。

新撰和歌に、二三の句奈良の都の近ければとあるのは、甚だ謂れがない。第一地理的からして成り立たない。又結句は日ぞなきとある。六帖に、この歌を御幸の題に收めたのは、四句の「み雪」をいひかけと見たのだらうが、全く據のない事である。

わが宿は雪ふりしきて道もなし踏みわけてとふ人しなければ

釋 ○ふりしきて　降り敷きて。「しき」を頻るの意とするは、この歌では面白くない。○道も　「も」はさへもの意。

大意 自分の家は、雪が一面に降り滿ちて、行き通ふ道さへもないわ、それといふも、この雪を踏み分けて尋ねて來る人がサ無いからサ。

評 山里などの人氣の稀な處に住む人か、又は侘びしれて、世のまじらひの絶えた人かの作らしい。「わが宿は」と強く出てゐるので、差別的に他に對へた趣がある。卽ち世上の繁華な宿には引き換へて、わが宿はいとゞ雪の爲に人の足跡を絶つて、訪はるべき道さへもなくなつたよとの歎息である。「ふりしき」は、面積を廣くかけていふ語だから、何處を見渡しても一帶の白皚々で、道一つだにない光景を想像させる。

わが宿は雪ふりこめて道もなしいづこはかとか人のとひこむ　（新撰萬葉）

わが宿は雪ふる野べに道もなしいづくをはかと人のとがめむ　（寛平后宮歌合）

は誤寫もあるらしいが、とにかく上句は似てゐる。

冬の歌とてよめる　紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木もはるに知られぬ花ぞ咲きける

釋 ○冬ごもり　本集の序註の王仁の歌といふものに「難波津にさくや木の花冬ごもり今をはるべと咲くや木の花」といひ、又萬葉集にも、多く春といふ語の枕詞に用ひてある。冬は閉藏とて、草木の發育をとゞめて内に籠るをいふ。○せる　して、あるの約。○はるに知られぬ花　花といふ花は、春の闌り知らぬはないが、これは冬の雪の花なので、春に知られないのである。

大意 まだ芽も出さずに、冬に籠つてゐる草も木も、雪が降るとめづらしく、春の一向知らない花がサ、咲いたわい。

評 初句は四句に續く格である。雪を花に譬へる例は、既に和漢に亘つた套語であるが、冬の雪を春に認知され

ない花と見たのはこの歌の特想で、腐を化して新としたものである。この種の趣向は作者の得意とする所で、殊に拾遺集のおなじ貫之の歌、

櫻ちる木のした風はさむからで空に知られぬ雪ぞ散りける

は、これと表裏した一對同調の作で、恰も双生兒の觀がある。その描寫こそ反對なれ、春と空とを擬人して、「そらに知られぬ雪」、「春に知られぬ花」と巧んだのが、多少理路にわたる感もあるが、いかにも氣が利いて、語が洗煉されてある。一首の精神またよく流動して、ラ行の音勝に、聲調がうるはしい。さてこの二首の優劣をしひて論ずると、櫻の雪は兄、雪の花は弟だらう。

志賀の山ごえにてよめる　紀秋みね

白雪のところもわかず降りしけばいはほにも咲く花とこそ見れ

釋 ○わかず　差別なしに。○いはほ　石秀（イハホ）の義。單に岩といふに同じい。

大意 白雪が別け隔てなしに、平一面に降ると、草木ばかりか、花の咲かぬ筈の岩にも、花が咲いたとサ思ふわい。

評 志賀の山越は、上にもしば〳〵見えた通り花の名所なので、聯想上から、今草木岩石の差別なく、薄雪の降つてゐるのを見て、流石の無心の頑石にまでも、花の咲くと見たのが、この一節（ヒトフシ）である。但萬葉卷十九に、

于時積雪彫二成重巖之起一、奇巧綵二發草樹之花一、云々。

なでしこは秋さくものを君が家の雪は岩ほに咲きにけるかも

とあつて見れば、着想の先取權は彼れにある。「咲く花」は、花咲くとあるべきを、語調のまゝに倒裝したのである。景樹が、「これは花を主としたるいひざまにて、草木と同じく、巖にも咲く花ありと見ゆの意なり」と解いたのは、一應尤もに面白いが、よく思ふと、もし花が主なら、三句はそれに顧應する名詞が必要であるから、降る雪をとか、降り敷く雪をとかなくてはならぬ。「降りしけば」では、やはり咲くを主として、意釋のやうに見るべき語勢である。

結句、六帖に花かとぞ見るとある。

奈良の京にまかれりける時に、宿りける所にてよめる　坂上是則

み吉野の山のしら雪つもるらしふる里寒くなりまさるなり

釋 ○奈良の京に云々　「まかれりける時」は行つて居た時の意。作者が奈良の古京に逗留してゐた時に、その旅宿で詠んだものである。「延喜八年正月任二大和權少掾一、同八月廿八日任二大和權掾一」と、古今集目錄に見えた。これはこの集の撰よりも後の事だから、それより以前に、大和の目などで下つてゐた時の作か。或は撰進後の追加だらう。○ふる里　こゝは奈良の故京をさしていつた。

大意 この頃は、あの吉野の山の雪が、積るらしいわ、さうと見えて、この奈良の古里が、ます〳〵寒くなることよ。

評 後世の人が、吉野山と云へば櫻花を聯想するやうに、奈良時代からこの頃にかけては、吉野山とさへいへば、

山深く雪も亦深い荒山が聯想されたのであつた。奈良では、間に塔の峯續きの山があるので、その山影すら見難いが、嚴冬の寒さを感じては、附近の山々をさしおいて、まづ吉野の積雪が思ひ出されたものらしい。ラ行音多くて、聲調ほがらかである。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風

浦ちかくふりくる雪はしら波のするの松山越すかとぞ見る

釋 ○するの松山　今陸中國二戸附近にある波打峠を、末の松山だと里俗にいひ傳へてゐる。するは地名と見える。日本紀に、山城に陶野（スエノ）あり、和泉に陶邑ある事見え、又、上總には周淮（スエ）郡あるを以て證とされる。顯註に、能因が歌枕を引いて、「本の松、中の松、末の松とて、三重にありと申す」とあるは、妄言である。なほ本集東歌のうち、みちのく歌に、

君をおきてあだし心をわがもたばするの松山波もこえなむ

の所で委しくいはう。

大意 かう海近い所へ降つて來る雪は、景色が面白くて、古歌に波の越さぬ處と歌つた末の松山を、白い波が越えるかとサ思ふわ。

評 山近い海岸で、浦風に吹きしかれて、雪が卍字巴と亂れ降る趣が、沖つ波邊つ波が押し寄せて、陸を覆つた狀に似たので、うちつけに、白波の山を越すかといはうとしたが、端なく、「末の松山波もこえなむ」の古歌を聯想して、かの山を波の越すかと見ると擬へたのである。されば、初句は何處の浦でもよい。契沖が、末の松山あたりの浦と見たのは泥んでゐる。巧に典故を湊合した手際は見えるが、何だか作物で、實感が伴はない心地がする。

二句、新撰和歌にふりしく雪はとある。又この歌、拾遺集にも金玉集にも再選されて、作者人丸とあるが、無論人丸の歌體ではない、この集の方が正しい。

みよし野の山のしら雪ふみわけて入りにし人の音づれもせぬ　壬生忠岑

釋 ○音づれもせぬ　「音づれ」は便り。「も」はさへもの意。「ぬ」は否定の助動辭。

大意 吉野の山の深い雪をふみ分けて、籠つてしまつた人が、その後は出て來るどころか、一向に音づれさへもせぬわ。

評 いよ〳〵無事だかどうか、時節柄所柄ゆゑ心配だなあの餘意がある。初二句、單に「白雪」とあるのとは異なつて、いかにも荒山の深雪の狀に聞え、入りにし人の心細さを映發してゐる。一去杳として消息を斷ち、さりとてこちらから尋ねる心當りもない。生かはた死か、覺束ない極みではないか。友愛相思の熱情はこゝに迸發して、端なく「入りにし人の」と歌ひ出されたものだ。結句の「も」の辭に力があるので、出會ふことは勿論の意が含んでゐる。商徵の音過半を占めて、聲響が悲愴に、情が眞摯で、體格の長高なのは、忠岑の他作に似ない。それゆゑ景樹は、「その趣、打ち任せたる雪の景色にあらねば、歌合の歌めかぬ心地す。別に事に當りての歌ならむ」と疑つた。けれど、世を憤り俗を厭ふ餘りの山籠りに、吉野の山奥などに遁れるのは、奈良に都のあつ

た時代の事である。今の平安京になつては、藤原關雄が東山進士と稱せられたやうに、東山西山、あるは北山、さては白河宇治などのあたりに、多く閑居したものであつた。それを奈良時代の舊套のまゝに、都からは懸け離れた吉野を特に取り出したのは、あのもろ越の吉野の山と詠んだ類で、吉野を必ず隱遁の場處と假定しての上の作と思はれるから、實況の歌ではなく、題詠の範圍内に屬するものだらう。やはり歌合の歌と見てよい。

秋山にもみぢあはれとうらぶれて入りにし妹はまてど來まさぬ（萬葉卷七）

に比べると、雲泥の優り方である。後世鎌倉の八幡社頭で靜御前が、この歌の結句をあとぞ戀しきと謠ひ易へたのは、時に取つての手柄だが、やゝ露骨で、大いに風雅を傷ける。

⊗

しら雪のふりてつもれる山里はすむ人さへやおもひきゆらむ

釋 ○おもひきゆ　心細く消え入る思するをいふ。

大意 雪は消える物だが、その白雪が降つて、段々深く積つてある山里は、さぞや住んで居る人までが、心が消え入るやうに思ふ事であらうか。

評 源氏物語手習の巻に、小野に住みわびた所に、

雪ふかく降りつみ、人め絶えたる頃ぞ、思ひやりたる方なかりける。

とあるにおなじく、山家の情を思ひ遣つたのである。二句の「て」の辭は注意を要する。單に降り積るといふとは異なつて、時間を持つ爲に、いみじく降りもし、積りもした狀に聞きなされて、大いに力がある。これが爲に麓の通ひ路も打ち絶えて、閉ぢ籠つた寒さや寂しさの甚しさが映出されてくる。それを雪の緣で「思ひきゆらむ」と調べおろしたのである。だから雪の消えるのは現前の事實と見てはならぬ。只雪は消えるといふ觀念を基調としたに過ぎない。

三句、新撰和歌にふる里はとある。

雪のふるを見てよめる　凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらむ

釋 ○雪のふるを見てよめる　見て思ふ事をよめるの意。○道なれや　秋上、「秋の野におくしら露は玉なれや」の語法と同じい。參看されたい。○あとはか　「あと」は跡である。「はか」はそこはか、いづこをはかりなどいふ、はか、はかりに同じく、量りの略である。けれど「あとはか」と連ねては、「はか」に深い意味はなく、單に跡といふ語の意を强めたに過ぎない事は、淺はか、あてはかなどいふ語例を思ひ合はせるがよい。

大意 雪が降つて、人も通はぬ道は、足跡も無いによつて、道筋が消えてしまふが、このやうに引き籠つてゐる自分の心は、不思議にもその人通りの無い雪道かして、何がなしに消え入るやうに思ふのであらう。

評 憂思を抱いて、ひどく懊惱してゐる折しも、雪の降るのをつくづく詠め入つて、わがはかない思に擬へたのである。雪故の物思ではない。けれどまた、かうも歌ひ出されるのは、雪の日の徒然な物わびしさからである事は勿論である。まづ寄雪述懷といつたやうな歌である。元來不倫な物を譬喩に捉へて來て、緣語によつて

連絡したので、彫蟲の技は多少見られもするが、感哀はやはり淺い。

雪の降りけるをよみける　清原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

釋 ○花の　こゝは雪を譬へた。

大意 まだ冬でありながら、あのやうに花の散つて來るのは、あの雲のあちらは、もう春になつてゐるのであらうか。

評 雪の花などいふ、陳套の譬喩を用ひないで、直に花と斷定したのが面白い、この稗氣が卽ち歌である。貫之集に、

春ちかくなりぬる冬の大空は花をかねてぞ雪もふりける

とあるも、想は類似してゐるが、理路に纏はれ過ぎて、ひどく劣つてゐる。「雲の」は空のといつてもよい所を、上に「空より」とあるので、轉義したものと見ても見られるが、自分はこれを實在の雲と解したい。冬の一日、雲影が低迷して、折々輕く雪がちらつく。それが花とも見れば見られる。卽ち雲の此方は冬ながら、彼方は春だらうとの想像が、そこに生まれてくるのは自然である。この集、夏歌、

夏と秋と行きかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風やふくらむ

を、時節と材料とを取り換へて、逆寫したやうな作である。上に、「冬ながら」とおき、下に、「春にやあるらむ」と結んだ對照は貼密に過ぎて、餘情が乏しい。この歌が體格の點で卑小な原因の一にも數へられよう。道濟十體に、高情の歌と評したのは、どういふものか。聲調は花やかで流滑である。

雪の木に降りかゝれりけるをよめる　つらゆき

冬ごもり思ひがけぬを木のまより花と見るまで雪ぞふりける

釋 ○冬ごもり　この解上出。但こゝは冬籠りの頃はの意に解さなければならぬ事は、なほ梅雨を梅雨の頃はの意に解するのがあると同じい。

大意 諸木は冬枯れたまゝ、まだ芽も出さず籠つて居る頃なので、花を見ようとはとても思ひも懸けぬものを、それにまあ、あの木の間から花の散ると思はれる程にサ、雪が降つたわい。

評 韓愈の春雪の詩に、

白雪却嫌春色晚、故穿庭樹作飛花。

萬葉集卷八に、

うめの花枝にかちると見るまでに風にみだれて雪ぞふりける

など和漢を通じて、夙く同案の作あるうへに、新撰萬葉の、

木の間よりふきくる風に散る時は雪も花とぞ見えまどひける

に至つては全然吻合してゐる。其の穿庭樹といひ、枝にか散るといひ、木の間より散るといつたのは、皆、雪を花と見る爲の襯染である。既にいふ通り、雪を花の構想は等類がすでに澤山あるうへに、後世いよ〳〵屋下屋を架して、どうもならぬ。

結句、六帖に雪は降りつゝとある。

大和の國にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめる　坂上是則

朝ぼらけ在明の月と見るまでによし野の里にふれるしら雪

釋 ○大和の國にまかれりける　この作者が、大和に往つた事に就いては、上の「三吉野の山の白雪つもるらし」の條に辨じた。○朝ぼらけ　朝朗明（アサホガラケ）の略で、夜明方のこと。集中戀三に、「東雲のほがらゝと明け行けば」とある趣がそれである。○在明の月　影がまだ空に在りながら、夜の明くる頃の月をいふ。おもに下弦の月。○月と見るまでに　月の影と見るまでにの略。「まで」はばかりの意。○ふれる白雪　下に、なるかなといふ詞を補つて聞く格。

大意 朝しらゝと明けに見れば、恰も在明の月の影かと思ふ程に、一夜の間に、吉野の里に、一面に降つた白雪であるよ。

評 元來吉野は山ふところだから、他所よりは雪も早い。或朝ほらけ、外の方おしなべて眞白に見渡されたのを、都人の慣はらぬ心からは、雪とは思ひも寄らず、ふと在明の月影が地に印したのかと疑つたが、よくゝ見れば、夜の間に降つた雪の光であつたといふのである。かう闇夜の頃に、雪を月明かと疑ふのは、白居易の詩に、「風吹三枯木一晴天雨、月照三平沙一夏夜霜」とある儔である。貫之集にも、

よるならば月とも見ましわが宿の庭しろたへにふりしける雪

といふのがある。強ひて詠出の前後は決し難いが、いづれも白詩からヒントを與へられたと見るが至當である。又この雪は草木の形を失はぬ程度の薄雪の光景で、更に萬物の面目を埋了する深雪の趣ではない。白詩の霜の風情に近い雪である。然るに眞淵が、「まで」の辭を重く見、且歌の序次に拘泥して、薄雪でないと定めたのは失考である。又契沖、宣長が在明の月は光り收めたる朝朗に、尙その影かと見るばかりと說き成したのは、在明の月を曉の月と解し、朝朗とは時刻が出會はぬと考へた拘泥の見で諾ひ難い。さてこの歌は姿も綺麗で、長けも高いが、大した佳作でもない。

四句、歌集に吉野の山にとある。

題しらず　よみ人しらず

けぬがうへに又も降りしけ春霞立ちなば深雪まれにこそ見め

大意 これ雪よ、このまだ消えぬ上に、又も降り續いてくれい、その譯は、追つ付け長閑な春の霞の立つ時分になつたら、この面白い雪も段々消えて、稀にサ見る事であらう。

評 上の「今よりはつぎて降らなむ」は、その降り敷いた樣を興じて、その度々降る事を望み、これは殘雪の稀なことを豫想して、ある上にも夥しく降り積れと希つた。それを景樹は同意と見て、初句を、けぬがうちにの意だと解いたのは、いみじき誤である。この歌、表面から見ると雪の熱愛者の詞らしいが、或は裏をいつて居るのではあるまいか。この頃雪が頻々として降るので、その苦寒に堪へぬ餘り、いつそ降るなら在るうへにも山と降り積つておけ、春になれば少ない雪だからと、自棄的に皮肉をいつたものと思はれる。どうもかう見た方

が、この歌の自然の調に協ふ。「春霞立ちなば」は春立ちなばの意で、春の歸るを春下に、をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にし立ちぬとおもへば といつたと伴しい修辭で、おのづから霞と雪との對照が出來てゐる。

○

梅の花それとも見えず久方のあまきる雪のなべて降れゝば

此歌は、ある人のいはく、「柿のもとの人まろが歌なり。」

釋 ○それとも　それなりともの略。「それ」は梅の花を指す。○久方の　あまの枕詞。春下「久方の光のどけき」の條を參看。○あまきる　奈良時代に多く見えた語で、天きらし、天きらふなどもいふ。天のボッと曇り合ふのをいふ。あの霧といふ語はこの居體言で名詞となつたものである。○降れゝば　降りてあればの約。

大意　大空に張る雪が、一面に降つてあれば、梅の花が梅の花とも見えぬわ、同じ白さなので。

評　梅雪相紛れることは、夙く支那の詩に見え、奈良時代にも數多いひ舊してゐる。しかも萬葉集卷八、赤人の歌に、

わがせ子に見せむとおもひし梅の花それとも見えず雪のふれゝば

又同集卷十に、「梅の花それとも見えず降る雪の云々」とも續けて、語句に多少の出入こそあるが、全く同想同趣である。但この體格、風調、用語を味ふに、雄渾雅健で、しかも蒼然たる古色を帶びた所は、純乎たる萬葉調である。道濟十體には、これを器量ある體として擧げたのは、一隻眼を持つてゐる。一體この作者は誰れか。風調が既に赤人でない。憶良でない、家持でない。旅人でない。かう數へてくると、僅に只一個の歌聖人麿を剩してゐるばかりだ。左註に「人麿が歌なり」とあるは、あながちに否認し難い。以下四首、皆雪中の梅を詠んでである。

拾遺集には、斷然これを人麿の作として采錄したことを思へば、却つてこの左註は、拾遺集の選者といはれた藤原公任卿の所爲かも知れない。既にすべての左註は、この卿の手になつたものだらうと、古人も疑を挿んでゐる。

梅の花に雪の降れるをよめる　小野篁朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人のしるべく

釋 ○雪にまじりて　雪の白さに混つて。○香をだに　「を」は歎辭。

大意　これ梅よ、汝が花の白い色は、よし雪の白さにまじつて、差別が見えないとしても、花が咲いてあると人の知るやうに、せめて持前の香でなりとも、あざやかに匂つて呉れよ。

評　梅を愛賞する情の尋常でない態が見える。梅の一語をつけないで、梅を歌つたものであることは動かない。初句「花の色は」と字餘りに起したのは、頗る勁健な調子である。四五句倒裝法を用ひたのが、爲に諧調となつてゐる。次の二首も同調の歌だが、これは稍古朴な傾向があるだけ嬉しい。なほ春下、

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

の條を參照してほしい。

六帖に花の色に雪はまじりて見せずとも香をだにぬすめとあるは、甚だ妄りがはしい。新撰和歌に、初句梅の花とある、これは節短く力が弱い。

雪のうちの梅の花をよめる　きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせば誰れかことゞわきて折らまし

釋 ○降りおける　降り置きてあるの約。萬葉集に多く見え、延喜の頃までは用ひてゐた語である。集中雜部にも、時雨ふりおけるとある。○まがひせば　紛ふならば。○ことゞ　別々の意。秋下「秋の露色ことゞに おけばこそ」の條を參照。

大意　若しこの梅の香が、花の色のやうに降り置いてある雪に紛ひもするならば、誰れが雪と梅の花とを別々に見分けて折らうぞ、折る者は無からうを。

評　雪は梅花と一樣に白くて、缺く所は只その清香のみである。流石に梅が香は雪に紛れない。それを逆寫して若し紛れたら折るにも折られまいと心配らしく首を捻つたのは、詰り梅雪相紛ふ趣を、婉曲にやゝ誇張して合點させたものである。春上、

月夜にはそれとも見えず梅のはな香をたづねてぞしるべかりける

これも月色の白さを借り來つて、梅花の清香を讃歎したので、色と香と暗に映對してゐる。

六帖に、三四の句うつりせば誰かはものをとあるは、しかと聞き取り難い。

雪の降りけるを見てよめる　紀友則

雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし

大意　雪が降れば、木それ〴〵に、白い花がサ、思ひよらず咲いたわい、これでは、どれを梅と見分けて折らうぞ。

評　雪が梢に點ずると、林は盡く花となる。さてそれが梅花に紛ふを誇張して、折り煩ふとまでいつた。六帖に、

いづれをかわきてをらまし梅の花枝もとをゝにふれるしら雪

と同想同調で、餘り珍しくもない。新撰萬葉に、

冬くれば梅に雪こそ降りまがへいづれの枝を花とまをさむ

は等類ながら、聊か情致があるやうだ。さて「木毎に」の一語、殊更めいて聞える。必ず梅の字を拆いて詠み入れたものらしい。

物へまかりける人を待ちて、師走の晦によめる　みつね

わがまたぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

釋 ○物へまかりける人云々　「物」は何と限らぬ場合にいふ語で、こゝは餘所へ行つた人の意。「師走」は、年竟、また末果つの轉語で、年の果ての十二月の異名。「つごもり」は、月隱の略で、狹義には晦日の一日に限られ、廣

義には月の廿日過ぎより晦日までを稱する。こゝは前者の意。○かれにし　冬草の枯れにしと、人の離れにしとをかけた。人の離るとは人の寄り付かぬをいふ。

大意　自分が待ちもせぬ新しい年は近く來たが、それとは引き換へ、この節の草の枯れたやうに、離れ〴〵になつて餘所へ行つた人は、歸つて來るどころか、音信さへもせぬわ。

評　待ちに待つてゐるうちに年もおし詰つた趣で、しかも「年は來ぬれど」とまであるから、晦は狹義に解した方が、事情がしつくり合ふ。物へ往つた人は誰れか、昔の人は朋友間でもこんな調子の事をいふから、斷定は出來ないが、まづ親類附合の女と見てよからう。待たねど來る年と、待てど來ぬ人とを對照させた歌だが、餘りに貼き過ぎる心地がする。初句は下句に反映させる爲だらうが、少しいひ過ぎてゐる。新玉のなどと置けば、やゝ大らかで宜からうにと一旦は思つたが、さてこの歌は又そこが山で、「年は來ぬれど」の擬人も、「わが待たぬ」とあるので活きてくる。そしてこの擬人は、「かれにし人云々」を引き出す所縁となつてゐる。「冬草の」は「離れにし」の序ながら、時節の物を應用したので、自然に心細げなけしきが浮かんでくる。「音づれもせず」は來ぬの轉義である。渾べて五分もすかさぬ纖巧さが見える。

年のはてによめる　　在原元方

あらたまの年のをはりになる毎に雪もわが身もふり增りつゝ

釋　○あらたまの　年の枕詞。○年のをはり　年の果て。○ふり增りつゝ　身の舊りまさるに、雪の降り增るを寄せた。

大意　年の終りになる度毎に、雪も降り增り〴〵するが、自分の身も舊さか增り〴〵してサ、次第に年寄つて行くは、あゝ情けない事よ。

評　作者老境の作と見える。眞淵は、古體でいとめでたいといつたが、承知が出來ない。小倉百首の、

花誘ふあらしの庭の雪ならでふり行く物は我が身なりけり（公經）

の藍本で、「ふり」の語に緣つて巧んだ秀句に過ぎない。これがこの人の作風である。

三句、六帖になる時はとある。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　　よみ人しらず

雪ふりて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

釋　○もみぢぬ　赤く色付かない。「もみぢ」は動詞に用ひてある。

大意　他の時にはわからぬが、雪も降つて年の限りになつた時にこそ、さてはとう〴〵露時雨は勿論、何が降つても色の變らぬ松だといふ事も知れたわい。

評　他の草木の、雪はおろか時雨にも霜にも、容易く秋の頃から紅葉するのに對へた。論語の「歲寒然後知二松柏之後凋一」の意を本據としたので、看るべきは只その飜譯の精妙な點にある。「つひに」の一語眼目で、松の地歩はこれに依つて占められてゐる。舌音勝で、聲調が沈んで强い。

二句、寬平歌合、新撰萬葉に暮れ行く、四句、新撰萬葉につひに緣のとある。六帖は本文と同じ。

四〇六

年のはてによめる　はるみちのつらき

昨日といひけふと暮らしてあすか川流れて早き月日なりけり

釋 ○あすか川　大和國高市郡飛鳥川。明日をいひかけた。

大意 過ぎ去つた日を昨日といひ、さし當つた日を今日といひて暮らして、すぐ明日を迎へるといふやうに、何の間も無いうちに早もう年の暮になつたを、どうした事ぞと思つて見れば、明日香川の水の早く流れて行くやうに、早く經つた月日であつたわい。

評 「昨日」「今日」の緣語で、明日といふ響ある「飛鳥川」を取り出して漸層法を用ひたのは、いかにも一年の月日の、猶豫なく迅速に暮れてゆく概念を與へる。川の緣語で、過ぎて早きといふ所を、「流れて早き」と轉義した。二句は、けふといひて暮しての意なのを、初句の「いひ」に讓つて略いた。作者は流石に漢學者の事とて、おなじ歲暮の感懷を賦するにも、歲月如流の句意を骨子として、これに潤飾敷演の皮肉を加へた。詞は流麗で、聲調健やかである。

二句、六帖にけふといひつゝとある。

「歌奉れ」と仰せられし時によみて奉りける　きのつらゆき

行く年のをしくもあるかな增鏡見る影さへに暮れぬと思へば

釋 ○增鏡　眞澄鏡（マスミカガミ）の略。よく淸みて光の明らかな鏡をいふ。

大意 とかく暮れて行く年が惜しい事ではあるよ、鏡で見る自分の影までが、年と同じやうに老い暮れたと思ふによつてサ。

評 唐詩に「霜鬢明朝又一年」などいつた趣を詠んだものか。明鏡の裡、形影自ら相憐んで老の迫るを歎き、年の逝くを慨く。誰れも思ひ當る感懷である。老いを轉義して、「影さへ暮れぬ」といつたはの、年の緣語に依つて理りを合はせたのである。

古今和歌集卷第七

賀歌

題しらず　よみ人しらず

わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで

釋 ○こゝに賀歌（ガウタ）とあるは、皆算賀の歌である。算は年齢の謂で、四十歳を初老として、十年毎にこれを行ふ。もと支那の習慣だが、奈良時代には、既にわが邦に行はれて、東大寺要錄に、僧良辨等が聖武天皇の四十の御齢を祝した事が見え、猶二三の書にも、算賀の事が載せてある。平安朝になつては、殆ど數へるに遑がない。皆長壽者の子弟等が、自ら親戚故舊を會して宴を張るのである。されば、かの天皇の大御世の萬歳を祝する歌は、この部中には無い。それのあるのは後撰集以後の事である。○わが君は　「君」は二人稱の代名詞で、天子の事でない。○八千代に　八千代にまし。。。。。。。。ませを略いた。八千代は八千年の義だが、玆の八千は只多數を意味するまでゝある。○さゞれ石　細石。小をさといひ、打ち重ねてはさゝといふ。卽ちさゝやく、さゝらぐ、さゝ波の類である。それにら或はれの接尾語を添へて、さゝら、さゝれ石などいふ。一轉しては、さゝれとばかりで小石の事ともなつた。○いはほ　石秀（イハホ）の義で、大きな岩。○苔の蒸す　「蒸す」は生（ム）すで、高皇産靈（タカミムスビ）神の御名の産（ムス）

に同じい。

大意　私の頼み奉る君は、千年も萬年もお繁昌で、お出で遊ばされて下されませ。いやそれではまだ飽かぬ、あの小さな石が大きな巖ほとなつて、またそれに苔の生えるまでお出でなされませ。

評　山厲河帶の語もあるやうに、巖石は缺けて小石とこそなれ、小石が長じて巖石となるのは事實ない事だが、昔は和漢を通じてさう思つて居たのだから仕方がない。この時代思想の立場からこの歌を見ると、「さゞれ石」の小と、「いはほ」の大とを對照させて、その變化の時間の無窮なる趣を現はしたので、既に賀意は完全してゐるのを、それでもまだ不足として、さゞれ石の巖となるにはまるで比較にもならぬ「苔の蒸すまで」を歌ひ添へて、少しも餘計にと今一層の時間を持たせた漸層法は、この種の想を叙述するに尤も適當の表現で、その賀意の親切さがつくづくと感ぜられる。二句も、「千代に八千代に」と同調を反復した漸層法で、下句に應じた。六帖、道濟十體、新撰和歌、奥儀抄、顯本等には千代にましませとあつて、表面の意義は完全するが、調がいたく後れて、永遠な意味と、その概念とを記得させる力が、頗る薄弱である。無論本文の方が勝つてゐる。抽象的に限りなき齢といふ所を轉義して、「千代に八千代に」と數量の語に易へたのも面白い。初句の「わが君」は、我が大君、我妹子、あが佛などいふ類で、親しんで呼びかけた趣が見えて、その行末の長久を祈るのも尤もと點頭かれる。辭樣も、構想も面白く、格調も高古莊重なので、唯一の祝歌として、古來から吟誦されてゐるけれども、その音節の凄涼なのが聊か口惜しい。蓋し一首のうち、ィ列音十、ォ列音七あつて、その過半數は、商徵の音から成立した爲だらう。洋々たる暢諧快活の音節こそ、祝歌の性質として必要と思ふ。

初句、朗詠集に君が世はとある。これは事がひろいから、今日國歌として用ひられた。

○

わたつみの濱のまさごを數へつゝ君が千年のありかずにせむ

釋　○まさご　眞砂子、或は眞砂子の約。萬葉集には、まなごともある。細い砂をいふ。「ま」は美稱。○ありかず　存在の數。數取と解いた說もあるが妥當ではない。

大意　海の濱の砂の、限りも無い數を數へ〳〵て、それを、君の御長壽でお經なさる數にしようと存じます。

評　萬葉集卷四に、

八百日ゆく濱のまなごもあが戀にあにまさらじか沖つ島守

に著想は類似してゐる。但、君が千年にせよ、あが戀にせよ、何にまれ、無量數の譬喩に砂を用ひる事は、佛教の影響である事を忘れてはならぬ。それは佛經中に無數恒河沙の語、數多散見して、當時の人士が朝夕の勤行に、誦を成したと思はれるからである。「千年」は窮りない齢の意を轉義したのであることは、上の歌に同じい。

四句、顯本に君がいのちのとある。

○

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君がみ代をばやちよとぞ鳴く

釋　○しほの山さしでの磯　「しほの山」は顯註に、能因が歌枕を引いて、甲斐國に在りとある。今同國甲府から東

北三里許、笛吹川に沿つて、小邱あるあたりをさし出といひ、それより二里許、北方にある山を鹽山（エンザン）といつてゐる。しほの山さし出の磯はこれだと稱してゐる。然しさし出の磯はさし出た磯崎の義だから、何處でもいはれる語である。契沖いふ、「平家物語に、しほの山打越えて、能登の國小田中親王の塚の前に陣を取る。又能登越中の境なる志保の山と見えたるその志保の山にて、さし出の磯もそのあたりならん」と。又眞淵はいふ、「延喜式に、能登國羽咋郡に、之乎神社あり。萬葉集に、赴二參氣比大神宮一行二海邊一之時作歌とて、之乎路可良多太古要久禮婆（シヲヂカラタダコエクレバ）とあり。之乎（シヲ）を後に、しほと誤り、それよりさし出の磯とは設けてよめるか」と。○千鳥　多く河海の上に群つて鳴く水禽。鴫に類し、鶺鴒に似て小い。種類多く、その羽色にも種々ある。

大意　しほの山さし出の磯に鳴く千鳥でさへ、貴方の御世をば、八ちよ〳〵とサ鳴きますわい。

評　前にもいつた如く、賀部は皆祝壽の歌だから、「君が御代」といつても、大御世の謂ではない。初二句、たゞ在りにいひ續けたものながら、汐のさし來る磯邊に、千鳥の鳴き立つ景致が思はれる。その千鳥の鳴聲のちよちよと聞えたので、彌（ヤ）の語を冠せて、八千代と秀句に取り成した。「代」といふ語を折り返したのが、三句、結句の「鳴く」の重疊と相關聯して、節奏の諧ふを見る。まづは古調中の手ある歌だらう。

四句、顯本に君がみちよをとある。定家の密勘にも異論がない。六帖、伊勢集には君が齡をとある。君が御代をばは崇德院御本である由、顯註に出てゐる。景樹が折衷して、君が千代をばと改めたのは私である。三句、顯本になく千鳥とある。眞淵いふ「下にも鳴くとあるはその理をいふにて、古歌のいひなしなり。後世、同語の重複を嫌けむとて、さかしらにすむと改めしならむ」と。景樹もこれに從つた。伊勢集にはゐる千鳥とある。

○

わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめおきてば思出（オモヒデ）にせよ

釋　○よはひ　齡。○とりそへて　添へて。「とり」は接頭語。○おきてば　置いたならばの意。春上「梅が香を袖に移してとゞめてば」とあるに同じい。○思出に　思ひ出し種（クサ）に。

大意　自分のこの長命な齡を、貴君に進げようと思ふから、これからは貴君の八千代の齡のうへに、この自分の齡をも取り添へて、お手許に留めて置いたならば、それを幾千年も長生をされた後に、自分の事を思ひ出す種にして下され。

評　七八十の老人が、同年輩か、或は年下の友人の年賀を祝つて贈つたものだらう。されば、我が壽を讓るから思ひ出にせよなど打ち解け事もいはれるのである。まるで不可能な事を、出來るものゝやうに取り成して、空中に樓閣を現じたものである。契沖が「君より臣下に賀を賜へるに、同じくはこの久しき齡を、君がもとよりの八千代の上に取り添へて留め置きて、わが思ひ出にせむと詠めるか。せよとはみづから下知するなり」といひ、景樹が「とゞめおきてば」を、とゞめたればと既然に解したのは皆わるい。

顯本に、結句おもひでにせむとあるは調はない。

仁和の御時、僧正遍昭に、七十の賀給ひける時の御歌

かくしつゝとにもかくにも長らへて君が八千代にあふ由もがな

釋 ○仁和の御時云々　三代實錄に「仁和元年十二月十八日戊辰、延二僧正法印大和尚位遍昭於仁壽殿一申二曲宴一、今年始滿二七十一、天皇慶賀徹夜談賞、太政大臣等預二席焉一」とある。その時の事である。眞淵は「今本に御歌とあり。古本、御の字なし。延五記にもなし。歌の體必ず御製にあらず。遍昭の詠めるならむ」といつたが、御の字の有無はとにかく、遍昭がみづから詠んだ歌の詞書の體でない。○かくしつゝ　かくは天皇と遍昭との御中の親密なのを指す。宣長が、今度の賀宴を指すと解いたのは當らない。○もがな　「も」は歎辭。「がな」は願望の助辭。

大意 かう互に親しく交らひながら、どうしてなりともかうしてなりとも、朕も存命で居て、その許の八千歳の折にまで、どうぞ逢ふ手段があつてほしい事よ。

評 遍昭を必ず千歳も長生するものと定めて、美ましさに、及びもない業ながら、その行末までも追從したいといふに、一方ならぬ祝賀の大御心が窺へる。一面遍昭が八千代の曉は、即ち御自身も殆ど八千代になる譯で、表面遍昭を祝ひ、傍ら自身をも祝つて、わが地歩を占られた中に、御交情の親密さが漲る。抑も光孝帝が、遍昭を歸依崇重された事は格別だつたので、みづから弟子の禮を執つて宮中で賀宴を催され、御歌をも下されたのである。

仁和の御門の、みこにおはしましける時に、御をばの八十の賀に、しろかねを杖に作れりけるを見て、かの御をばに

かはりてよめる

僧正遍昭

千早ぶる神のきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり

釋 ○仁和の御門云々　光孝天皇が、まだ時康親王といつて居られた時に、御母贈皇太后藤原澤子（贈太政大臣總繼の長女）の御姉妹いづれかの八十歳の壽筵に、銀を壽杖に作つて獻つたのを、遍昭が拜見して、その姨に代つて詠んだ歌との意。案ずるにこの「御をば」を澤子の妹とすれば、藤原長良の室、照宣公基經の母だらうが、八十賀では年配が當らない。依つて澤子の姉と斷ずる。宣長は「をばは、おばの假字なるべし」といつた。おばは祖母である。光孝帝御祖母は、嵯峨帝の皇后橘嘉智子であらせられるから、時代が全く合はない。○千早ぶる　秋下「千早ぶる神なひ山の」の條に既出。○きりけむ　杖は多く竹木を用ひるから、杖に作るを切るといふ。○つくからに　杖を衝くにつけて。○坂も　坂さへもの意。景樹が「坂に榮ゆるを寄せたり」と解したのは牽強である。

大意 親王樣から下されたこのお杖は、一通りの物とは見えぬ、大かた神樣のお作りなされた杖だらう、いかにもこの杖を衝くにつけては、越え難い千年の坂さへも越えられさうだわい。

評 杖といふ言を實物に讓つて廻護してゐる。杖は坂路には殊に必要品だから、在經難い千年を越え難い坂路に混喩して、千年の坂もこの杖ならば、「越えぬべらなり」と讃稱して、「神の切りけむ」とある前提に應ぜしめた。その神の爲業に託したのは、拾遺集に、

あふ坂をけさこえくれば山人の千とせつけとてきれる杖なり

すめ神のみやまの杖に山人の千年をいのりきれる御杖ぞ

の、山人の所業に託したのと同じく、その結構さの人間を超越して、頗る立派な事を稱揚する手段である。かう口を極めて賞ひ物を褒めそやすのは、即ちその贈主の厚意を感謝する結果になる。つまりかの射人先射レ馬

の筆法である。詩想婉曲で、狂痴の意をさへも寓したのは、例のこの僧正の特色。

二句、六帖、家集、顯本等に神やきりけむとある。註家多くこれに據つたが、眞淵は本文を執した。成るべく治定した方が、狂痴の意を增して面白いから、「神の」がよい。

堀川のおほいまうち君の四十の賀、九條の家にてしける　在原業平朝臣

櫻花ちりかひくもれおいらくの來むといふなる路まがふかに

時によめる

釋 ○堀川のおほいまうち君云々　藤原基經公の邸は、京の二條堀河にあつたので、世に堀河の太政大臣と稱した。この公の四十歳の壽筵を、別第の九條の家にて行はれた時、業平の詠んだので、賀は貞觀十七年の春の事である。○ちりかひくもれ　散り交ひて曇れ。○おいらく　老ゆらくの轉語。老ゆらくは、おゆるの延言である。しかしこの語は、老と同じ意の名詞として用ひられる。

大意　老といふ奴めが、來ようといふ沙汰のある路の、紛れて知れぬかのやうに、これ櫻の花よ、澤山散り交つて、そこらが闇く曇るやうにして呉れい。

評　さらば老奴も定めて踏み迷つて來得まいがの餘意がある。四十を老の山口とする事は、元來支那の典故に據つたことでもあるし、又老のくるといふのも、空想的な話說でもあるから、「來むといふなる」と人言に取り成した。折柄の賀宴に、櫻花の爛漫たるのを見て、常ならば一片も散るなと惜むべき花をも犧牲にして、今日ばかりは路も見えぬまで散れと命令した狂痴の想は、流石に業平である。かくて隱約の間に、この公の老を傷はしがつて居る氣持が動いてゐる。「老らく」の擬人は珍しくもないが、この歌では大事な中樞となつてゐる。

貞辰のみこのをばのよそぢの賀を、大堰にてしける日よめる　きのこれをか

龜のをの山のいはねをとめておつる瀧のしら玉千代の數かも

釋 ○貞辰のみこのをば　「貞辰親王」は淸和天皇第七の皇子で、母は藤原基經の女佳珠子の女御である。故に「をば」はこの姉君で、これも淸和の女御だつた賴子と斷ずる。「大堰」は山城國嵯峨の大堰の里である。其處に、この姉君の別莊でもあつたのだらう。○龜のをの山　龜の尾山、又龜山ともいふ。山城國葛野郡で、嵯峨の天龍寺の後の山。龜の甲の形した山なのでいふ。「尾」は借字で峯の義。字面に拘泥して龜の尾を引いた形と說くは穩かでない。前中書王の蒐裘賦には「吾將下入二龜緒之巖隈一、歸二蒐裘一而去來上」と作り、自註に「龜緒便龜山也、猶如二龜尾之讀一、故云」と見えた。○いはね　岩根。「根」はこゝでは輕い添辭。○とめて　尋ね求めて。○瀧のしら玉　瀧の水の岩に碎け散るのが玉の如く見えるのを、直に瀧の白玉と譬へた。「瀧」は垂水卽ち瀑布ではなく、激湍である。○千代　直譯では千年の意だがこゝは長壽の意に轉義してゐる。○かも　かなと同じ歎辭とするは粗い。「か」は疑辭。「も」は歎辭だから、カ、、、、、マアと譯する。

大意　あのめでたい龜の名に呼ぶ龜の尾山の、岩根を傳はつて流れ落ちる瀧水の白玉の多い數は、貴女の御長壽の數であるかまあ。

評　龜鶴を長壽の物とする事は、もと支那にはじまつた。卽ち鶴は藐姑射の山に住んで仙人の伴侶とされ、龜の

經あがつたと稱する白龜、綠毛龜の類は、神物として太平の祥瑞と目された。さればこれに擬へて言ほぎかはす事も、既に久しい習慣であつた。今は大堰の里に開いた賀筵なので、さし詰め其處の萬年も生きるといふ龜山を思ひ寄せ、巖も亦動きなき常磐の物なので、その龜山のその岩根をと取り竝べて、下句に、「千代の數」といひ出す襯染とした。激湍の飛沫、玉を跳らすその數は、とても數へ盡されないから、その人の齡の數に擬へるには全く適切だ。無窮を轉義して、「千代」と換へて呼ぶことは例の辭樣である。さて龜の尾山の瀧は何處か。想ふに、大堰川の龜山に沿つた激湍だらう。

貞保のみこの、きさいの宮の五十の賀奉りける御屏風に、
櫻の花のちるしたに、人の花見るかたかけるをよめる

藤原興風

いたづらに過ぐる月日はおもほえで花見てくらす春ぞ少なき

釋 ○貞保のみこ云々　「貞保親王」は清和天皇第五の皇子。「きさいの宮」は貞保親王の母后で、二條后藤原高子である。「五十の賀奉りける」は五十の御賀を執り行ひ申し上げたことをいふ。「御屏風」は御賀宴の時に立てるので、總べて賀に限らず事ある時は、主人公の背後に屏風を立てるのが、昔の習慣であつた。「櫻の花の散る下に人の花見る」はその屏風の繪樣で、「かた」は圖樣の義。○いたづらに　徒に。むだに。○おもほえで　思はれずして、の約轉。

大意　何の事もなしに過ぎて行く月日は、何とも思はれないでうか〳〵暮らすが、このやうに面白い花を見て暮らす春はサ、ひどく日數が少ないわ。

評 それ故つく〴〵惜しいの餘意がある。作者は屏風の畫中の人物の心になつて詠んだ。「花見て暮らす」と形容したので、いかにも長閑やかに娯しけな春の趣と見え、いと〻過ぎ去るのが惜しい心地がされる。多ければ宜からうと思ふ春は却つて少ないと打ち侘びたのに、人事の實相が暴露されたやうな氣がする。句題和歌、新勅選集に、大江千里、

年月にまさるものなしとおもへばや春しも常にすくなかるらむ

これは「歳時春日少」といふ題の歌である。この種の想は當時既に類型が多い。誰れも思ひ寄る口頭語だが、尤も適當な叙述で先鞭をつけただけえらい。抑も屏風の歌は、その圖樣に本づいて詠むは例の事で、賀の屏風だからとて、あながち祝賀の意にのみ拘泥しない。さればとて場合が場合だから、陰氣な事や不祥な事を描いたり詠んだりする譯もない。

三句、朗詠集におほけれどとあるは、率易で味ひがない。

本康のみこの七十の賀のうしろの屏風に、詠みて書きける

きのつらゆき

春くればやどにまづさく梅のはな君が千年のかざしとぞ見る

釋 ○本康のみこ　「本康親王」は仁明天皇第五の皇子で、八條の宮と號する。一品式部卿となり、延喜元年薨ぜられた。「うしろの屏風」とは、賀筵に親王の御座の後に建てる屏風。「詠みて書きける」は、貫之は歌書兩道の

名手なので、仰を承けて歌も書も皆自分で遣つた。○かざし　髪挿(カミシヅレ)の義。今いふ簪(カンザシ)はこの轉じた語。遊宴の折節に、冠の巾子の根に、時の花や造花を挿すことが、奈良平安時代を通じての風俗であつた。○見る　思ふといふに近い。

大意　春が來ると、この庭にまづ一番に咲く梅の花を、君が御長壽の春のお髪挿とサ存じますわ。

評　詞書には見えないが、これも人の家に花の咲いた繪樣の屏風で、その畫中の人物になつて、親王の御壽を賀いだのだらう。「まづさく」が「千年のかざし」に對して、時間上の反映となつてゐる。花を髪挿すのは卽ち樂しいすさび業だから、折に合つた見立である。

いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君に始めむ

素性法師

釋　○ありきあらずは　ありきあらざりきはといふべきを、上のをめぐらして、下の過去のきを略いた。○ためし　迹形(アトカタ)。手本(テホン)である。普通には例の字を書くが、よくは當らない。

大意　千年も生きた人は、昔にあつたか無かつたかは知らぬけれども、假令今まではそんな人の無いにもせよ、千年生きるためしは、君から始めませうよ。

評　「知らねども」と一旦撥ねておいて、「君に始めむ」と一途に思ひ入つた處に、高い狂熱が見えて面白い。二句の疊語、一正一反聲調がよろしい。

これ及び次の歌は、題畫の歌ではない。單に祝壽の意を述べたものだ。上の詞書に、「よみて書きける」とあるから、貫之のと同じく、これも素性の書いたのだらう。延喜六年二月十六日、襲芳舍(ハウシヤ)に召されて御屏風を書き、同九年十月二日、又召されて御前で屏風を書き、左中將源定方をして、酒及び祿を被けられた事が、物に見えるから、素性は貫之にも劣らぬ書道の名手と見えた。

初句、六帖にいにしへもとあるはわるい。

○

ふして思ひおきて數ふる萬代は神ぞしるらむわが君のため

釋　○ふして思ひおきて數ふる　臥して萬代を思ひ、起きて萬代を數ふる意。○萬代　萬年。○神ぞしるらむ　神こそ知食(シロシメ)して守り給はめの意。「しる」は只知るのではない。計らひ行ふをいふ。

大意　私が君の御爲に、寐ても起きても御年の數を、何卒萬年までもと指折り數へて願ひます事は、人の力にこそ及ばずとも、神がサこの心を御承知下されて、願の通りにお取り計らひなされる事だらうと思ふ。

評　初二句、起臥に萬代を思ひ數ふるといふべきを、切り離して對句を作つた。「臥して」「起きて」とあるに、平素不斷の意がある。景樹が「本來、わが君の爲ふして思ひ、おきて數ふると續くべきを、調に任せて『わが君の爲』を結句に置けるより、君の爲に神ぞしるらむの意を倒裝したる語勢となりて、『君の爲』の詞、全く神の方にのみ重く係りて、君の爲に起臥願ふの意は、却て疎くなれり。それも立ち離れたる心ならねば、さる方にかくも調べおろせるなり」と評したのは、尤もと思はれる。

三句、家集によろづ代をとある。

藤原三善が六十の賀によみける　在原滋春

鶴亀もちとせのののちはしらなくにあかぬ心にまかせはてゝむ

この歌はある人「在原の時春が」ともいふ。

釋 ○藤原三善　この人の傳不明。○しらなくに　知らぬによつて。「なく」はぬの延言。

大意 昔から人の長生の祝言に例へていふ鶴も龜も、共に長生するものとは聞き及んでは居るが、それも千年も經つた曉は、どうあるやら知らぬによつて、そんな例など引く事は止めて、貴公が何時まで居ても飽き足らず思ふ私の心のまゝに、君の御壽命を任せてしまひませう。

評 それが一番いゝの餘意がある。三句「知らなくに」と撥ねて調べ下した具合、上の「千歳のためし君にはじめむ」と同型である。拾遺集に、

萬代もなほこそあかね君がためおもふ心のかぎりなければ

貫之集に、

百とせといはふを我は聞きながら思ふが爲はあかずぞありける

とあるは、同想ながらこれに比べると狂熱が缺けてゐる。この歌の優れる所以は全く茲にある。

左註に就いて契沖は、「この歌滋春、時春の異を傳へたるに、當時二人とも亡き人にて慥に記せる物もなければ、多分に就きて滋春と載すれども、異說を捨てぬ心にて、註せるにやあらむ」と考へた。

よしみねのつねなりが、四十の賀に、むすめにかはりてよ　そせい法師

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の蔭にすまむとおもへば

釋 ○よしみねのつねなり　良岑經世か。「世を也と誤れるならむ」と眞淵はいつた。三代實錄に「貞觀十七年五月十九日庚子、從四位下行丹波守良岑朝臣經世卒」とある。その經世の四十賀に、娘に代つて素性が詠んだのである。「よめる」は一本に據つた。原本によみ侍りけるとあるが、この集の書式に協はない。○まつにぞ　待つに松をかけた。○いはひつる　「いはひ」はもと齋の義だつたのを、この頃は既に祝賀の意に用ひた。「つる」は現在完了の助動辭で、鶴を寄せた。○蔭　松の蔭に、父のお庇蔭を寄せた。

大意 私は父君の萬年の御壽命を待ちますから、そのまつといふ名の松に寄せてサ、お祝ひ申しますわ、丁度千年もいきる松の蔭に鶴の住むやうに、私も父君の變らぬお蔭を蒙つて、共に長く居ませうと存じますればサ。

評 祝宴や興宴に、洲濱臺を作つて捧げるのは、この時代の習慣であつた。年賀だからこれはおめでたい造物を洲濱に據るたので、松の蔭に鶴の立つて居る型を、金銀か何かで作つたと見える。松を父に、自分を鶴に擬へて、さて松の樹齢の千年は勿論の事だから、この上の萬年を待つといはひ、その理由としては、松蔭に立つ鶴のやうに、その變らぬお蔭を常に蒙りたいからといふ。「千年」は變らぬ、又は常磐の意の轉義である。松と鶴とのいひかけは、小細工過ぎて卑しけだが、親子の情から見ると、さうもあらうかと思はれる。或は經世の娘はまだ年端のいかないので、小娘らしくと構へて詠んだのかも知れない。素性の他作に似ない。素性は良岑氏だから、近い親戚關係で、この代作を賴まれたらしい。

上句、六帖に萬代の松にぞ年をいのりつるとあつて、貫之の歌とした。眞淵は貫之の歌ざまにあらずといつた。なほ案ずると、經世の四十賀をひき下けて、その歿年近くに行はれたものと見ても、貫之はその頃やう〳〵十歳以下の童兒だから、こんな歌を詠む筈がない。

内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季の繪かけるうしろの屏風に、書きたりける歌

春

春日野にわか菜摘みつゝ萬代をいはふこゝろは神ぞしるらむ

釋 ○内侍のかみ云々　「内侍のかみ」は尚侍。こゝのは贈太政大臣藤原高藤の二女滿子をいふ。（拾遺集に三條内侍とある人なり）「右大將藤原朝臣」は、高藤の三男定國の事で、泉大將と稱し、尚侍の兄に當る。躬恒集に「延喜五年二月十日、宣旨によりて奉れる和泉大將四十賀の料屏風四帖、内よりはじめて内侍督殿にたまふ歌」と詞書があつて、次の「山高み」の歌「すみの江の」の歌が出てゐる。貫之集にも「延喜五年二月、いづみの大將四十賀屏風の歌、仰言にてこれを奉る」とあつて、次の「しらゆきの」の歌が出てゐる。四季の繪かける屏風は、躬恒集に屏風四帖とあるから、春夏秋冬の繪を一帖宛にかいて、それに人々の歌を書かせたので、專ら醍醐帝の思召で出來た屏風である。さてこゝの歌ども、普通本には作者がない。又春の部だけ端に春の字が題してない。眞淵の說に「此度の歌七首に、今は作者を記さぬにつきて、この上の歌素性なれば、次々も皆素性の歌なりと思へるは誤なり。六帖、家集等に、各作者見えたり。その上、藤原家隆卿自筆のこの部を見しに、各名あり。さてこの歌は素性なり」とある依つて、この端書には「春」の字を補ひ、以下の歌には、作者の名を一々塡めた。○しるらむ　上の「ふして思ひ」の條參看。

大意 御賀の爲にかう春日野で、私が若いといふ名の若菜を摘み〳〵して、兄君の御壽命の長久をお祝ひ申す心願の程は、御先祖の春日の御神がサ、承知し御納受なさるだらう。

評 繪樣は若菜摘の所と見える。そこで奈良時代からの若菜の名所、春日野を思ひ寄せ、その野の春日明神は藤原氏の祖神なので、それをも撮合して、せめても君が老の若えるやうにと、名におへる若菜を摘むこの心は、わが祖神が御承知だらうと、尚侍自身が畫中の人になつて、祝つた趣に取り成したのが趣向である。上に、

ふしておもひ起きて數ふるよろづ代は神ぞしるらむわが君のため

と落想は同じい。いづれも素性のである。

四句、大和物語、新撰和歌、家集、六帖等にいのる心はとある。

山たかみ雲ゐに見ゆるさくらばな心のゆきてをらぬ日ぞなき　躬恒

釋 ○雲ゐ　空をいふ。○心のゆきて　心の往くに、滿足の意を寄せた。○をらぬ　折らぬ。

大意 山が高くて、空に見える櫻の花を、自身はとても往かれぬが、一枝ほしいと思ふ心ばかりが、其處まで往つて、その櫻の枝を折らぬ日はサないわ。

評 霞の上に表れた山の頂などに、櫻を畫いたのだらう。心の往くの擬人から、「春毎に心をしむる花の枝に」な

どのやうに、「心の往きて染まぬ日ぞなき」といふべき所を、「花」の縁語で、「折らぬ」と轉義した。六帖、躬恒集、家隆本によつて、躬恒の名を補ふ。

夏　友則

めづらしきこゑならなくに時鳥こゝらの年をあかずもあるかな

釋 ○こゝら　許多、澤山などの意。

大意 何時の年も同じ聲で鳴けば、何も珍しい聲では無いのに、あの時鳥は數多の年々を、さても〳〵聞き飽かない事であるよなあ。

評 幼く詠んだつもりだらうが、感哀が淺い。六帖、友則集、家隆本によつて、友則の名を補ふ。

秋　躬恒

すみの江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるおきつしら波

釋 ○すみの江　攝津國住吉郡。今の住吉神社のある所。古事記仁德天皇の條に「又定二墨江之津一」と見え、萬葉集には、住吉、墨吉、墨之江、須美乃延など書き、奈良時代までは、必ずすみのえとのみいつた。この集中に「住みよしとあまは告ぐとも云々」、又、和名抄に「攝津國住吉、須三與之郡」などあるので見ると、既に延喜前から、文字について唱へ謬つてきた事が知られる。古くは吉、愛通用して、皆エと訓ませてゐる。○ふくからに秋下「ふくからに秋の草木の」の條參看。○うちそふる　「うち」は添詞。○おきつしら波　沖の白浪。「つ」は連體。

大意 住の江の松を、秋風がうち吹くにつけて、どう〳〵と聲を打ち添へる、沖の白浪である事よ。

評 住吉の地は蒼い滄桑の變に遇つた。それは住吉社頭の松原は、その根を洗つて波の寄せるやうに、古歌古文には見えてゐるが、今は海岸を距る事、約二十餘町の西にある。蓋し木津川、大和川の土砂が堆積して、遂に陸地を作つたのである。さればその當時の實境を想像して、この歌の詩趣を辿らなければならぬ。和泉の灘より難波津をかけて、長汀極浦相參差し、住吉の濱を中心として、白砂青松相映じてゐた。海は卽ち茅停の海、右に由良の險灘があり、淡路島を前に控へ、左に播攝諸州の山を望む。烟波はる〴〵として一望窮りない。この時に當り、天風吹き落ちて颯と梢を拂ふと、一帶の長松はどう〳〵として、大濤の湧くにも似た響にうち合はせて、寄せくる沖の白波が、鳴高に聲打ち添へる光景は、言語に絶した趣である。しかも「沖つ白波」の立つのは、卽ち松ふく秋風の所爲だから、風の趣が一首の上にも活躍し、翠松と白波との配合も鮮やかで目覺ましい。眞に有聲の畫、否畫境は既に渾脫して、神品に入つたものだ。古來、餘情限り無き歌と稱せられ、眞淵は「所のさまに就きて面白きなり。かく其の所のさまを思ひ得て、心はあるがまゝに詠むぞ古歌なる」と評した。後世、この風調を冀ひて「聲打ち添ふる」の語を踏襲し、或はこの詩趣を模倣して詠んだのが夥しい中に、壬生忠見が、

秋風の關ふきこゆるたびごとに聲うち添ふる須磨の浦波

の作もあれど、最も勝れたものは大納言經信の、

沖つ風ふきにけらしな住よしの松のしづ枝をあらふしら波

で、躬恒に比べて、契沖は、及ばないといひ、眞淵は、大して劣らないといつてゐる。十訓抄には、

かの卿經信後に、俊頼朝臣經信の子息を呼びていはれけるは「古今に入れる躬恒が歌に、『住吉の松を秋風吹くから に聲うちそふるおきつしら波』。この歌、任大臣の大饗せむ日、わが所詠の沖津風の歌、中門の内に入りて、史生の饌に就きなむや」と。俊頼いはく、「この仰いかゞ。彼の御歌全く劣るべからず。然れども古今の歌たるによりて、限り有りて、先任大臣候はむに、御作は一の大納言にて、尊者として南階よりねり上りて、對座に居なむとこそ存じ候へ」といふ。「さてはさもありなむや、いかゞあるべき」とて感氣ありけり。又自讃していはく「躬恒が家集に歌多かる中にも、『松を秋風』の歌のたけ、品は、年丈けたる胡人の、錦の帽子したるが、尺八・琵琶を鳴らし、紫檀の脇息おさへて詩を案じ、嘯きて眺望したる姿なり。此の人に對ひてあひしらひつべきは、わが沖津風の歌にこそあれ」といはれけり。

と見えて、經信自身も、俊頼も、甲乙なきやうに思はれた。袋草子には、經信の語がやゝかはつて、

この歌の躬恒の をさす七間四面の寢殿の南面に、御簾所々破れたる中に、何宮など申して御座しまさむに參じて、中門の廊より入りて、寢殿の階の間に參りて給三言談二事はわが歌なり。

とある。これは兩者の間におのづから軒輊ある趣で、及ばぬ事を自覺されてゐるやうだ。又景樹が「住吉は岸打つ波の高き事世に聞えたれば、沖つ浪の聲など待つべきにあらず。實景にはあはざれど、さる屏風の繪樣にのみ從ひて詠めるがめでたきなり。經信のこそ、歌は劣れど實景なれ」といつたのは、妄も亦甚しい。なぜ住吉には、岸の波より外は詠まぬやうに窮屈に考へたのか。風波のないだ日こそ、岸ばかりにさゞ波が、折れ返つても居ようが、松を秋風の吹き拂ふ日は、沖が白波だつて騒ぐではないか。試みに岸の白波とおいて見るがよい。その詩境が殊の外に狹まり、その聲甚だけち臭く、とても一誦爽颯の氣があたりを拂つて、衣襟が汐氣に薫る氣分が出ない。但第二句の「松を」は上に、「秋風」は下について獨立しないのが、調のうへに於いて聊か口惜しい。これは白璧の微瑕である。

六帖には素性とある。素性集にも出てゐる。思ふにこの集の最初の流布本には、既にこの前後の名は皆脱けてゐたのだらう。それで上の歌の素性の署名を及ぼして皆素性の作とし、夙く六帖にも、何にも采つたと思はれる。その故は、拾遺集に、躬恒のとしてこれが再出してゐる。既にいつた通り、この集の歌が、後の勅撰集に再出したのは、必ず木爻に異同あるか、詞書又は作者に相違あるかの場合に限つた事である。歌も素性の風體ではない。

千鳥なく佐保の川霧立ちぬらし山の木の葉もいろまさり行く　忠岑

釋 ○千鳥なく　千鳥の鳴くを、後世は冬にのみ詠むが、古くは秋、又は春にも詠んだ。○佐保　秋下「佐保山の柞（ハヽ）の紅葉」の條に既出。○山の　佐保（ツヽ）山の。

大意　もう千鳥の啼く佐保川の狹霧が、きつと立つのらしい、それと知られて、この佐保山の木の葉も、段々色が增つて行くわ。

評 流れ川の向ふに紅葉の山を畫いた圖樣だらう。乃ち川を佐保川、山を奈良山に見立てゝよんだ。「千鳥鳴く」は、佐保川の形容として冠せたので、あながち今鳴いてゐるのではない。霧もまた繪のうへにない想像で、題畫の詠としては器用な趣向である。紅葉の露時雨や霧などに色付くは常套である。

拾遺集、六帖、忠岑集、家隆本に從つて、忠岑の名を補つた。さて拾遺集にも、家集にも、結句色かはり行くとある。眞淵いふ「賀の歌なれば色かはるといふ詞を忌みて、後に『色まさる』と換へたるにもあるべし」と。けれどそれは本末顚倒で、この集のは初から、「まさる」とあつたからこそ、拾遺集には今一說の傳に據つて、再び采錄したのである。下句、六帖にま木の梢も色付きにけりとあるのは深山の景色で、玆にはかなはない。

○

秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける

釋 ○ときは山　夏部、秋部下に出てゐる。○かしける　貸した。

大意　秋が來ても、木の葉の色も變らぬ常磐山では、時節柄紅葉の無いのもいかゞといふやうに、餘所の紅葉を風がサ持つて來て、この常磐山へ貸したわい。

評 山の名に絡つての趣向は、秋下にも、

もみぢせぬ常磐の山はふく風の音にや秋をきゝわたるらむ

などあつて、平凡ながら紅葉を風が貸すの擬人は尖奇である。いかにも題畫らしい作である。木立の茂つた靑山のあたりに、紅葉の打ち散つた繪樣だらう。

この歌、家隆本にも署名ないといふ、前のと同じく忠岑の作か。

冬　貫之

○しらゆきのふりしく時はみよし野の山下風にはなぞ散りける

釋 ○山下風　萬葉集には、山のあらしと訓んでゐる。けれどこれは、ヤマシタカゼと讀むがよい。もと萬葉の訓み違へから起つて、一つの詞となつたのである。

大意　この三吉野の里では、白い雪が頻に降る時には、山下風で、花がサ意外に散つたわい。

評 雪中の山の景色を描いた圖樣だらう。乃ち吉野に取り成してよんだ。景樹、廣蔭等が「芳野は花の名所なれば、雪を花と見たてしなり」といつたが、奈良時代からこの集の頃にかけては、吉野には雨雪、或は山水の勝をこそ詠んだが、櫻の花を賞する事は少ない。これは冬部に數多見えた趣向と同じ譬喩である事は、

山高みふりくる雪をうめの花散りかも來ると思ひつるかも　（萬葉卷十）

とある先軌をたづねて知るがよい。調子のよい外に、想に見るべき物が無い。

拾遺集、家隆本、貫之集に從つて、貫之の名を補つた。三句、六帖にあし引のとある。

春宮のうまれ給へりける時に、參りてよめる　典侍藤原よるかの朝臣

○峰たかき春日の山にいづる日はくもる時なく照らすべらなり

釋 ○春宮のうまれ給へりける時に　「春宮」は醍醐天皇第二の皇子で、保明親王と申し、御母は藤原基經の女、中宮穩子である。延喜三年降誕、同四年二月立太子。延長元年三月御病の爲、御齡二十一にて薨ぜられた。文彥と諡し奉る。○春日の山　大和國奈良にある。其處に藤原氏の祖神を祀つた事は、上の「春日野に若菜摘みつ

つ」の條にる

大意　頂の高い春日の山にさし出る日は、所柄曇る時もなく、世の中を照らすやうな樣子であるわ、といふが表面の意で、實は春日の神の御末の藤原氏の中でも、この上もない基經公の姫君の御腹に出來ました若宮樣だから、御行末天子とお成り遊ばされて、何時までも御仁德の曇る時もなく、天下に御照臨遊ばしさうな樣子で御座りますわい、といふが裏面の意。

評　昔は后妃のお產を宮中ですることはない。この中宮もお里の藤原家で、皇子をお娩みなされたのだ。作者はそのお祝に參邸して、この歌を詠んだ。お家柄、春日の神を取り出して、閥閲の高さを「峰高き」に、藤原氏出の皇子を「春日の山にいづる日」に擬へて、すべて譬喩を以て御行末を慶賀し奉つたので、巧である事は勿論、その語調の逞しく力ある事は巾幗の作に似ない。やがてこの皇子の東宮となつたのも、この歌の功力が關つたかも知れない。作者の參邸したのは、典侍として職掌上、皇子御降誕の御儀式に參與したものらしい。

古今和歌集卷第八

離別歌

題しらず　　在原行平朝臣

立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今かへりこむ

語　○離別歌　ワカレノウタと讀む。○いなばの山　和名抄に、「因幡國法美郡稻羽」とある所の山で、今も松が多い。稻葉山とも書き、又、宇倍山といふ。山下に稻羽川流れて、國府村がある。いにしへ國府を置かれた土地である。文德實錄に「齋衡二年正月、從四位下在原朝臣行平爲二因幡守一」とあれば、因幡國の稻葉山であることは明らかである。或說に、美濃國の稻葉山（今の岐阜）かとあるは、據のない臆說である。○立ち別れいなば　立ち別れて去ぬるの意に、稻羽をいひかけたので、將然の意で去なばとまでかけたのではない。○まつとし　松に待つをかけた。「し」は强辭。○今　口語のちきにの意。

大意　自分は貴方達に立ち別れて、因幡の國へ往きますが、その國の稻羽山に生えて居る松の名の如くに、貴方達が、私を待つとサ聞くならば、すぐに歸つて來ませう。

評　作者が因幡國に赴任の折の留別の作と思はれる。これが死に別れといふでもない、「待つとし聞かば」すぐに

逢ひに立ち歸つてこようからと、旅行く人が却つて見送る人を慰めた、別離の際の情致掬すべきものがある。況や因幡國は、京より下るに六日、上るに十一日を費すべき行程であつた。それを「今歸り來む」と譯もないやうにいひなした「今」の一語の常理を沒した狂想、詩味湧然として生ずる心ちがする。「去ぬ」と「歸る」とを闘はせ、又いひかけを一首のうちに再用したなどは、この作者の慣手段である。すべて親句の續いたのは面白くないものなのを、四五句の續きが疎句に仕立てられてあるから見直されてしまふ。但萬葉集卷十三、

門に居るをとめは内に至るともいたくし戀ひば今歸り來む

はこの藍本らしい。しかも修辭の點に於いて、これは一段の巧技を弄してゐる。更にいふ、この「歸りこむ」及びこれに類する辭樣は、多くの場合、實際にその意志があるのではない。出來ることならさうしたいといふ希望を、決定の將然にいひなしたのである。國司は私に任地を離れることは法の禁ずる處である。假令故人が待つと聞いたとて、歸れる筈でもない。況や「今」歸るは尙不可能である。そんな理窟は全くぬきにして、情の動くに任せたのが面白い。

又眞淵が、「いなばの山は、萬葉集に、陸奥の小田郷より金を出しゝを、『陸奥山に黃金花咲く』と詠める如く廣くいひしこそよけれ、法美郡稻羽の郷の山とせむは、狹くて古人の意に非ず」と評したのはいかゞ。「峰に生ふる松」といふこまかな取り成しは、因幡の國の山といふが如き、漠然たる廣義の叙法を許さない。それは不調和の滑稽に陷るからである。

よみ人しらず

すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ

釋 ○すがる　和名本草に、「蠦蟜一名土蜂、一名螺羸、一名細腰、和名佐曾利」とあるも同じ物で、世に似我蜂といふ土蜂である。小野博は、似我蜂に就いて一說を立てゝ曰はく「全身深黑色に、腰甚細く絲の如き小蜂、夏日人家に飛來り、筆管中などに入りて巢を造り、子を養ふが爲に、蛛を螫し傷めて其の中に入れて、泥にて塗り塞ぐ。管内にて鳴く聲、似我々々と云ふに似たり。又靑蜂といふ一種の小蜂も、似我の聲あり。いづれならむ」といつてゐる。舊說、及び顯注、密勘等に、鹿の事としたのは、下に萩原とあるによつた臆說である。

○はぎはら　萩の多く咲いた野。

大意　このやうに、螺羸の鳴く秋の萩原を、朝立つて旅へ行く貴方を、さてまあそのお歸を、何時と思つてか待ちませうぞ、あゝ何時とも知れぬ待ち遠い事でありませう。

評 送る人送られる人、そもどうした關係か知れないが、祖帳既に別を叙して、なほ袂を分つに忍びず、送つて郊外螺羸鳴く萩原に到る。その纏綿の情致が思ひやられる。「朝」の一語、啻にその出立の時刻を點出しただけに止まらず、秋氣淸爽として露白く花紅なる萩原に朝影を受けて、さうした蟲どものすだく面白い景氣が想像される。蓋しかう極力その背景を詳叙したことは、別離の狀を强く印象させて、再會期遙なる歎嗟の意を佑けるものである。一旦別れたら「何時とか待たむ」であり、さりとてこの場に臨んで別れぬ譯には往かず、痛し痒しで途方にくれた光景で、情景兼ね到つた妙作。

眞淵が、古事記に、鳴をナスと訓んだのに據つて、初句の鳴を借字として、すがるなすと改めていふ、「螺羸の子は一度巢を立ちては又歸り來らぬ由、その如く別れ行きては歸の知られぬ人なれば、何時とか待たむと歎

きたるなり」と解いたのは牽強である。況や蜾蠃の子云々も、本據のしかとしない臆說である。又宣長が初句を「萩原」の序詞と見たのは粗である。

下句、六帖に旅行く人のをしまるゝかなとあるのは面白くない。

○

かぎりなき雲居のよそに別るとも、ひとを心におくらさむやは

釋 ○雲居　例の空のこと。○ひとを　對手の人をさす。

大意 限もなく遠いあちらの國に、今から別れて私は行くとも、不斷貴方の事を心に置いて、跡になどのこして置きませうか、いや何所までも、心には貴方を連れ立つて行きますわ。

評 東の間も忘るまじき交情を婉曲に叙べた。その構想の尖巧なのは、格調のあまり高くない所以であらう。「雲居のよそ」は遠方の轉義である。大和物語に遍昭の詠としたのは、全然信ずべからざる小說であるが、口吻はほんに相似て、その下作に儔する。

結句、舊本にをくらさむやはとあるに據つて、眞淵が「心に隈なく守りて小暗さむやはの意なり」と解いたのは、牽強も甚しい。を文字の假名遣であることは勿論である。顯注に引いた大和物語にをくらざらめやとあるも、當時の謬に從つた假名遣で聞え難い。又四句、大和物語一本に人に心をとある。これもいかゞ。類從本大和物語は、四五句とも本行のと同じい。

小野のちふるがみちのくの介にまかりける時に、母の

よめる

たらちねの親のまもりと相添ふる心ばかりはせきなとゞめそ

釋 ○小野のちふる云々　小野千古が陸奥介に任ぜられて赴任した時に、その母の詠んだ歌といふこと。「介」は國司の次官。○たらちねの　親にかゝる枕詞。奈良の頃までは、母といふ語の枕詞としてのみ用ひられ、たらちしの、たらしねのとも轉じていつた。足の義で、母の慈愛を讃した詞だらう。○親のまもりと　「の」は口語のがの意。「と」はとしての意。○相添ふる　「相」は互になどいふ意もあるが、こゝは接頭語で、只下の動詞の意を強めるに止まること、なほ相顧ふ、相變るの相と同じい。○せきなとゞめそ　堰き止むるなの意。關を止める關も、堰き止めて下さるな。

大意 附き添つて一緒に行くことは叶はずとも、この母が子の爲の守にと思つて添へて遣るこの心だけは、往來行人を誰何して、通書文など無い人は押し止めて通さなかつた。されば、この親心ばかりは止めて下さるなと愁訴した。心だけ分けて子に添へて遣れるものでもないが、そんな分別は忘れてしまつた處に、あり難い尊い眞摯な親の熱愛と詩情とが動く。

さだときのみこの家にて、藤原のきよふが、近江の介にまかりける時に、馬のはなむけしける夜よめる

けふ別れあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき　きのとしさだ

釋 ○さだときのみこ云々　貞辰親王の家で、藤原清生が、近江介となつて赴任しようとする、その立振舞した夜に詠んだ歌との意。「馬のはなむけ」は、いにしへ旅行く人が乘つた馬の鼻面を、その行くべき方へ向けて祝ひ言して立たせ遣るが本で、轉じては送別の宴を開くをいふとも、驛路の端設の略とも、旅立つ人の馬の鼻へ向けて物を贈つたのから起るともいふ。こゝは送別の宴である。今では略して、はなむけとばかりいつて餞別の事とする。○あすはあふみ　明日は逢ふ身といふに、近江を寄せた。

大意　貴方の赴任なされる近江の國は京隣の程近い處ゆゑ、今日は別れても明日はすぐに逢はれるこの身ぞとは思ふが、さすがに別といへば名殘が惜まれて、猶豫するうちにはや夜が更けたのであらうか、これこの通り袖が露ほいことよ。

評 いや〳〵これは露ではなくて、別の悲しさに溢れた涙なるはの餘意がある。そんな交通不便の時代ですら、僅々一日のうちに往來される隣國なので、別離とはいへ涙を落して騒ぐ程の事でもないのを、「袖の露けき」とまで誇張してゐる。四句は、これが爲に假設した前提だから、實に夜の更けたのでもあるまいが、おのづから別離の名殘惜しさに時の移るを知らなかつた趣が聯想されて、流石に無駄でない。二句を、契沖、眞淵、宣長等の、逢ふに近江國をかけたものとして、明日は逢ふ程に近い近江國と思へどもの意に解したのは、理のたじろぐことを忘れたものである。「逢ふ身」といへばこそ「袖の露けき」に打ち合つても聞えるのである。國の名は物名として詠み込んだまで、ある。

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとは聞けど春霞たちわかれなば戀しかるべし

釋 ○かへる山　和名抄に、越前敦賀郡に鹿蒜郷がある。其處の山を加比留山といひ、又轉じてはかへる山ともいつたのである。眞淵が「歌の寄せにて、さてかへる山に歸るを寄せ、かへる山と轉じいへるなり」と解いたのは本末顚倒で、名詞を私にいひ改めて聞える筈がない。○春霞　「たち」にかゝる序詞。

大意　北國には、追付け無事でお歸りなされる、かへる山といふ頼もしい名の山があるとは聞いたが、それでもこの節の春の霞の立つやうに、立ち別れて往かれたならば、定めて戀しうありさうなわい。

評 未だ出立せぬ以前に、別後の離情を豫想して、その人の許に詠んで贈つたのである。「春霞」は山の緣で時節の景物なのを、「立ち別れ」の序詞に用ひた。故に契沖が「春霞と共に立ち別れて」といひ、宣長が「あの霞の立ちてある方へ立ち別れて」といふ、いづれも誤つてゐる。想ふに、その人は外官などで赴任したものか。さては一定の任期を終へると、必ず歸つてくる筈なので、其處の山の名に寄せて、「歸ることあり」といつたのだらう。「聞けど」の一語、足いまだ他郷の土を踏まぬ郡人士の口吻。

人のうまのはなむけにてよめる　きのつらゆき

○をしむから戀しきものを白雲のたちなむのちは何ごこちせむ

釋 ○うまのはなむけにてよめる　餞の席上にて詠めるとの意。○をしむから　「から」はよりの意。○白雲の

「たち」にかゝる序詞。

大意　別を惜むよりはや未だ出立せぬ貴方が、かうも戀しいものを、それをまあ空の果に見える白雲のやうに、立つて遠くへ往かれようその後は、どのやうな心持がしませうぞ。

評　「をしむ」は眼前惜別の情で、「戀しき」は別後の情である　それを混一にして、別れ切らぬうちから戀しいといふ浸理路の言は、鍾情の極で、「たちなむ後は何ごころ」の下句の力強い前提を成してゐる。實際離苦は豫想してさへも耐へられない。況や實現の曉は何心地と、不定の疑問を用ひたのに、測るべからざる多大の愁恨を寄せた。

三四の句、六帖に春霞たちわかれなばとあるは、前の紀利貞の歌を謬り混じたるものと思はれる。家集は、四句のみ六帖と同じい。

ともだちの、人の國へまかりけるによめる　在原しげはる

別れては程をへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

釋　○人の國　他國。狹義にはわが住處をもとにして餘所の國をいひ、廣義にはわが國をもとにして外國をいふ。伊勢物語に「この男、人の國より夜毎に來つゝ、笛をいと面白く吹きて」とあるは狹義。「人のみかど」などいふは廣義である。さてこの端詞は外國への旅行のやうでもない。內地の旅行ならばこの上下の歌のやうに、越の國、あづまの國など書くべき筈だが、想ふに出先の國が不明な爲に、止むを得ず「人の國」と書いたのだらう。

○程　道程。時間の意に用ひるは俗意である。

大意　一旦別れては、久しく逢はれぬ遠い道のりを隔てる事と思へばかして、一方にはお顏を見て居ながら、一方には案じ慣きがせられて、今からもう戀しく思はれますわ。

評　「かねて戀しき」の上に、かつの副詞が一つ略されてある。見て居ながら戀しいといふ矛盾を捉へた尖新な着想だが、あまり說明的で、叙法がくだ〳〵しい。乃父業平朝臣に詠ませたなら、かうはあるまい。

あづまの方へまかれりける人に、よみてつかはしける　いかごのあつゆき

おもへども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

釋　○あづま　日本武尊の東國征伐の時、御妻橘姫が上總の海に沈まれたのを歎いて、碓氷の坂で東を顧みて、吾妻者也と仰せられたので、坂東の國々をあづまといひ、後々は、逢坂の關から東の國をも弘くいひもした。さてその行手の道をあづま路といつた。

大意　何程思つても、身を二つに分けられぬによつて、お供は協はぬかはりに、目には見えない私の心を貴君に添はせてサ、はる〴〵遣りますわい。

評　公務などに支へられて、一緒に出立されないので、さりとて「身をし分けねば」と、わが苦心の尋常でない趣をいひ送つたのである。三句は何たる冗語と思はれたが、詞書のやうを見ると、同伴はさておき、見送りにさへ行かないさまだから、或はそれらの怠慢を模稜すべく、目に見えぬ心を引き出したるものか。すると輕く看

過されない大事な句になる。上の「人を心におくらさむやは」と、その意が表裏である。韓偓の詩に、

身情長在暗相隨、生魂隨君々豈知。

に比すると、巧拙天壌の差がある。又伊勢物語の業平の詠に、

おもへども身をしわけねば目がれせぬ雪の積るぞわが心なる

は、二三の句が全く符合してゐる。けれど主想が差つてゐるうへに、彼は例の詞足らずであるが、これは隈なくいひ徹つてゐる。

あふ坂にて、人をわかれける時によめる　なにはのよろづを

あふさかの關しまさしき物ならばあかず別るゝ君をとゞめよ

釋 ○あふ坂にて云々「あふ坂」は相坂、逢坂、合坂と書く。山城近江の國境の山で、近江國滋賀郡に屬してゐる。關を置かれた事に就いては、日本記略、延暦十四年八月己卯に「廢三近江國相坂剗二云々」文德實錄に「天安元年四月庚寅、始置三近江相坂大石龍華等三處之關二云々。相坂是古昔之舊關也云々」などある。「人を別れ」は眞淵いふ「この集に、人の旅行に別るゝには、人をといひ、わが行くには、人にといへり」と。然し萬葉集には、その差別がない。廣蔭說に、「人を別るといふは正格なり。にの音は、似る、煮る、膠など、渾べて密着の義を持てるなれば、人に逢ふとこそいへ、人に別るとはいはれぬ言なり」と。音義からは尤もと思はれるが、言語は生命を有する活物であるから、あながちに泥むべきではない。

大意 關は人を止める所であるが、この逢坂の關がサ、果して正しい物ならば、殘り多いのに氣强く別れて行くこのお方をせき止めてくれよ。

評 わが引き止めたく思ふ人が、關守の誰何をも蒙らず、見すゝ越え行くのが恨めしいので、汝逢坂の關よ、この遊子をとゞめて、關の關たる實を示せと誂へたその構想はやゝ面白い。當時の逢坂は關守なしの開け放しであつた。契沖が「あふ坂の名には心を着くべからず」といつたのはよい。眞淵、宣長等が、逢ふの意義を兼ねたやうに解いたのは拘泥の見で、早く詩味の一半を沒了するものである。

題しらず　よみ人しらず

唐ごろもたつ日は聞かじ朝露のおきてし行けばけぬべきものを

この歌は、ある人つかさを給はりて、新しき妻につき、年へて住みける人をすてゝ、たゞ「明日なむ立つ」とばかりいへりける時に、ともかうもいはで、詠みてつかはしけり。

釋 ○唐ごろも　唐衣。唐は韓又は支那の意に用ひ、又美稱として用ひる。こゝは美稱と見てよい。唐衣裁つといふより「立つ」にいひかけた枕詞である。○朝露のおきてし　「朝露の」は序詞で、「の」は如くの意。露の置くに、人を打ち置く意をかけた。○行けば　木下幸文いふ「行かばなりけむを、もと行はと書きたるより行けばと訓み誤れるなるべし」と。本文のまゝにても聞えないこともないが、行かばは更に妥當である。依つて、幸文の考に從ふ。

大意 御出立の日をば何時といふことは、私はもう聞きはすまいと存じます。なぜなれば、私を捨てゝ朝露の

置くやうに跡に置いてお出なさらば、私の身はその朝露の消えるやうに、消えてしまひさうに存ぜられますものを。

評 それをもなほ見捨てゝ行くのは、餘り無情な仕打だと自覺して、若し思ひ直りもするかと、一縷の望を萬一に繋いだ可憐の情致は、同情に堪へない。棄てゝ往つたら生きては居ませんといふ勝氣な氣性ではなくて、生きて居られませんといふ弱々しいはかなげな氣性なのである。それだけ餘計に同情が惹かれる。夕露といはず、朝露といつたは、朝立つことが旅行の常慣習だからである。この三四の續きは、貫之の、

長き夜を思ひあかして朝露のおきてしくれば袖ぞひぢぬる

と同巧である。又死ぬべきの意を露の緣に寄せて、「消ぬべき」と轉義した。枕詞と序詞とで、上下に排對の辭樣を取つた。

左註は、大やうこの歌の事情を悉したやうであるが、上來の例に據ると、これも後人の所爲だらう。けれども眞淵の「誰といふ男、誰といふ女、何の司、何の書にありといふべき事なるを、さはなくて、かく浮きたる事のみ書くは、用なき事なり」と難じたのは偏してゐる。その實は確かでない事でも、世間一般にいひはやして捨て難いものもあるではないか。

ひたちへまかりける時、藤原のきみとしに詠みてつかはしける　寵

朝なけに見べききみとし憑まねば思ひたちぬる草まくらなり

釋 ○藤原のきみとし　公利とも書く、本朝文粹、三善清行が異見封事中に、備中介になつた事の見えた人である。

○朝なけに　「朝な」は朝にの轉語。「け」は來經の約語だから、「けに」は常にの意。連ねて毎日の意と解する。○見べき　見るべきの意。○思ひたち　思ひ斷ちに、思ひ立ちをかけた。○草まくら　菰、菅の類は勿論、何にまれすべて草で造つた枕をいふ。旅にかゝる枕詞に用ひる。古の旅行には、驛舍の設がなかつたので、草を引き結んで枕とした故、草枕する旅といふ意の續きである。雅澄の說には、草枕把ぬの意を旅にかけたともいふ。こゝは草枕を直に旅の意に轉用した。なほ、足引のは山、玉鉾のは道の枕詞なのを、後には直に、足引を山、玉鉾を道の意に用ひた例に同じい。

大意 とてもいつも逢はれさうな貴方樣とは思ひ憑まれぬ故、あきらめて思ひ立ちました、今度の旅で御座りますわ。

評 よもやに惹かされて人の無情を怨みつゝある人、失望の極、世間の消息を絕つた住所を求めようと出で立つた。それでもなほ去るに臨んで、戀々の情躊躇の態のない譯にはいかない。「思ひたちぬる草枕」、眞に斷腸の語である。結末殊に力量が見える。さて「きみとし」に人の名の公利、「おもひたちぬる」にさして行く國の名の常陸、「草まくら」に我が名の內藏を詠み入れた。抑もこの作者の名は、寵アナ、寵メグムウツクシム又、襲カサヌなど、異本まちゞゝである。清輔奧儀抄にウツクと訓んであるのは、うつくしむの畧で、寵に從つたものと見える。經典釋文、寵字を寵とも書く、字冠穴冠通用するは隸書の常である。齋藤彥麿の說に「この女の夫か兄か、內藏寮の頭助允などの官の時に、內裏へ參りたる女にて、呼名を內藏といひしが、草書にて書きたる二字を一字と見謬りて、上の三字の如くには、寫しひがめしならむ」とある。極めて適解と思はれるから、これに據つて結句に、我が名の內藏を詠み入れたものと定める。煩はしいほどに名詞を斷ち入れたが、更に斧鑿の痕の

ないのは、巧手と稱へてよい。

紀のむねさだが、あづまへまかりける時に、人の家にやどりて、あかつき出で立つとてまかりまうししければ、女の詠みて出せりける　よみ人しらず

えぞしらぬ今こゝろみよ命あらばわれや忘るゝ人やとはぬと

釋 ○紀のむねさだが云々　「むねさだ」、如何なる字を塡てゝよいか明らかでない。傳未詳。「まかりまうし」は罷申と書く。暇乞である。さて人の家から旅に出立するのは、方違への爲に宿つたものと思はれる。中昔の頃は、天一神といふ神の天を周りあるくが、其の運行の方に向つて行くと凶事があるといふので、必ず行くべきことのある折には、一先づ他所に宿つて、方を違へてから行く習慣があつた。こゝは素より知合の女の許に宿つたのである。○えぞしらぬ　知り得ぬの意。○今こゝろみよ　「今」は口語の追つ付けに當る。「こゝろみよ」は試して見よの意。○命あらば　我が命のあらば。○人や　「人」は、こゝでは女から男をさしていつたのである。

大意 何方が頼もしいか頼もしく無いかは、ソレヤ今はわかりませぬ、私は貴方にお別れ申してからが、生きて居る空はないが、萬一にも命あつて生きて居るなら、長い間に私が忘れるか、貴方が音信れても下さらぬか、二つ一つのところを追付け試して御覽なさいよ。

評 雲山萬里を隔てゝ、長い年月を重ねたら、移り易い女心は甚だ覺束ないものだらうなど、男のいつたのを承けて、論より證據「今こゝろみよ」の一冷語を下して、さう仰しやる貴方自身こそあぶないものだの意を寓してゐる。日頃疎々しい振舞などした彼れ、慙死せずに居られようかい。「命あらば」は、我が思ひに堪へかねて焦れ死ぬべきことを豫定して、男の薄情な反映とした。含蓄あり曲折あつて、面白い歌である。但氣格はさう高くない。

二句、六帖に今こゝろみむとある。これは我が試みむといふ意である。景樹は「本文の如く試みよと人に下知する意ならむには、命あらばも人に係るべし。何故に人の命を覺束なむにか理り立たず。旅の門出にもゆゝしき語なるをや」といつて、六帖に從つた。けれども上文のやうに解けば、本行のまゝで仔細はなからう。

あひ知りて侍りける人の、あづまの方へまかりけるをおくるとて　ふかやぶ

雲居にもかよふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

釋 ○あひ知りて　多く男女の語らひをした中にいふ。上の二首も男女間の別離だから、これもその儔だらう。○人に　對手を指す。狹義に使つてある。

大意 雲のある程遠い所へ、貴方が往かれても、私の心は何時も貴方の居る方へ通つて、跡に後れて居ねば、詰りこの身だけが、今別れて跡に殘ると、貴方に見えるばかりですよ。

評 上の「かぎりなき雲ゐのよそに別るとも云々」と表裏してゐる。心と身とを二つに分けて、別々に取り扱つたことは詩的である。「私の心はどんな遠方でも貴方について往きます」。遠い〳〵東の旅に赴く人に取つて、こ

んなあり難い嘘はなからう。

二句、六帖に深き心のとある。

友のあづまへまかりける時によめる　よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立ち別れこゝろをぬさとくだく旅かな

釋 ○白雲の　白雲の如くの意。「こなたかなたに」の句を隔てゝ、三句の「立ち別れ」の「立ち」へかゝる序詞である。下に「秋霧のともに立ち出でて別れなば」とあるも、「秋霧の」は立ちにのみかゝつて、「ともに」といふ詞にはかゝらぬのと同じである。○ぬさとくだく　ぬさの如く碎くの意。「ぬさ」は神に捧ける布帛であるが、こゝは旅行く時、道の神に手向の料として幣袋に入れた五色絹の切幣で、細かに切り碎いた物だから、幣の如く碎くといつた。

大意　貴方は遠い東へ、私はこの都にとあちこちに、恰も大空の白雲の立つといふやうに、立ち別れて、道の神に手向けるこの幣のやうに、心を千々に碎いて悲しまれる、貴方のお旅立でありますことよ。

評　行く人は、峠の社頭に幣を捧げて行旅の平安を祈り、送る人は、油然として白雲の生ずる天の一方を望んで、袂を別つに忍びない。眼前の光景に詩材は多々あらうが、これぞ殊にこの白雲と幣とを借り來つて、斷腸の情を叙べた所以であらう。同一の譬喩法を襲用したが、煩冗の感を與へない。

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける　つらゆき

白雲の八重にかさなるをちにても思はむ人にこゝろへだつな

釋 ○みちのくに　「みちのく」は陸の奥の略だから、國の字を添へると、みちのくの國といはずばなるまい。上の「常陸へまかりける」の例によれば、陸奥へであらう。さてはに文字は冗字。○八重に　「八」は多量多數の意を表する。七重に次ぐ八重の意ではない。○をち　口語のあち、あつちなどの意。萬葉集に、彼此をヲチコチと訓んである。

大意　今お出になる白雲の幾重にも重なつた彼地でも、貴方を思ふ程の人には、必ず心をお隔てなさるな、假令あの雲は隔てゝあらうとも。

評　その「思はむ人」といふは外ならぬ私の事サと、落着させるいひなし、巧である。かうよそ〳〵しく自身を取り扱つた點に、婉曲の味が生ずる。上句、限りなく遠い趣が見えた。雲の縁で「八重にかさなる」から「隔つな」ときたのは例の手づまで、親昵過ぎるが、かうした叙法は當時の流行である。

人を別れける時によめる

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみて佗しかるらむ

釋 ○人を別れ　「を」の辭の說は上に既出。○しみて　染みてと同語。

大意　別といふことは、色でもありもせぬに、何でこのやうに、心に沁みぐ〳〵となつて、仕方も無くつらいのであらうぞ。

評　「心にしみて」から色の語を聯想して、これを反喩に扱つた。すべて細くからびた仕立、これも一體である。三四の句間に、何故(ナニナニ)にの語を含めて婉曲にした爲に、大人しい安らかな氣分になつてゐる。初句、六帖にわかるてふとある。別と名詞にいつた方が二句へよく出合ふ。

あひ知れりける人の、越の國にまかりて、年へて京にまうできて、又かへりける時によめる　凡河内躬恒

かへる山何そはありてあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ

釋　○何そはありて　「何そは」は何それはの意。この語古來釋き得た說がない。この何は、口語の何大シタ事デモ無イ、何驚クニ及バヌ、などの何で、末に必ず否定の語か、反駁の詞かを現はすべき格である。故にこゝは、何それは在つて在甲斐の無いの意に解するがよろしい。下の戀二「命やは何。そは露のあだ物を云々」の歌をも參照して、通はせて心得られたい。

大意　越の國のかへる山は、彼地へ下られた貴方の、再び都に立ち歸る名ぞと、これまでは賴もしく思つて居つたに、何それは在つて在甲斐(アリガヒ)の無いので、その在る甲斐といふのは反對に、久し振に來た貴方が京には留まらずに、又彼地へ歸るといふ名でサありましたわい。

評　山の名の「かへる」は、此方へではなくて、彼方へ歸る意である事を、始めて合點したといふ。「來てもとまらぬ」は卽ち歸ることであるが、「かへる山」の名と重複するのでいひ換へたのである。「あり」の語の反復何でもないことだが、調子の滑かさを覺える。けれどもとく山の名に縋つた緣語の仕立で、弄舌の妙こそあれ、氣味に至つては、則ち索然としてゐる。

六帖に、作者を市原のおほきみとあるのは誤だらう。

こしの國へまかりける人に、よみてつかはしける

よそにのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬわが身は

釋　○白山のゆき見る　白山の雪を、「行き」にかけた序とする。雪見るに、行き見るをかけたとする說はわるい。白山は加賀國能美郡にある。今は音讀してハクサンといふ。越前にも同名のがあるが、打ち任せて、雪など詠むべき高山でない。越前、加賀、能登、越中、越後のあたりは、すべて古の越の地で、京畿より越路に入つて、先づ目につく高山は雪を載く白山である。故に越の白山の名が世に高い。白山の名も雪によつてゞある。

大意　今からは、餘所にばかり戀しく思つて、月日を送ることでありませうか、とても雪深い白山のある越路へ往つて、貴君にお目に懸かられさうにも思はれぬ私の身はサ。

評　公務に支へられて、心に任せぬ身なので、「ゆき見るべくもあらぬ」といつたらしい。平凡の着想、わづかに「白山のゆき見る」の弄語が一ふしを成すのみ。

音羽山のほとりにて、人を別るとてよめる　つらゆき

音羽山木高くなきてほとゝぎす君がわかれを惜むべらなり

釋 ○音羽山　夏部「音羽山けさこえくれば」の條に既出。○木高く　梢高くの意　小高くと心得てはいけない。

大意 この音羽山の梢高く鳴いて、時鳥があれあの通り、貴方の別を惜むやうな樣子でありますわ。

評 時鳥の聲を聞いて、あれは君が別ゆゑに鳴くのだといふ推定は、卽ち旣に君が別に泣いてゐる作者であることを證する。しかも心無き鳥獸すらも愁へ歎くは、卽ち別れ行く人の重きを成す所以で、客を借りて主を形する筆法である。杜牧の、

蠟淚有レ心還惜レ別、　替レ人垂レ淚到二天明一。

は、詩材こそちがふが、同想の同叙と見える。「木高く」は、山の端の梢あたりに鳴く景色であるが、おのづから鳴く音の高く聞えた趣も響き合ひ、鳴く音の高いに、別を惜む心の一通りでない態も聯想される。音羽山に木高くといひ、又梢を詠むことは、その木茂き實景から來たものだらう。細心の作ではあるが、一往自然のやうである。又、唐僧無悶の詩に、

杜鵑不レ願離人意、　更向二落花枝上一啼。

同一の詩境同一の詩材で、有情無情の取り成し、比較してその好處を曉るがよい。

藤原の後蔭が、唐物のつかひに、なが月のつごもりがたに
まかりけるに、うへのをのこども、酒たうびけるついでに
よめる

藤原のかねもち

もろ共になきてとゞめよきりぎす秋の別は惜しくやはあらぬ

釋 ○藤原の後蔭が云々　後蔭が唐物の使に任ぜられて、九月の晦方に西國へ出立した時に、殿上人達がその餞別の酒を酌んだ序に詠んだ歌との意。「唐物の使」は唐國、渤海國等の商船の、筑紫に着いた時、その積荷を檢校して、珍奇の貨物は收公して都に奉りなどする爲に、遣はされる使である。武家の世となつては、唐物奉行といつた。「晦方」は月の下旬。「たうび」は賜びの音便である。この本文は、うへのをのこどもを主とした書き方だから、自他が差つてゐる。たうべとなければなるまい。「たうべ」は賜はりである。飲食することを、口語に、タベといふも同語である。○もろ共に　自分と共にの意。これを秋の別と、人の別との二つをいつたとする說は、甚だその謂れがない。

大意 蟋よ、共々に泣いてとめて呉れよ、今この秋の暮れ行く別は、惜しくは無いことか、どうして惜しいことであるわ。

評 壺々のあたりに、唧々と鳴き出した蟲の聲をやとひ來つて、秋の暮れようとするを惜んだのは表面の意で、實は秋行く人の別を惜んだ暗喩である。筑紫の往復は公程として一月半、それに公務執行の時日を加へたなら早くて二月を要する。況や旅行の苦患は今日の人の想像以上であつた當時とすると、いよ〳〵旅行く人がいたはしくもあり、隨つて別れ難くも感ずる。けれども公事は私情で如何ともし難い。ひたすら別淚の催すに堪へず、汝も手傳つて泣いて止めよと、はかない蟲の聲をも力頼みとする纏綿の情緒、あはれ深いものがある。

平もとのり

秋霧のともに立ち出でて別れなばはれぬおもひに戀ひや渡らむ

釋 ○秋霧の　「立ち出でて」の「立ち」に係る。「出でて」には係らない。○はれぬおもひ　胸の開くことない物思。

大意　秋霧の立つと共に、貴方が立ち出でて、お別れなされてしまつたならば、私は今からあの霧のやうに、晴れぬ心の物思に、何時も貴方を戀しく思つて、月日を過すことでありませうか。

評　霧の緣語を以て、「立ち」「晴れぬ」など修飾した。これも上と同時の歌で、殿上の夜宴と覺しいから、夜霧の立ち渡つたのを見て詠んだらしい。されば畫の歌として、「おもひ」に日をいひかけ、霧に曇つて日の晴れぬのを胸の晴れぬに擬へたとする說は、成り立たない。

源のさねが、筑紫へ湯あみむとてまかりける時に、山崎にて別をしみける所にてよめる　しろめ

いのちだに心にかなふものならば何か別の悲しからまし

釋 ○源のさね云々　「源實」は官右近衛少將に至つた人。「ゆあみ」は湯浴で、筑紫によい溫泉があつたので、湯治に行つたのである。「山崎」は山城河内攝津三國の堺、淀川の北岸に當る。京より西國に通ずる咽喉の地で、延喜時代には、京に上下する船場であつた。土佐日記にもこの趣が見えてゐる。○心にかなふ　思のまゝになるをいふ。

大意　貴方をお留め申すことは協はずとも、せめて自分の命なりとも心任せになつて、お歸まで長らへられるものならば、何のこのお別が悲しからうぞ悲しくもありませんわ。

評　しかし心に協ふ命でないから、やはり別は悲しいと落着する。現代の人の目からは、筑紫あたりの湯治の別に命をかけるのは、餘り大袈裟過ぎる嫌ひはあるが、八束鬚胸前に垂る益荒雄すらも、上に見えるやうに、唐物の使を送るといつては、「鳴きてとゞめよ」「晴れぬ思に戀ひや渡らむ」など詠みあつた時代だから、女の情ではましてであらうと思ふ。それに聊か誇張を加へられたら、これ位の事は當然である。景樹が、「生得か弱き人なりけむ」などいつたのは、餘り事情に疎い穿鑿である。杜甫のいはゆる生別常惻々で、焦れ死にして貴方のお歸の日に逢へないかも知れないと、不安を豫測して眼前の別愁に耽る。實に直情のあらはれで、辭旨悽惋に沈痛に、直に人の肺腑を刺して、一聲一涙、一字一珠。この作を思ふと、白女は遊女ながら實に立派な人格者であつたらしい。又いふ、作者は江口の遊女であり、源實は延臣である。しかも深く馴れ呢んだ間柄であつたらしい。後の者だが大江匡房の遊女記は、よくこの間の消息を說明してゐる。

自山城國與渡津浮巨川西行一日、謂之河陽、江南北、邑々處々、分流向河内國、謂之江口、到攝津國、有神崎盤島等地、比門連戸、人家無絶、倡女成群、棹扁舟看船舶、以薦枕席、上自卿相下及黎庶、莫不接朴第施慈愛、又爲妻妾、殁身被寵、雖賢人君子不免此行、長保年中、東三條院參詣住吉社天王寺、此時禪定大相國被寵小觀音、長元年中、上東門院又有御行、此時宇治大相國被賞中君、延久年中、後三條院同幸此寺社、狛犬僊等之類、竝舟而來、人謂神仙、近代之勝事也、相傳曰、雲客風人、爲賞遊女、自京洛河陽之時、愛江口人、刺吏以下自西國入江之輩、愛神崎云々。

上下淫蕩の風見るやうである。既に宇多法皇巡幸の途次、この作者、幷に大江玉淵が女の遊女などに、謌を賜うたことがあつた。

結句、六帖、金玉集等に悲しかるべきとあるは、風調がやゝ劣りざまである。

山崎より神なひの森まで、おくりに人々まかりて、歸りがてにして、別をしみけるによめる　みなもとのさね

人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ

釋 ○山崎より云々　「神なひの森」は、秋部に見えた大和國のとは別で、山崎の南の山邊にかゝつて向日明神といふがある。その後方の、今かうなひの森といふ所である。「歸りがて」は歸りにくいの意。○人やりの道　人の遣る道。我が心から行く道でないのをいふ。○大方は　大抵はの意。○いきうし　往きづらいの意。「いき」は往きの古言。○いざ　率ふのいざで、誘ひ出す意の發語。

大意 今度の旅は自分の心からで、何も人に遣られて行く道中ではないので、折角止めて下されるお志を、振り切つて行くもいかゞだから、大抵は往くが大儀とかこつけをいつて、さあ歸つてしまひませう。

評 次の詞書を併せて見ると、前のと同時の歌である。然らば湯治行きの私の旅で、公務などに關した人やりの道でないことはいふまでもない。されば自發的によしてよされぬ事はない。とはいふものゝ湯治療養も亦身に取つて大事である。既に山崎で袂別の情を十分叙したのを、なほ神なひの森まで慕つて來てくれた人々の志は格別である。「いざ歸りなむ」はこの芳情に酬いて、離愁を緩和する爲の挨拶で、歸らうといふのは却つて歸らぬ人の所言である。そこにその胸中の葛藤が見える。上の行平朝臣の「今歸り來む」と似た趣があつて面白い。

「今はこれより歸りね」と、實がいひけるをりによめる　藤原のかねもち

慕はれてきにし心の身にしあれば歸るさまには道もしられず

釋 ○今は云々　上の詞書を承けた書きざまである。なほ別れかねて、何處までも送らうとする樣子なので、もうこれからお歸りなされと、源實がいつた時に詠んだ歌との意。○きにし　「し」は過去の辭。○心の身にし心に付いた身でサの意。「し」は强辭。○歸るさま　口語の歸りしなといふに當る。

大意 此處まで來たことは、抑も貴方のお跡が慕はれて、自然に引かれて來た心故の身でサあるから、貴方を置いて今歸れと仰しやられても、歸りしなには道もわかりませぬ。

評 これも心と身とを分解して、別々に取り扱つた。應酬の語、おのづからかうなるのも仕方がないが、上句は說明に過ぎて面白くない。以上三首のうち、これが最も劣つてゐる。

藤原のこれをかが、武藏の介にまかりける時に、おくりて、逢坂を越ゆとてよみける　つらゆき

かつ越えて別れも行くか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

釋 ○藤原のこれをか　傳不詳。集中の作者には紀惟岳といふ人があるが、氏がちがふ。○かつ越えて云々　惜みて引き止める一方には、坂を越えて別れ行く意で、「かつ」といつた。千秋が、逢坂を越えながら且別れ行く

の意に解いたのは杜撰である。「かつ」は「越えて」に係つて、「別れ」には係らない。「か」は歎辭。○人だのめ　人に憑ましめる意が本で轉じて、人に憑もしけに思はせて頼みにならぬ意に用ひる。

大意　逢坂は人に逢ふといふ名なのに、今別を惜んで居るそばから、この坂を越えて別れてまあお行きなさることよ、これでは逢坂といふ名は、人憑めな、あてにならぬ名でサあつたわい。

評　上に躬恒が、「歸る山何そはありて云々」と詠んだのに似てゐる。萬葉調を陳腐と卻けた延喜の歌仙等が、更に一生面を開かうとあせつた餘弊は、語言の窠套に陷つて、測らず後世の俑を作つた。拾遺集に、物へまかりける送り關山までし侍るとて、と詞書して、

別れゆくけふはまどひぬ逢坂は歸りこむ日の名にこそありけれ

これも貫之の作である。いづれも着想の出發點が面白くない。

大江のちふるが越へまかりける馬のはなむけによめる　藤原かねすけの朝臣

君が行くこしの白山しらねどもゆきのまに〳〵跡はたづねむ

釋　○大江のちふる　大江千古。參議音人の子で、仕へて從四位上伊豫權守式部權大輔になつた。この時は、北陸地方の介、椽などの官で、赴任する折と見える。○ゆきの　雪に行きを寄せた。

大意　貴方の行かれる北國の白山あたりは、私の不案内の道ではあるが、雪の深い處と聞けば、貴方の踏んでゆかれたその雪の足跡のまゝに、お跡を尋ねて私も參りませう。

評　白山は、聲調のうへから、「しらねども」の語を喚び起し、緣語のうへから、「ゆきのまに〳〵」の句を引き出し、さてその雪はまた「跡」の一語を呼び出してゐる。恰もとん〳〵拍子、口拍子になつたものゝやうである。人に立ち後れては、都に一人ゐる心地せぬ由で、そんな不知案内の處でも後から尋ねて行かうといふ。離情の切なのは素よりだが、やはり誇張の言であらう。實に尋ね行かうといふのならば、却つてこれ只言であり、僧父の言である。

人の花山にまうでゝきて、ゆふさりつかた歸りなむとしける　僧正遍昭

夕暮のまがきは山と見えななむよるは越えじと宿りとるべく

釋　○花山　春下「よそに見て歸らむ人に」の條に既出。山城國山科の花山の元慶寺である。「ゆふさりつかた」は夕方。○まがき　間垣の義とも、馬垣の義ともいふ。和名鈔に、「籬和名末加岐以レ柴作レ之言二疎籬一也」とある。○見えななむ　過去の助動辭のなと、希望の助辭のなむと重なつた詞。

大意　夕暮の闇の紛れのこの庭の籬は、どうぞ山と見えて貰ひたい、夜は山が越えられまいと思つて、あの歸らうとする人が、今宵は此處に宿を取るやうにサ。

評　上句を下句で解釋した叙法である。さる大寺の夕間暮、築地や垣やの隈々が黑ずんでほのかな物蔭から聯想して、山に譬へた。蓋し夜山は越えられるものでない。旅人は昔から警戒してゐる。越え易い籬を、越えにくい山、しかも夜山に、あの客人達の眼に映じてくれとの希望、實は客人の別を惜む意に外ならない。破天荒の

空想で、詩膽斗の如きものがある。これぞ遍昭の壇場で、當時の歌仙の、遙かに及ばぬ點であらう。誠少なし、と評せられたのも、これらの風體に就いての事であらう。

三句、顯昭本に山と見えぬかなとあるはわるい。

山にのぼりて、歸りまうで來て、人々わかれけるついでに

よめる　　幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむとめじとめじは花のまに〳〵

釋 ○山にのぼりて云々　山は比叡山である。王朝時代には比叡山の延暦寺を山、三井の園城寺を寺とばかりいつた。眞淵いふ、「歸りまうで來てといひながら、歌に山の櫻とよめるは、幽仙の住める坊は、西坂本などにありけるが、其處まで歸りまうで來て、人々と別るゝなるべし」と。これは幽仙が慈覺に就いて、未だ修業中、山にゐた頃の事としてよい。又思ふに、天台座主記に、第九長意和尚の項に、幽仙律師を隷して、「仁和寺根本師、彼寺別當建立人也」と見え、又、

昌泰二年十二月十四日官符任二別當一。口傳云、幽仙元慈覺弟子、後任二仁和寺別當一云々。依二本習一申二任延暦寺別當一云々。

と見えた。されば眞言宗の僧で、仁和寺別當を勤め、又さる所緣に依つて姑く延暦寺別當に任じたので、折々山に上つて、その職務を執つたものとすると、人々とおなじく麓まで下りて來て、別れる時も山の主人方の位置に立つて、別を惜んだものかも知れない。

大意　さてお別れ申すは甚だ殘念ではあるが、愚僧がいろ〳〵申しても、お止まりはなさるまいによつて、この上は別といふことをば、この山の櫻に一任してしまはうわい、貴方達を止めうとも止めまいとも、それは花の心任せサ。

評　とても心なく花を見捨てゝ歸られはすまいの餘意がある。歸る歸らぬは人々の御心のまゝといふべきを、花のうへに移して擬人にいひはてたのは、婉曲である。人々個々の胸裡に伏藏してゐる一片の風流心に訴へて、花に辜負する罪の容易ならざるべきを暗示した。もしもこの人達が風流を以て自任する風雅男であつたなら、止まらずには居られないことになる。作者の狡獪手段は頗る妙といはう。

六帖に、二句峰のさくら、結句春のまに〳〵とある。春は誤寫であらう。

うりん院のみこの、舍利會に、山にのぼりて歸りけるに、櫻の花のもとにてよめる　　僧正遍昭

山風にさくらふきまき亂れなむ花のまぎれにたちとまるべく

釋 ○うりん院のみこ云々　雲林院の親王が比叡山延暦寺の舍利會に參詣なされた歸りに、お送の爲にお供申した遍昭、及び幽仙等が、櫻の蔭で詠んだ歌との意。「雲林院」のことは春下「櫻ちる花の所は」の條に既出。「雲林院の親王」とは仁明天皇の皇子、常康親王のこと。「舍利會」は佛骨供養の法會である。叡山の舍利會は貞觀二年から始まつた。○山風に云々　「山風に吹きまき」といふは、自他が差つてゐる。吹き捲かれでなくては協はない。吹き捲きがもとのまゝならば、初句の助辭と三句の自他とを直して、「山風は櫻吹き捲き亂らなむ」

とあるべきである。○花のまぎれ　散る花の紛れ。

大意　山風はこの櫻の花を吹き捲いて、散り亂して貫ひたいわい、花の散り亂れるに紛れて、歸る道が知れぬといふので、君がお止まりなさるやうにサ。

評　落花雨三片、縞素の衣を撲つて、互に別れ難くする光景が想ひやれる。平生は散るなと希ふ花を、今日は「道まがふまで散れ」といふに、別を惜む情の甚しさが見える。この妙處は、既に賀部の業平の歌、

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道まがふかに

の條に說明しておいた。詩材も構想も、兩者相同じである。但遍昭のは貞觀八年、業平のは貞觀十七年の作だから、これから彼れは出たものか。業平朝臣は有數の歌仙で、あへて人の歌を拘ふものではない。暗合か。結句、家集に君とまるべくとある。その方が意が明晰である。

ことならば君とまるべく匂はなむ歸すは花のうきにやはあらぬ　幽仙法師

釋　○ことならば　かくとならばの意。春下にも見えた語。殊ならば、如ならば、など釋いた說は誤つてゐる。○君　雲林院の親王をさす。

大意　櫻の花よ、どうせこのやうに咲き匂ふ程ならば、君の殘り多く思し召してお留りなさるやうに、咲き匂つて貫ひたいわ、お歸し申すは、花よ其方の努力が足りないので、其方が憂いことではないか、まさに憂いことであるぞよ。

評　この法師、上には、「別をば山の櫻に任せてむ」と詠み、これは又、今一歩を進めて、別をとむる責任は素より花の上にあるものとして、歸すは汝の不面目ではないかと詰責した。これ草を打てば蛇動くの筆法で、暗に親王のお歸りなさるのは花に面目を失はせる所以だからと、必ずお止まりなさるやうに諷示した。寄詫の興、味ふべきものがある。

遍昭も、幽仙も天台僧であるが、山の住僧ではない。故に舍利會がはてゝは、親王と同道下山されたのである。すると遍昭のは、この一行全體にかけて、「立ち止まるべく」といひ、幽仙は親王の御うへをのみ「君とまるべく」といつて、別を惜しんだのである。

仁和のみかど、みこにおはしましける時に、布留の瀧御覽じにおはしまして、還り給ひけるによめる　兼藝法師

あかずして別るゝ涙瀧にそふ水まさるとやしもは見ゆらむ

釋　○仁和のみかど云々　春上の「君が爲春の野にいでて」の條に既出。○瀧にそふ　瀧の水に添はる。○しも川下。

大意　殘り多くてお別れ申す愚僧のこの涙が、瀧に添つて流れますわ、定めし水が增ると川下では見えることでござりませうか。

評　この法師、抄物に大和國城上郡の人とあれば、石上附近の住僧で、親王の布留の瀧見の御案内に出たものであらう。或は石上の良因院などの住持かも知れない。涙の流水に和する構想は、詩に大分多い。

一含相思涙、臨レ江灑二素秋一、碧波如レ會レ意、却與向レ西流。
潮中有二妾相思涙一、流到二樓前一更不レ流。

の類である。さて涙の水に瀧の水、量において非常の懸隔のある物を配した。勢ひ奇句が生まれてこなければならぬ。果して「水まさるとや」の誇張、白髪三千丈の李謫仙をも後へに瞠若たらしめる。かくて別恨の深さも見えるのである。又一面から見れば、布留の瀧はさう大いして大きな瀧でないとも、これによつて想像される。實際瀧としては甚だ小さなものであるのだ。

かむなりの壺にめしたりける日、大御酒などたうべて、雨のいたう降りければ、夕さりまで侍りて、まかり出で侍りける折に、さかづきをとりて　つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

釋 ○かむなりの壺云々　「かむなりの壺」は襲芳舍のこと。これは秋上「かくばかりをしと思ふ夜を」の條に既出。「大御酒」は下されの酒をいふ。「さかづきをとりて」は杯を持ちての意。

大意 あの前栽の萩の花を、この雨に濡らすは惜しいものではあるが、それよりもお別れ申す貴方をば、なほの事惜しいとサ思ひますわ。

評 眞淵いふ、「この歌は、兼覽王に杯をさすとて歌へるなり。伊勢物語にも、『狩して天の川に至るといふこゝろを詠みて、杯はさせ』とあり。源氏物語にも、源氏の御許へ、今上も院も出でまして、おの〳〵御歌をとなへて、御杯をさゝせ給ふことあり。歌を唱へて杯をさすが、古へのみやびなり。奥儀抄にも其の由見ゆ」と。まことにさもあらう。抑も貫之、躬恒等は、この集撰著の爲に、雷鳴の壺に召されたこと〻見えるから、これも必ずその折の事と思はれる。

兼覽王は王氏ではあるが官位はひくいので、今回の勅撰集の事に、奉行か何かで關係してゐた人ではあるまいか。今日しも貫之等は撰集の事で、雷鳴の壺に召され、始めてこの兼覽王に謁し、共に賜餐に列して、いよいよ退席の前に、まづ一杯と兼覽王に薦めたものらしい。折柄の秋雨は壺庭の萩の上に濺いで、そのあたらしい光景は、奈良時代の歌人の、一再ならず繰り返して歌つた如くである。乃ちこの詩材を配合して、その雨中の萩以上に、只今お別する君を「惜しとこそ思へ」と、天にも地にも兼覽王の他には人が無いやうに取り成した。當坐の頓作としては一寸面白い。

とよめりけるかへし　兼覽王

をしむらむ人の心を知らぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

釋 ○とよめりけるかへし　前の歌を受けて書いた詞書である、しか〴〵と貫之の詠んだその返歌との意。○時雨と　時雨の如くの意。和名抄に「驟雨小雨也之久禮」とある。秋冬の交の小雨を時雨といふ。冬季にのみ限るは後世のことである。○ふり　時雨の降りに、身の舊りをかけた。「身の舊り」は老い行くをいふ。

大意 そのやうに、一寸の別でも私を惜しんで下さる程の貴方のお志を、知らないでをります間に、私の身はサ、この秋の時雨の降るといふやうに、舊く年寄つてしまひましたわい。

評　傾蓋の遲きを憾んだ意が顯然としてゐる。卽ち貴君にそんなあり難いお心持があつて下されたのも知らないで、年經ましたといふ挨拶を、折柄の時雨を點景に使つて述べた。景樹の說に「若からましかば未遠く交り語らむをと、知己に逢ひて餘齡少なきを悔めるなり」とはいひ過ぎである。「身ぞふりにける」は、旣に老境に臨んだ人の口吻と聞えるものゝ、さまでの頹齡ではあるまい。抑もこの作者は惟喬親王の長子である。親王は貞觀十五年に、廿六で薨逝せられたから、その十七八の頃の御子と見ても、この集撰著の延喜の四五年には、やつと四十一二である。四十を初老とする支那風の習慣のまゝに、これは詠んだのである。必ず景樹の說に從ふとすると、大抵同年配と見える貫之、躬恒を前に置いて、我れ一人老い朽ちたやうに歎いた譯になつて、穩やかでなくなる。又景樹は「調高し」と評したが、何それ程のものでもない。「秋の時雨とふる」のいひかけも、後人にしば〳〵模倣されて、折角の一ふしも陳腐になつた。

兼覽のおほきみに、はじめて物語して、別れける時によめる　みつね

○別るれど嬉しくもあるか今宵よりあひ見ぬ先に何を戀ひまし

釋　○兼覽のおほきみ云々　上のと同じ時の歌であらう。兼覽王は躬恒のみならず、貫之とも初對面の筈なことは、「をしむらむ人の心をしらぬ間」と詠んだのでもわかる。○あるか　「か」は歎辭。○あひ見ぬ　「あひ」は逢ひの意。相の意ではない。

大意　悲しい筈のお別を致せど、考へて見ればそれとても嬉しうございます事よ、なぜといふに、お目にかゝりましたればこそ、お別れ申すこともあれ、今夜より未だお目にかゝらぬ以前において、何を戀しく思ひませうぞ。

評　「別るれど嬉しくもあるか」と、先づ矯語を放つて注意を引き付けておいて、さて其の解說を與へた。素より別れぬに增した事はないが、それは出來ない相談なので、第二義を以て姑く滿足した。抑も會者定離を苦と觀ずることは、事實何處でもおなじ事だ。況や佛敎が盛んに宣傳してゐたことである。この一般的思想に對して一寸一轉捩を試み、苦中に樂地を發見した。笑の中に涙あるを認めるがよい。これを離合集散を一つにした洞達の見などと早合點しては、大きな謬であらう。なほ春下「殘りなく散るぞめでたき」の評語を參照してほしい。「今宵より」の句は、「あひ見ぬ」を隔てゝ、「先に」にかゝる。

題しらず　よみ人しらず

あかずして別るゝ袖のしらたまは君が形見とつゝみてぞ行く

大意　殘り多く思つて別れる袖の涙は、まるで白玉と見えるが、この白玉は貴方のお蔭で出來たもの故、貴方のお形見と存じて、大事に袖に包んでサ行くわ。

評　泣きつゝ別れ行く人の作である。おのが涙を人の形見と取り成したのを一ふしとする。さて涙を「白玉」と暗喩して、玉は貴重な物として物に包みなどするから、大事にするの意を轉義して、「つゝみて」といつた。又、上に「袖の白玉」とあるに讓つて、袖に包みてといふべきを略いた。袖に包むは元來作者の創語ではない。法華經の表裏珠の典故で、前代からいひふるして居たことである。とにかくこの一語に、人目をかねて涙を抑へ

てゐる、作者の態度がほの見えて面白い。

○

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はむ日までに

釋 ○そぼち　濡れ透る意。そぼ濡る、そぼ降るなどのそぼも同語である。

大意 この別を限りも無く悲しく思つて泣く涙に、濡れ透つたこの袖は、なか〳〵乾きはすまいわ、又と逢はう其の日まではサ。

評 無窮の離愁に沈まむことを、取り越し苦勞したので、修辭の巧はないが、率直の作である。萬葉集卷十二に、

白妙のわが紐の緒のたえぬ間に戀むすびせむ逢はむ日までに

國遠みたゝには逢はず夢にだに我れに見えこそ逢はむ日までに

朝霞たなびく山を越えていなば我れは戀ひなむ逢はむ日までに

などあると、同調の古歌である。「逢はむ日までに」は、逢はむ日までは の意と同じなことは、萬葉の語例を見て知られる。

○

かきくらしことはふらなむ春雨に濡衣(ヌレヂヌ)きせて君をとゞめむ

釋 ○かきくらし　「かき」は接頭語。「くらし」は暗くする意。奈良時代には搔暮(カキキク)しといつた。○ことは　上の春

下「ことならば咲かずやはあらぬ」のことと同語。○濡衣きせて　奈良時代には、濡れた衣の意にのみ用ひたが、平安時代になつては、無實、寃名の意に轉用した。こゝはその意。

大意 この春雨よ、とても降る程のことならば、いつその事空も搔き暗まして、強く降つて貰ひたいわ、さうしたら、こんな雨降りではと雨に無實をいひかけて、別れて往く人をお留め申さう。

評 雨に雪に托しても、君を留めようとする、これら濃艶な情緒は直に人の心魂を魅するものである。霏々たる細雨の夕、門に臨みて人の歸るを送る、その況致が想ひ遣られる。

初句、顯昭本にかきくづしとあつて、「人のいたく物言ふをも、かきくづしてとこそ申せ」と注した。源氏物語の語だが、こゝには協はない。

○

しひて行く人をとゞめむ櫻花いづれを道とまどふまで散れ

釋 ○しひて　強ひて。

大意 何程止めても止まらずに、無理やりに歸つて行く人を止めようと思ふわ、櫻の花よ、あの人がどれを道とも迷つてえ行かぬ位に、散つて呉れよ。

評 上なる、

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道まがふかに　（賀）

山風にさくらふきまき亂れなむ花のまぎれに立ち止まるべく　（別）

と同一の構想。しかも「老らく」の歌は、殊に奇想を加へてあるから、最も優れてゐる。但「しひて行く」は面

白い。何でもかでも止めたい心持が、この一語によつて反撥される。なほ委しくは、上二首の條を參看。

志賀の山越にて、いし井のもとにて、物いひける人の別れ

けるをりによめる　つらゆき

むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな

釋 ○志賀の山越にて云々　「志賀の山越」は春下に既出。「いし井」は石井である。岩ある處に清水の湛へてあるをいふ。古くは、いはゐといつた。「物いひける人」とは、男同志にいふ詞でないから、この「人」は女である。○しづく　涓滴。○山の井の　山の井の如くの意。「山の井」は、山清水を堰き溜めた井。詞書の「石井」と同じ物である。○あかで　飽かでの意。梵語に水を阿伽といふより、山の井の阿伽に、飽かでをかけたといふ説は、穿鑿過ぎる。

大意 山の井は淺くて、掬び上げる手から落ちる雫の爲に忽に濁るゆゑ、思ふやうに飲み足らぬ殘り多い物であるが、丁度その如く、殘り多いのにまあ、貴方に別れてしまふことよ。

評 三句までは、「あかで」にかゝる序である。石井の水は山越の途中では、息づきの爲に誰れもその一杯は汲まずには通れぬ水で、我れも人も立ち寄つて幾掬びする間に、互に一言二言詞をかはし初めたが、忽に東西と別れてしまふ。逢ふも別れるも極めて假初な事ながら、深く惜まれるやうに詠み成したのが、趣向である。眼前の景趣を借り來つて、序の材料に用ひた。萬葉集卷十一、

泊瀬川速見早瀬をむすびあげて飽かずや妹ととひし君はも

の類型であるが、彼れは修辭にやゝ粗朴の嫌がある。六帖に、

むすぶ手の岩間をせばみおく山の石垣清水飽かずもあるかな

は酷だ似てゐるが、なほ「雫に濁る山の井」の、形容の妙を悉したのに遠く及ばない。掬び上ぐる手の股より雫の滴り落ちると、透き徹つた水底の砂が攪き亂されて、忽に濁り果てた淺く涼しい山の井の狀、見るがやうである。俊成卿の風體抄にいふ、

この歌、「むすぶ手の」とおけるより、「雫に濁る山の井の」といひて、「飽かでも」といへる、大方すべて詞毎のつゞき、姿心限りなく侍るなり。歌の本體は、只この歌なるべし。云々。

拾遺集に、再びこの歌を擧げて、次に「三條内侍方違へに渡りて歸るあしたに、雫に濁るばかりの歌は、今はえ讀、まじと侍りければ、車に乘らむとしける程に」と詞書して、貫之、

家ながら別るゝ時は山の井の濁りしよりもわびしかりけり

この詞を見れば、俊成卿以前、作者現存の當時に於いて、既にこの歌が嘖々の好評のあつたことが知られる。但、風體抄に、歌の本體のやうにこれをいつたのは、過褒の甚しいもので諾きがたい。又拾遺集のこの歌の詞書に、「女の、山の井に手洗ひむすびて飲むを見て」とあるは、歌の上には適はぬやうである。

道にあへりける人の車に、物をいひつきて、別れける所に

とものり

離別歌

したの帶の道はかた〳〵別るともゆきめぐりても逢はむとぞ思ふ

釋 ○道にあへりける云々　「人の車」は女車であらう。「いひつきて」は言ひ寄り着きての意。つぎと濁つて、人してその車に物をいひ繼ぐ意とする釋は協はない。○したの帶の　したの帶の如くの意。「したの帶」は上衣の下締の帶をいふ。眞淵いふ、「裝束の下に着たる物の紐をいふ。いにしへ、帶と紐と通はしていへり」と。契沖が、「下の帶は、道の枕詞なり。伊弉諾尊、日向檍原にして御祓し給ふ時、帶を投げ給ひしかば長道磐神となる。これ道の神なり。よりて帶の道とは續けたり」と解いたのは、贊成が出來ない。「下の」といふ語が、それでは無用となる。○かた〳〵　片々の意。○ゆきめぐり　行き巡りの意。

大意 下の帶をするに、はじめは端の方が兩方へ別れるが、廻して結ぶと、又出合ふものであるが、その通りに、今往く道はかう右と左へ別れて往くとも、又そのうちに是非とも出合はうと思ひますわ。

評 詩にも歌にも、衣帶に託して思慕の情を寓することが多い。中にもこゝの譬喩位恰當なのは尠からう。下の帶は、上の帶に對した名稱と思はれる。但こゝは肌付の帶の稱でなく、たゞ下締の帶である。袍や直衣の上の帶は、只一重まはりで前に結ぶ。下の帶は、二重にも三重にも締りのいゝやうに廻して結ぶ。かく必ず行きめぐる筈の物を譬喩に使つて、「逢はむとぞ」おもつたのである。希望に實現性のあることを豫期したことは、深い懇情をもつた趣を說明する。萬葉集卷十一、

玉の緒のくゝり寄せつゝ末つひにゆきは別れず同じ緒にあらむ

の類想とおもはれる。

古今和歌集卷第九

羇旅歌

もろこしにて月を見てよみける　安倍仲麻呂

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

この歌は、「昔なかまろを、もろこしに物ならはしに遣はしたりけるに、あまたの年をへて、え歸りまうでこざりけるを、この國より使まかりいたりけるに、たぐひてまうできなむとて出でたりけるに、めいしうといふ處の海べにて、かの國の人、うまのはなむけしけり。よるになりて、月のいと面白くさし出でたりけるを見てよめる」となむ語りつたふる。

釋 ○羇旅歌　タビノウタと訓む。昔は年月を亘るのでも、只一夜二夜でも他泊すれば、すべてこれを旅といつた。○もろこし　漢土、卽ち支那。○あまの原　「あま」は大空をいふ。「原」は廣い所をさしていふ語。海原、野原など皆同義。○ふりさけ見れば　見ようとする方に振りのけて見るをいふ。これは遠く物を見る時の態度である。萬葉集に、振放と書き、又、振仰而を、フリサケテとも讀んである。「ふり」は接頭語。「さけ」は、放又は、離の義である。○春日なる三笠の山　春日に在る三笠山の意。春日は大和國添上郡にある鄕の名。もと、

糟垣の義より出たといふ。三笠山は御笠、御蓋とも書く。春日神社の鎭座ましますの後方の山をいふ。○かも「か」は疑辭。「も」は歎辭。

大意　大空を遙かに見渡すと、東の日本の方に月が今さし昇るが、あの月は以前わが故郷の奈良の京に居た時、春日の三笠山に出たことであつた月かなあ。

評　「春日なる三笠の山」と續けて、月を取り合はせて詠むことは、奈良時代の歌に例が頗る多い。蓋し三笠山は奈良の都の東方に聳えてゐる故である。作者は元來、磯城郡安倍郷出身ではあるが、幼時から學問研究に奈良の京にゐたので、三笠山の月はいつも見慣れて、深く腦裏に印象して居つたらう。故に他國他郷に月を見ては、直に京の三笠山を聯想して、宵々毎に待ち出でし時代を回想し、人を憶ひ、郷土を懷ひ、本國を思ふ。いかに晴れ渡つた夜の月であつたらう。「かも」の用法、極めて輕くて殆ど歎辭に近い。故郷で見た同じ月か否かとまで、疑問したのではない。この詠歎の情味に、わが思ひの外の異郷にさすらつて、月を見ることを悲傷した意が隱然としてゐる。又「見れば」とあるを、「出でし月かも」と承けたとばかり見ては、上下の意が齟齬する。これは二句の下に照應すべき詞のあるのを略いたのである。即ち二句と三句との間に、月こそはさし昇れ、その月はといふ詞を補足すると、始めて完全の意義をなすのである。この歌の簡淨な所以も、この省筆から生ずる。風調高邁で、更に工を須ひないが蘊含の妙があり、感愴窮り無く、神韻縹渺として、體格雄渾である。そもく作者仲麻呂が、元正天皇の靈龜二年、遣唐使多治比縣守に從つて、留學生として入唐したのは、十六歳の時であつた。舊唐書東夷傳に、

其偏使仲滿、慕中國之風、因留不去、改姓名爲朝衡、仕歷左補闕、儀王友衡、留七十年、好書籍、放歸鄕、逗留不去、云々。

そのいかに唐土の文化に眩惑して、父母の國を忘れ果てたかゞ窺はれる。抑も朝廷の留學生を彼の土に遣はされたのは何の爲か。彼が長を取りわが短を補はうの思召ではなかつたか。英大の給費、巨多の賜暇、以てその學業を成就させたのに、忘恩背信の渠れは、大使の歸國に伴はず、唐の位に居、唐の粟を食ひ、唐の衣を着、唐の天子に仕へて、祕書監となつて、無上の光榮を博したことゝ思つて居たであらう。あはれ、この得意滿面の渠れ、渠れも亦人である。たまく失意あり、憂苦あり、病苦あり、名利の迷雲時に晴れて、本性の月明らかに照る時、獨坐無聊の時に當つては、懷土望鄕の念がそこに湧然と起つてきたであらう。法顯三藏が天竺に往つた折、途中漢の扇を見ては悲しがり、病に臥しては漢の食を希つたといふではないか。越鳥は南枝に巢ひ、胡馬は北風に嘶くとあるではないか。頭陀の境涯ですら、鳥獸すらさうである。さては長安一片の月に鄕思動くこと萬里、端なくこの一篇の佳作を貽し來つたものだらう。かくてこれらの動機は、三十五六年間も逗留した渠れをして、遣唐使藤原清河と共に、歸國の旅裝を整へることを思ひ立たせたに違ひない。しかも傍ら玄宗の使命を帶びてゐた。自作の詩にいふ、

銜命將辭國、非才忝侍臣、天中戀明主、海外憶慈親、伏奏違金闕、駢驂去玉津、蓬萊鄕路遠、若木故園隣、西望憶恩日、東歸感義辰、平生一寶劍、留贈結交人。

口調は全く唐への歸化人としか思はれない。この時、王維、包佶、趙驊等の送行の詩がある。又、

慕義名空在、輪忠孝不全、報恩無有日、歸國定何年。

とも作つた。海外憶慈親といひ、孝不全といつた點はやゝ殊勝らしいが、その歸國は只自分の親の爲で、わが

大君の御爲、國の爲などいふ眞心は露ばかりも見えない。想ふに、わが大君は渠れが不臣を惡み給うて、「歸りまゐこずは、その親どもを罪なはむ」など仰せ下されたのかも知れない。流石にさし當つて親殺しの名を負ふのも心苦しさに、涙り〳〵出立したのだらう。されば海上颶風に遭つて安南に漂泊し、再び長安に還着したのは、寧ろその幸とした事かも測られない。舊唐書の「慕二其中國之風一、因留不レ去、云々」とあるは、何よりの證據ではないか。仕へて左散騎常侍鎭南郡都護より、光錄大夫兼御史中丞北海郡開國公に至り、寶龜元年唐の大曆五年年七十餘で唐で死に、潞州大都督を贈られた。蜀葵の日に向ふに劣ること太しい。安濟泊、夙くこの說を立てゝゐる。

初句、撰者貫之の土佐日記に青海原とある。眞淵が「二樣の傳へありしか」と疑つたのは贊成し難い。日記のは、土佐よりの歸途の海上での事なので、青海原となくてはふさはしくない。且は女の筆に托したものだから、しどけなく聞き僻めたやうに、わざと書き改めたものと思はれる。その證は、續日本紀承和三年の條に、遣唐使に托して仲麻呂に贈位せられた位記の文に、「唯有二掞天之章一、長傳二揶地之響一」とある。掞は、文選の注に、猶レ蓋也とある。蓋は笠のことだから、卽ち「天の原三笠の山」を摘記した詞である。近藤芳樹亦この事をいつてゐる。

左註は、土佐日記などに依つて後人の書き加へたものだらう。若しこれに據れば、仲麻呂が淸河に伴つて來ようとした時、明州の海濱にての留別の作である。明州は唐書地理志に、明州屬二江南道一、開元廿六年以境有二四明山一爲レ名云々　それならば、部立も上の離別の部に收めなければならぬ。又歌の趣も、悲的の感情を叙べたもので、送別の宴席での作のやうでない。この調のある處をよく察しなければならぬ。

おきの國に流されける時に、船にのりて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける　小野たかむらの朝臣

わたの原やそ島かけてこぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟

語 ○おきの國に云々　篁が隱岐に流された事のおこりは、淳和帝の承和四年、遣唐副使の役で出發する時、大使藤原常嗣が自分の乘船が壞れたので、副使篁の船と取り換へたいと、朝廷に願つて許された。それを篁は恚つて、病氣と稱して行かず、西道謠を作つて遣唐の事を刺つた。嵯峨上皇、見て大いに怒らせ給ひ、死一等を減じて庶人とし、隱岐に流罪に處した。途上、謫行吟七十韻を作り、當時の稱誦するところとなつた。後、數年を經て召還され、つひに本位に復された。それは帝が特にその文才を愛されたのだといふことである。「船に乘りて出で立つ」は、浪速の津からの舟出であらう。淀や山崎からではない。歌に「八十島かけて」とある。隱岐に行く航路は、大坂から瀨戸內海を漕ぎ通つて、北の海に迂回して出るのである。○わたの原「わた」は海をいふ。「原」は例の廣きをいふ語。○やそ島かけて　「やそ島」は八十島の意。「かけて」は兼けての意。春上、「梅が枝にきぬる鶯云々」の條の、「かけて」を參看。○人には　「人」はわが家人をさす。

大意 果しも知らぬ大海を、行先限りもなく、この數多の島々をかけて、今出船したといふ事を、故鄕の家人にはどうぞ知らせてくれい、幸ひ其處に居る海人の釣船よ。

評 「八十島かけて」の八十島は、何處をさしたものか。隱岐行の航路に當る瀨戸內海の島嶼をさしたとも思はれないでもないが、「かけて」の語は、過去から現在に亘るのをいふので、現在から未來へ亘るのをいふのではない。

今は難波津出帆の場合だから、瀬戸内海の島嶼では、「かけて」が未来に亘るから誤用となる。そこで八十島を難波附近に求めねばならぬ結果となつた。つら〳〵當時の難波、卽ち今の大坂の地勢を按ふと、現在の低地は盡く汐入の海であつて、やゝ地盤の高い處があちこちに島嶼を成してゐたので、姫島だの笠縫島だの田蓑島だのは、皆その中の一島であつた。八十島はこの島々を稱したもので、「八十」は多數の轉義である。難波の渡津は、今の渡邊橋附近と思はれるから、そこから八十島かけて隱岐行の舟は漕ぎ出すのである。

勅勘を蒙つた流人の身なので、押送の役人は難波の津まで來り、その下官は隱岐まで護送して行くのである。されば公然と京の誰れ彼れに音信する事は、その憚がある。こゝに至つて、「人には」のはの辭に、大きな注意を拂はずには居られない。他人はともかくも、せめて彼の思ふ人ばかりには告げよの意である。單に人にとあるのとは異なつて、差別の意をもつ趣を知らねばならぬ。難波からいよ〳〵船出してしまふと、この萬斛の離愁を託すべきものは何もない。僅に千波萬波に浮沈する海士の釣舟を見た。苦しい時の神頼みと同じく、そんなものにも取り縋らざるを得なくなる。もとより釣舟は、消息など取り傳ふべき物でもなく、海士は難波の浦人で都に交渉のある者でもないが、それらの分別を失つて、「告げよ」と頼んだのは、情の高潮に達した狂想で、その詩的情調はこの一句によつて活躍する。さてかくまでに思はれる人は、そも誰れであつたらうか。遣唐の時の上表に、「自分家貧親老、身亦尪弱、當三汲レ水採レ薪致二匹夫之孝一耳」とある。父岑守は以前に歿してゐるから、その親老といふのは母親である。このたよりない老母をおいて萬里流謫の身となり、わづかに一片の漁舟に託してその熱愛の情を寄せたいと希ふ。感哀窮りない。

渡口郵船風定出、波頭謫處日晴看。

は同時の詩である。併せてその狀況を見るに足る。後世平康頼が、

さつま潟おきの小島に我れはありと親には告げよ八重のしほ風

と詠んだのは、この歌を粉本に取つたのである。數多くといふことを「八十」と相換したのもよい。四句と五句との應接、やゝ詩の轉結の落しに彷彿としてゐる。果して作者は詩人であつた。

題しらず

みやこいでてけふみかの原いづみかは川風寒しころもかせ山　よみ人しらず

釋 ○けふみかの原　今日三日といふに、甕の原をかけた。契沖は「今日見るといふに甕をかけたり」といひ、眞淵、宣長等もこれに從つてゐる。世にこんな拙い辭樣はあるまい。從ふべからず。「甕の原」は山城國相樂郡。山城名勝志に、「在二木津渡東一里半許一、鄕内廣今有二九村一」と見え、和銅年中離宮を置かれ、聖武帝の天平中、始めてそこに恭仁宮を造られた。○いづみ川　甕の原を東西に貫流する木津川の一名。こゝは甕の原の泉川といふべきを、語調にまかせての辭を省いたのは、篠竝志賀の浦、石川片淵などの例に同じい。○ころもかせ山　衣を借せといふに、鹿脊山をかけた。この山は、名勝志に、「在二木津里東一里半許一、山西南半里許有二鹿脊山村一、瓶原隋二木津川一南也」とある。

大意 都を立ち出てから今日は三日目、この甕の原の泉川に來たが、ひどく風が寒いわ、自分に衣を一つ借せよ、川向ひのあの鹿脊山よ。

評 平安遷都後、あまり遠くない頃の人の作か。都は平安の都だらう。都を出掛けて何かの事情で、旅路に三日ば

かり費して、甕の原に來たと見える。乃ち三日に甕の原をかけた。既に萬葉集に三日原とも書いてあるから、さもあるべき取り成しである。景樹は、「都をいでてけふ」を、甕といふ語の枕として解したが、さう輕く見るべき意調とは思はれない。下句への照應も、事實であつてこそ面白くも聞えるのである。抑も甕の原は恭仁の京の地で、泉川は甕の原を貫流し、これに對して鹿脊山は、川の南岸に沿うて京口を塞いでゐる。されば「川風寒し」は、實に甕の原を象徴する句で、舊都の荒涼なる景氣まで聯想される。衣を借すことは古への常習で、夫婦間では珍しくない。で川風の寒さが身に入むと思ふと、はかない山の名に寄せても、衣を借せと要求される、その痴想が面白い。想ふに暖い妹が手を離れた旅人の詠作だらう。

打聽に、「顯本には、初句家を出でてとあり」とあるが、今の顯本には見えない。さうした異本もあつたのであらう。

○

ほのぐとあかしの浦のあさ霧に島隠れゆく舟をしぞおもふ

この歌は、ある人のいはく、「かきのもとの人まろがなり。」

釋 ○ほのぐと　仄(ホノカ)にの意の副詞。口語のほんのりに當る。○あかしの浦　ほのぐと明しといふに、明石の浦をかけた。「明石」は和名鈔に播磨國明石郡明石郷とある。○島隠れゆく　萬葉集には、島に隠れ行くと、島陰を行くとの兩意に用ひられてある。この解は前の意に從つた。島は明石の浦の眞向ひの淡路島をさした。宣長は、「島隠れは海を隔てたる所の隠れて見えぬをいふ。必しも島には限らず」といつた。さては雲隠れ、葉隠れ、木隠れ、深山隠れを何といはうか。更に據ない臆說である。○舟をしぞおもふ　舟をぞ懷ふといふに、「し」の强辭を挾んだ。惜しの義ではない。

大意　ほんのりと明けてくる明石の浦の朝霧に漕ぎ出して、向ひの島に隠れて見えずなつて行く舟をサ、哀れと思ふわ。

評　明石の阜頭に立つて、海上を眺望しての作だらう。さては、羇旅の部に收め難いやうである、下の白山、二見の浦の歌の如く、詞書でもあらばともかくもだがと、傾く者もあらう。されど、須磨明石といひ列ねてその勝景を翫ぶのは、後の事であることを思ふがよい。奈良時代、及びその前後に於ける明石は、實用的船舶の錨地として、著名であつたことを思ふがよい。瀨戸内海の水東に走つて、茅渟灣に注がうとする時、淡路島に迫られて、海上一里餘の明石の迫門を形作る。潮流の干滿に從つて、水勢の變化甚しく急なので、渉乎たる木葉舟は風待ち、汐待ち、是非に恰好の錨地を得なければならぬ。この要求を充たすのは、卽ち明石の浦である。難波の津からして西し、瀨戸内海からして東する船舶は、必ず此處に船がかりしたものであつた。されば阜頭に燈明臺を設けて、その往來を安全ならしめたのである。萬葉集に、「燈火のあかしの浦云々」とあるは、卽ちそれである。萬葉の註者、皆燈火のを枕詞とのみ見たのは、往時の狀況を察しない疎漏といはう。（この燈臺今も存して和船の出入の便になつてゐる）そこで明石とさへ歌へば、すべて行旅の作と聞きなされたものである。況やこれは「舟をしぞおもふ」と、哀れに打ち詠めた樣は、まさに遊子羇客の吟と知られる。

早朝浦頭に立つて、霧と波との別れ目に漕ぎ行く舟の島隠れしてしまふまで、見送つた光景である。「舟をしぞ思ふ」實に天地の間には、わづかに人間の消息を傳へる一葉の舟の動搖は、頗る詩人の感哀をそゝるに足るも

のである。朝の氣分が、あざやかに表現されてある。又「朝霧に島隱れゆく」の句だけ斷章的に見て、霧があつては舟の行方は見えまいといふ考から、宣長の島隱れ說も起つたらしいが、これは、初句の「ほの〴〵と」を、序詞のやうに輕く見た誤からきてゐる。のみならず、霧その物の變化の狀態に熟したら、速坐に了解される光景である。五句に「し」の辭を挿んで字餘りとしたので、大きな重みと力量とが加つて、この種の體製の結束を成すに適する。奈良時代の調よりは和びた所はあるが悠遠で、聲調は蒼涼である。けれど公任の九品和歌に、上品の上に擧げて、「詞妙にして餘に心さへあるなり」とあるのは、人麻呂の作と思つたからの誤評だらう。況や「公任この歌をば三年まで案じて、始めて心得られし」とある顯注の說、或は一首十體ありといふ一時軒隨筆の說など、皆耳を尊んで目を卑めた擊說に過ぎない。左註は全然非である。眞淵が、「風調既に人麿のにあらず。剩へ撰者貫之も人麿のとせざることは、後に又勅に依りて撰び出でたる新撰和歌の序文に、『抽下始レ自二弘仁一至二于延長一詞人之作上』と書きて、この『ほの〴〵と』の歌をも收めたり。然らば、嵯峨帝の弘仁にさしつぎて、天長承和の頃の人の歌とせしこと明けし」といつたのは、確論である。

又舊本、今昔物語卷廿四、小野篁被レ流二隱岐國一時讀二和歌一語の條に、上に見えた「わたの原八十島かけて云々」の歌を擧げて、次に、

明石ト云フ所ニ行キテ、其夜宿テ、九月許リノ事ナリケレバ、明ボノニ不被寢テ詠メ居タルニ、船ノ島隱レヌルヲ見テ、哀ト思ヒテ如此ナム。

ホノ〴〵トアカシノ浦ノ云々

トゾ詠ミテ泣キケル。コレハ、篁ガ返リテ語ルヲ聞キテ、言ヒ傳ヘタルトナリ。

とある。これに據つて、眞淵は、直に篁の作とした。長野義言は更に一歩を進めて、これは篁の自作でなく、篁の島ゆきを送りにきた人の濱邊で詠んだ歌だらうとの新案を立てた。この二首、果して同時の詠であるならば、この集にも八十島の歌に續けて擧げてよい筈ではないか。又一つは篁の名を署し、一つはよみ人しらずと記す筈がないではないか。早まつた斷定である。

あづまの方へ、友とする人、一人二人いざなひていきけり。三河國八橋といふ處にいたれりけるに、その川のほとりに、かきつばたいと面白く咲けりけるを見て、木の蔭におり居て、かきつばたといふいつもじを、句のかしらにすゑて、旅の心をよまむとて詠める。　在原業平朝臣

から衣きつゝなれにしつましあればはるゞゝきぬる旅をしぞ思ふ

釋 ○あづまの方へ云々　「あづま」は吾嬬で、東國をいふ。廣い意では、京の東、逢坂の關から彼方を云つた。「八橋」は行囊抄、名所記、方角抄等に據れば、碧海郡池鯉鮒宿の東方の里村の續きに、舊址があるといふ。確かなことは分らぬ。伊勢物語に、「水のくも手に流れ別れて、橋八つわたせるによりてなむ、八橋といひける」とある。「かきつばた」は燕子花、杜若など書く。和名抄に、馬蘭を加木豆波太と訓んだのは謬つてゐる。さてこの詞書の書き方は極めて拙い。この集の詞書は專ら短いのを主としてゐるのに、業平のに限つて長く書いて

ある。伊勢物語の内容は、虚實混淆した頗るしどけないものなのを、頑なに業平の自記なり、實錄なりと信じた者が、物語に據つて、猥りにこの詞書を書き入れ、或は書き改めなどもしたらしい。それ故伊勢物語の本文と較べると、その斧鑿の痕があり〳〵として見るに堪へない。○から衣きつゝ　「なれ」にかゝる序の詞。「から衣」は、もと韓國の衣の義。韓唐の物のめでたいので、から衣は、から衣を美稱として用ひるやうになつては、單に衣といふも同じ意となつた。こゝは後の意。さて衣は着褻らす物故、人に馴染む意をかけた。○つまし　妻しである。衣の褄を寄せた。「し」は强辭。○はる〴〵きぬる　遙々來たの意。「はる〴〵」は遙かの意に、張るをかけた。張るは衣の緣語。

大意　都に狎れ馴染んだ、衣の褄といふ名の妻がサあるから、別れてはる〴〵と來たこの旅をサ、心細く悲しく思ふわ。

評　初二句のいひなし、萬葉集に、「唐衣きならの里」とあるに似てゐる。「なれ」「つま」「はる〴〵」など、衣の緣語を點綴し、しかもかきつばたの五文字を、一字づつ句の頭に置いた細工、手練の極である。三句の字餘りなのが、よく上來の語勢に對抗し得て、腰折の難を免れた。結句の字餘りに就いては、上の「ほの〴〵と」の歌の條に既に叙べた如くである。氣强く振り切つて京を出ては來たものゝ、長い旅の空には、流石の丈夫心も鈍つて、端なく家人を思ひ出して、轉た纏綿の情に堪へない趣がほの見える。伊勢物語に、「皆人乾飯のうへに涙落して、ほとびにけり」とあるは、さもと思はれる。但、この朝臣の詠としては下作である。

むさしの國としもつふさの國との中にある、すみだ川の

ほとりにいたりて、京のいと戀しう覺えければ、しばし川のほとりにおり居て思ひやれば、かぎりなく遠くもきにけるかなと思ひわびて、ながめをるに、わたし守、はや船に乘れ、日もくれぬといひければ、舟に乘りて渡らむとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さるをりに白き鳥の、はしと足とあかき、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。わたし守に、「これは何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」といひけるをきゝてよめる

名にしおはゞいざ言とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

釋　○むさしの國云々　この詞書も伊勢物語の抄錄で、いよ〳〵拙い。「武藏と下總との中にあるすみだ川」とは、今の武藏の隅田川であらう。さて隅田川の名の起源は、川の東の葛飾郡に、隅田の里がある故で、葛飾郡は、この集の時代は下總に屬して、川を挾んで武藏と對してゐたらしい。壽永、建保の間は武藏に屬し、永祿の頃は復下總に屬し、貞享、元祿の頃からは、また今の如く武藏に屬した。委しいことは、高田與清の松屋棟梁集を參照するがよい。「みやこ鳥」は伊勢物語に、「白き鳥の嘴と足と赤き、鴫の大きさなる、水のうへに遊びつつ魚を食ふ」とある。山岡明阿が說に、「都鳥は諸說ありと雖も、鷗なる事疑なし。鷗に大小二種あり。大鷗を

關東の方言に濱猫といふ。その聲の似たればならむ。小なるは鳩ほどありて、その聲細くひくし。墨田川など
に來るはこの小鷗なり」とある。この鳥、嘴赤く腹白く、背は鼠色である。けれどふと見ては白く見える。梅
亭鞠塢の都鳥考の説は異説である　小野蘭山の本草啓蒙に、「都鳥のミヤは、聲によりておほせ、コドリは、よ
ぶこ鳥、みさご鳥などの小鳥に同じく、大鳥に對しての稱なり」とある。○名にしおはゞ　名に負ひ持つなら
ばの意。「し」は強辭。○言とはむ　物言はむの意。大秡の詞に、「語問志磐根木根立（コトトヒシイハネキネタチ）」、萬葉集に、「言とはぬ木
すら」など多く見えて、口を利くことをいふ。尋ね問ふの意に用ひるは、後世の轉訛である。○ありやなしや
「や」は疑辭。事無くて在りや否やの意。生死の事と見るのはやゝ早からう。

大意　都といふ名を負つて居るならば、定めて京の事をよく知つて居らう程に、どれ話して見よう、都鳥よ、私
が思ふ都の人は、今無事で居るか如何かとサ。

評　「言とはむ」は物言はむの意ではあるが、それも「ありやなしや」と物言ふのだから、おのづから尋ね問ふの意
にはなる。只語に分寸の差があるのである。都鳥といつたからとて、京の事がわかる筈もないのを、物言はむ
とする稚氣痴態、いと〳〵哀れ深いものがある。蓋し作者は測らざる風流罪過から、髻を切つて放され、心
ならずもの東下り、長い旅寢の果は、又この川一つ渡つて國境を越える事かと思ふと、無量の鄕愁は、その胸
に湧いたであらう。これ暫く川のほとりにおりるて、渡船を躊躇した所以である。流石の夏の長い日も、やが
て暮れてくる。船頭はもうしまひ舟だと催促する。厭でも渡らねばならぬ。ほんに情なく感じたであらう。た
ま〳〵白い鳥が、夕汐時をねらつて魚をあさる。都育の物珍しさに、何鳥かと問ふと、船頭が、「これなむ都
鳥」、貴方は都人でも、御承知はないのですかといひさうな口振、只この「都」の一語、何たる懷かしい響を作者
の心の奥に傳へたであらう。かうなると、鳥であらうと何であらうと構つてはゐられない。「いざ言とはむ」の
一案が湧然と起つてくる。この心理は、なほ溺れた者が蘆の一葉にもすがるに等しい。その鄕愁の對象となる
ものは、勿論「わが思ふ人」である。「ありやなしや」と、一正一反してその兩端を叩いたのや、同韻の折り返さ
れたのやで、姿致節奏兩つながら面白く、千古人口に膾炙されたのも、決して偶然でない。

題しらず　よみ人しらず

北へ行く雁ぞ鳴くなる連れてこし數は足らでぞ歸るべらなる

この歌は、ある人「男女もろともに、人の國へまかりけり。男まかり至りてすなはち、身まかりにければ、
女ひとり京へ歸りける道に、歸る雁の鳴きけるを聞きてよめる」となむいふ。

釋　○北へ行く雁　春の歸雁である。北はその歸る方角で、卽ち雁の故鄕の方。

大意　故鄕の北の方へゆく雁がサ、あれ鳴くことよ、故鄕へ歸るは嬉しかりさうなものを、あのやうに鳴くは、
故鄕から連れ立つて來たことであつた、そのうちの一つが死に失せて、來た時とは數が足らなくなつてサ、歸
るのであるさうな、丁度自分のやうにサ。

評　伉儷を失つた人の、歸家途上の作である。たま〳〵北歸の過雁を聞く。我れも歸る旅、彼れも歸る旅、また
彼れも鳴き、我れも泣く、外面的の境遇が眞によく相似てゐる。乃ち內面的境遇も我れと同樣で、おなじ不幸
に泣くものと看取して、相憐んだ推察は、秋上の歌に「長きおもひは我ぞまされる」、「わがごと物や悲しかる
らむ」など、蟲の音を詠んだのと同規である。又「數は足らで」といつて、そのうちのあるものゝ、死に失せた

ることを思はせたのは婉曲である。「連れてこし」の一句は四五句の數の足らで歸るの對映で、悼亡の情がいよいよ強く表現される。

左註は、大和物語から取り合はせたものか。けれども、大體の事情はさうであつたらうと思はれる。又季吟が、「哀傷部に見えた在原滋春が、甲斐國に下りける時のなり」といつたのは妄である。土佐日記にも、「くだりし時の人の數足らねば、古き歌に、『數はたらでぞ歸るべらなる』といふことを思ひいでて」とあつて、古歌とことわつてゐる。滋春は撰者貫之と同時の人である。もし滋春の作なら、詠人しらずの歌とする筈もない。

あづまの方より、京へまうでくとてよめる　お　と

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

釋 ○まうでく　參出來(マヰデク)の音便。

大意 もう京の山が見える筈を、隱して見せぬあの春の霞がサ、怨めしいわ、あゝ早く往きたいと思ふ都の境は、何處らあたりであらうぞ。

評 意地の惡い霞よと怨んだ餘意に、婦人の情致が現はれて面白い。又田舍からはじめて上つて來た人では、これほどまで怨む譯がないらしいから、これはもとからの都人の、東から歸つて來た折の作であることは明らかである。韓愈が潮州に貶せられて行く時、「雲橫二秦嶺一家何在(ハツテ　ミカル)」と作つたのも、往返の別こそあれ、その意は同じである。作者の父壬生益成は、仁和四年遠江介に任ぜられた。若しは秩滿ちて歸京の途次、作者は伴はれて來て詠じたものか。

二句、六帖に霞ぞ春はとある。これでは、怨めしく思ふは春にのみ限つたやうに聞えて、穩やかでない。

越の國へまかりける時、しら山を見てよめる　み　つ　ね

きえはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける

釋 ○越路　北越地方の道中をいふ。

大意 雪の消え果てゝしまふといふ時がサ無いから、越路にある白山といふ山の名のおこりは、雪からでサあつたわい。

評 雪の白色から山の名が生まれたのは、そもくからの事で、今更らしくいふに當らない。然しさういふのは理窟で、この山に始めて、出會つた作者の感想は、かうなのだ。

あづまへまかりける時、道にてよめる　つ　ら　ゆ　き

絲による物ならなくにわかれ路の心ぼそくもおもほゆるかな

釋 ○よる　縒ること。

大意 絲に縒る物は皆細いが、自分の心はそれでも無いのに、家を別れて遠く行く旅の道は、一通りならず、心細くまあ思はれることよ。

評 「心細く」の縁語から絲を聯想し、配合して、離愁に堪へぬ心が弱り細るのを、怪しみ歎いたのである。徒然

草にいふ、

絲による物ならなくにといへるは、古今集の中の歌屑とかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべき事柄とは見えず。その世の歌は姿詞この類ひのみ多し。この歌に限りてかくいひ立てられたるも知り難し。全く必ず歌屑といはば、集中にこれよりも劣つたのが數多ある。兼好が「知り難し」と訝つたのも尤もである。初二句は、心の絲に縒られぬのをいふのである。それを中村知至が、「絲に縒る物とは、縒り合せある絲といふにて、其の絲を一方にわくれば、二筋となりて細く別るゝ故に、細くと緣語をつらねて、歌とせるなるべし」と解したのは、鑿說に過ぎる。宣長が、「別れ路は絲に縒る物ならなくに」の意に釋いたのは、いよ〳〵いけない。さてこれは離別の意なので、詞書を添へて、殊更に旅行の途次に詠んだものであることを知らせた。拾遺集に、離別の部に再び收めたのは、この意を心得かねての所爲である。

二句、源氏物語總角の卷に「物とはなしにと、貫之がこの世ながらの別をだに、心細き筋に引き掛けゝむを云云」とある。

かひの國へまかりける時、道にてよめる　みつね

夜をさむみおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたたびねぬ

釋 ○はつ霜　秋冬の交零るはじめての霜をいふ。○あまたたび　數多度。

大意 道中筋は、この頃は夜がサ寒い故に、降る初霜を拂ひ〳〵して、その霜のおく草を枕に、幾度も〳〵寢たわ。

評 作者が甲斐權少目に補任したのは、寛平六年二月廿八日であるが、その年の秋の末になつて旅裝を整へたものか。京からの公程は十三日と定まつてゐるから、草の枕は「數多たび」といはれよう。「おく初霜を拂ひつゝ」は誇張ではあるが、旅の艱苦が想ひやられる。當時の旅行の狀態を知悉したものは、これを實境實詩と讃するに躊躇すまい。眞淵いふ、「隱れたる所なくて、續け柄面白くあはれなり」と。但幾夜も枕の霜を拂ふのでは、「初」の意義がたじろぐ。

結句、新撰和歌に寐むとあるはわるい。

たぢまの國の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに、ともにありける人々、歌よみけるついでによめる　藤原兼輔

夕づく夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見め

釋 ○たぢまの國云々　「但馬國の湯」は想ふに古から著名な城崎（キノサキ）の溫泉だらう。「ふたみの浦」は契沖の說に、「伊勢の海にもあれど、これは播磨にて、今土俗ウタミと呼べる所なり」と。秋成いふ、「今但馬國にも二見と呼べる所あり。城崎のある邊なり。兼輔のこゝにて詠まれしとかの里人はいへど、所のさまを見るに然るべからず。この歌によりて附會したるものぞ。彼處へ行かむには、難波より舟に乘りて播磨路を經つゝ、高砂のあたりより舟を上りて、北の方山路分け入る道あり。いにしへはその道をや行きけむ。然れば、播磨なるぞ道の行

手なる」と。いづれもしかと定め難い。「夕さりのかれいひ」は夕飯の意で、「かれいひ」は乾飯卽ち糒である。古へは行路に必ず糒を携へて、所々で水に浸して食つたのである。「ともに」は共にの意、隨伴の意ではない。

○夕づく夜　日の入りて夜に成り行く頃をいふ。秋下「夕づく夜をくらの山に」の條に既出。○玉くしげ「玉」は美稱。「くしげ」は櫛笥で、化粧道具を容れる筥をいふ。蓋、身、懸子がある。○ふたみ　二見に、蓋身をかけた。○あけて　明けてに、開けてをかけた。

大意　夕暮の闇い頃は、分明には見えぬものを、それを無理に見ようより、玉櫛笥の蓋や實やといふ名のこの二見の浦は、櫛笥の蓋を開けてといふやうに、夜が明けてからサ、とくと見ようと思ふわ。

評　詞書に、「ついでに」とあるに注意を要する。倶にゐる人達は皆この浦の景色に見耽つて、歌詠みかはしなどしたとすると、やがて夜も更けたらしいさまである。されば、明日になりてこそと警告した歌で、乃ち事のついでなのである。地名に據つた緣語の鎖り、先づ狂歌の一體である。かやうの體は、平安の京になつて發達したもので、當時の人士は珍しがつて喜んだらしい。二句の下、意解の如くに詞を補はないと、「を」の辭に打ち合ふべき詞がない。

新撰和歌には、三句玉手筥、四句ふたみの浦をとある。

惟喬のみこのともに、狩にまかりける時に、あまの川といふ所の川のほとりにおりゐて、酒などのみけるついでに、みこのいひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心を

よみて、さかづきはさせ」といひければよめる　ありはらの業平朝臣

かりくらし棚機つめに宿からむ天の川原にわれは來にけり

釋　○惟喬のみこ云々　これも伊勢物語によつて書き加へた後人のしわざであらう。落筆唐突で、他の例に協はない。伊勢物語、惟喬親王交野の櫻狩の段に、

御供なる人酒を持たせて野より出で來たり。この酒をのみてむとてよき所を求め行くに、天の川といふ所にいたりぬ。親王に右馬の頭大みき參る。親王宣ひけるは、交野を狩りて天の川のほとりにいたるを題にて盃はさせと宣ひければ、詠みて奉りける。

とあつて、この歌を擧げてある。「天の川」は河内國交野郡（今北河内郡）牧野村禁野にある。○かりくらし狩して日を暮らしての意。句の下、てのの助辭が畧かれてある。勢語を釋く者、その本文に泥んで、櫻狩としたものがあるが從ひ難い。櫻狩を打ち任せて只狩とのみいつた例がない。○棚機つめ　秋上「天の川もみぢを橋に」の條に既出。○天の川原　秋上「あき風の吹きにし日より」の條に既出。

大意　いつその事今日一日を此處に狩し暮らして、棚機樣に今宵の宿を借らうぞ、歩きまはつて、丁度幸ひ棚機の居る天の川の川原に、思ひかけず來たわい。

評　「棚機つ女に宿借らむ」の唐突にして、且奇矯なのに人耳を欹てしめて、さてこの天の川を、かの天の川に暗喩して、天上の天の川原に來たと斷じた。作者の人を翻弄すること實に甚しい。この技倆は業平に至つて始め

て見られた。到底諸家の企及すべき所でない。景樹は、「下に漢の張騫が槎にのりて、漢を窮めし故事を思へり」といつたが、恐らく無用の説と思はれる。初句を古來の多くの註者、四句の上に冠せて、狩り暮らして天の川原に來りけりの意に釋いてゐるのは疎漏である。

みこ、この歌をかへすぐ〳〵よみつゝ返しえせずなりにければ、ともに侍りてよめる　きのありつね

ひとゝせに一たび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

釋 ○みこ云々　伊勢物語には、前の歌を擧げて、「と聞えければ、この歌をかへすぐ〳〵誦し給ひて、返しえし給はず。紀の有常、御供につかうまつれり。それが返し」とある。○ます　座すで、こゝは敬語。

大意 いや〳〵天の川では、一年に一度づつお出でなされる彦星の君を待つことだから、他の者が宿を借らうといつても、借す人も容易にあるまいとサ思ふわ。

評 彦星のことを、「一年に一度來ます君」と婉曲にいひ成し、織女星のことを、「宿かす人も」と大らかにいつたのが、含蓄があつて面白い。業平の歌の宿借りて寐て行かうといふのを承けて、織女は操正しく、思ひ入つて彦星の君を待てば、天の川原には宿の借し手もあるまいと、裏を缺いて出た。貞操な織女と、色めいた業平とが自然對照されてゐる。景樹の、彦星を惟喬親王に擬へたといふ説は詰ひ難い。親王は既に天の川原に來て居られるのだから、更に「待てば」とはいはれない。狩場先の交野の院で、年若な親王の思ひ上つて居られる御容體、天が下の好き者業平が大御酒奉らうとするを抑へて、酒の好下物としての歌の御所望に、取り敢へず棚機樣と寢て行かうの、例の本性を見はしたたはれ言、素より歌好きの親王も、業平の歌の出榮えしたのに臆れてか、返歌が出來かねて呻吟して居られると、座に侍つてゐる有常が默しかねて、この一吟を提げて助け船と出たなど、その夜の狀況を想像すると、頗る興味のある團居であつたらう。

朱雀院の奈良におはしましける時に、手向山にてよめる　すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵

釋 ○朱雀院云々　「朱雀院」は宇多上皇を申す、委しくは秋上「をみなへし秋の野風に」の條に既出。「手向山」は大和の奈良のではあるが、今いふ若草山の南麓に當る手向山神社の處ではあるまい。往時の奈良に入る本街道は奈良山の中央部歌姫越と稱する處で、奈良坂もそこの坂である。奈良に出入する者は皆その道祖神に手向したものと見え、遂に手向の名がこの山に附いたと思はれる。○このたび　度の意に、旅をかけた。○ぬさもとりあへず　「とる」は何にまれその事を取りまかなふ意である。「あへず」は秋下「千早ぶる神の忌垣に」の條に既出。萬葉集には不堪をアヘズと訓んである。○神のまに〳〵　神のお心任せにの意。「まに〳〵」は儘に〳〵の略で、隨意の義。

大意 何時はともあれ此度の旅は、秋の時分なので、道の神にお手向け申す筈の幣も見すぼらしくて、捧げるに堪へぬわい、たゞこの手向山の見事な紅葉の錦を、幣として捧げますから、神のお心任せに御受納下され。

評 宇多上皇のこの御幸は、昌泰元年十月の事で、貞數親王及びこの歌の作者道眞を從へ、途に道眞の高市郡の

山莊に宿つて、遂に吉野の宮瀧に至り、龍田山を經て河内に入り、住吉社に詣でられた。奈良の御通過は、十月中の事と思はれるから、紅葉は手向に眞盛りであつたらう。抑も幣は神に捧げる布帛の料で、通例旅行者の携帶する切幣などは、ほんの衣裳の裁屑や何かの、粗末な物と想はれる。錦などは貴重品だから使はない。そこでこの紅葉を錦に譬喩して、これほど立派な錦は、神のお心任せに賞翫なされてゐるから、我が數ならぬ幣の如きは捧げるまでもないといふ意を、更に一轉捩して歌つた。畢竟幣を對照の具に用ひて、紅葉のめでたさを歌つたものである。「このたびは」とことわつたので、これまでしば〳〵手向を越えた事が知られた。それは高市の山莊への往返でゝもあつたらう。萬葉集に、

いなだきにきすめる玉は二つなしこなた彼方も君がまに〳〵　（卷三）

春風の音にし出なばありさりて今ならずとも君がまに〳〵　（卷四）

玉きはる吾が山のべに立つ霧の立ちとも居とも君がまに〳〵　（卷十）

たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしゑ君がまに〳〵　（卷十一）

の儔、なほ澤山ある。作者はこの風體を學んで、やゝ平安朝の皮肉を加へた。

初二句に就いて諸說ある中に、或は院のお供だから、私の幣は取りあへずの意といひ、或は院のお供で多忙の爲に都を出た時、幣も取り持ちあへずの意ともいふのがある。景樹いふ、

私の幣はとるに堪へずとならば、君が爲の幣をばいよ〳〵とらるべきなり。打ち任せて此度はとらずといふべけむや。また院は微行を好ませ給ふと雖も、大和、攝津、河内の遠方を巡幸し給ふらむは、流石に搖り滿ちたる御しつらひなりけむ。況や右大將ばかりの人の、御供に仕へ奉り給ふなるをや。卑賤の子の、周章しく取る物も取り敢ず騷ぎ立つと侔しからむや。これとりあへずといふ詞を、急遽蒼卒の意と思ひ泥めるよりの僻言なるべし。

と。この駁論はよろしい。

手向にはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ　素性法師

釋 ○つゞりの袖　僧服で、衲衣の事である。人の捨て、顧みぬ糞掃に均しい襤褸を拾ひ集め、これを綴つて衣とするのでいふ。もと袈裟の異名である。天竺では、袈裟の外に衣はない。日本支那の寒國は、特別に下に衣裳を着る。○あける　飽きてあるの約。

大意 この手向山の神への手向には、出家の身もこの衲衣（ツヅリ）の袖をも切り刻んで、幣にして手向けてよい筈なのに、あの錦のやうな見事の紅葉をば幣と受けて、思ふ存分見て御座る神樣だから、衲衣の袖の小切などは、入らぬといつてお返しなされる事であらうか。

評 それ故にさし控へて居るの餘意がある。志は松の葉、切つてはならぬ袖さへも切るべしといふのが、既に面白いのに、「紅葉に飽ける神やかへさむ」の意外の落想。神意を人間の心理と混一にしての想像に、更に一段の詩趣を生ずる。又「つゞりの袖」とあるに對へて、おのづから神の飽き給へる紅葉は、錦の如くあるべきことが想ひ知られる。畢竟上のもこれも、手向の神を取り合はせて、紅葉のめでたい限りを形容したので、面白いのは、神やかへさむ綴の袖、格調の高いのは、神のまに〳〵の紅葉の錦である。

作者は當時、石上の良因院の住持であつた。宇多天皇はこの大和御幸に、作者を召して戯れに良因朝臣の假名を賜ひ、供奉を仰せ付けられた。詩人道眞、歌人素性を左右に從へられて名所巡り、いかに興味の饒い御幸であつたらう。當時他に歌人もあり詩人もあつたが、特にこの兩人に供奉を仰せつけられたことは、道眞も素性も、大和の地に殊なる緣故があつたからである。

古今和歌集卷第十

物名

藤原敏行朝臣

うぐひす

心から花のしづくにそぼちつゝうくひずとのみ鳥の鳴くらむ

〇物名　モノ、ナと訓む。物名は名詞の事であるが、こゝは詠歌の技工上の特殊の名稱に用ひられてゐる。卽ち名詞を他の意に取り成して、歌のうちに詠み込むをいふ。奥儀抄に、「隱題歌、古今集并拾遺集の物名部といふはこれにや。近代の人これを稱二隱題一也。件歌は爲レ題物の名を歌の表に置きて、他の心を述ぶる也」と見え、八雲御抄には、「物名、これは隱題也。物の名を隱して詠む歌なり。古今などには、隱す物をやがて題にて、多くはその心を詠めり。」とある。その組織の種類からいへば、隱すべき名詞卽ち物名をやがて題としてそれを詠じたのと名を歌の表に置いて、他の事を歌つたのとの別がある。さて、この體製は萬葉集に見えない。平安朝になつて、國歌の復興に連れて創められた一新體であらう。詩に離合詩といふ一體がある。文體明辨附錄に、「按離合詩有二四體一云々。其三、離二一字偏旁一於二一句之首尾一、而首尾相續爲二一字一。其四、不レ離二偏旁一、但以二一物一二字一離二於一句之首尾一、而首尾相續爲二一物一云々。」と見えて、唐の陸龜蒙が詩、

松間斟、

子山園靜憐二幽木一。公幹詞清詠二華門一。月上風微瀟洒甚。斗醪何惜置二盈樽一。

の如きは、その一例である。國朝詩人、また、字訓詩の體あり。本朝文粹に、清原眞友が詩、

禾失曾知レ秋。中心豈忘レ忠。里魚穿レ浪鯉。江鳥度レ峽鴻。火盡仍爲レ燼。山高自作レ嵩。色絲辭不レ絕。凡虫泣二寒風一。

の類である。是等の遊戯文字は、專ら詩にのみ行はれてゐたのを、復興期の歌人等が欽羨の餘り、こゝに物名の一體を創めて、わが誇としたものだらう。（以上岡井愼吾の說に據る）○心から　「から」はよりの意。○うくひす　憂く干ずの意。鶯を隱した。

大意　おのが心から、花の雫に濡れくして、それを人の知つた事のやうに、何で、つらく乾かぬとばかり、あのやうに鳥が鳴くのであらう。

評　歌の意も、鶯を詠んである。「憂く干ず」は、鳥の鳴く理由をいつたまでゝ、うぐひすと鳴くのではない。そを思ひ誤つて、大江匡房が、

いかなれば春くるからにうぐひすのおのれが名をば人につぐらむ

を初めて、鳴聲として詠んだ歌が後世に多い。

ほとゝぎす

くべきほどときすぎぬれや待ち佗びてなくなる聲の人をとよむる

釋　○くべきほどときすぎぬれや　來べき時期過ぎぬれやの意。時鳥を隱した。「ぬれや」はぬればにやの意。○とよむる　響動せしむる意。

大意　時鳥が待つ雌の來る筈の時分が過ぎたかして、それを待ちづらがつて鳴き立てる聲が、時鳥が鳴くくと、人をワヤくさせるのであらう。

評　時鳥のうへの戀を詠じて、下には作者自身の戀を思つたのだらう。

うつせみ

浪のうつせみれば玉ぞ亂れけるひろはば袖にはかなからむや　在原滋春

釋　○浪のうつせみれば　浪の打つ瀨見れば の意。空蟬を隱した。「うつせみ」に二義ある。現し身の轉語である。現せ身の意と、空蟬卽ち蟬の蛻の意とである。但後の方は更に一轉して、直に蟬の事にもいつた。○はかなからむや　「や」は歎辭。

大意　浪の打つ川の瀨を見れば、見事の玉がサ亂れて散るわい、しかしあの玉は、袖に拾ひ入れようならすぐ消えて、はかないだらうよ。

評　歌は水珠を詠んでゐる。四句は袖に拾ひ入ればを倒置した。

かへし

袂よりはなれて玉を包まめやこれなむそれとうつせみむかし　壬生忠岑

釋 ○袂よりはなれて　袂より外にてといふ程の意。○包まめや　包まむやはの意。「や」は反動辭。○それとそれなるとの意。○うつせみむ　移せ見むの意。空蟬を隱した。

大意 貴方は、袖に拾はゞはかなからむと仰つしやるが、袖を除けての外に、玉を何に包まうか、包む物はありませんわ、やはり袖の上に、これがサそれであると取り移して見せなさい、私が見ませうわサ。

評 汝は移せ、我は見むとあるべきを、主語を略いて單語を重疊して、簡淨にいひなした。この語法は後世の戲曲文に、多く襲用されてゐる。

うめ

あなうめに常なるべくも見えぬかな　よみ人しらず

戀しかるべき香は匂ひつゝ

釋 ○あなうめに常なる　「あなう」で切り、「めに常なる」と讀む。「あな」は歎詞、「う」は憂しの畧、「めに常なる」は目に何時も觸れるをいふ。梅を隱した。

大意 梅の花はあゝ憂いわ、すぐ散つてしまつて、目に常住見られさうにも見えぬことよ、その瓣後で戀しかりさうな香は、匂ひ〳〵してサ。

評 「べく」「べき」が重複してゐる。

かにはざくら

○かづけども浪のなかにはさぐられで　つらゆき

風ふくごとに浮き沈む玉

釋 ○かにはざくら　和名鈔に、「樺木皮、可二以爲一炬者也、和名加波、又、加仁波」。又、源氏物語に、「外の花は八重さく花櫻盛り過ぎて、かばざくらは開け、藤は遲く色づきなどはすめるを」とある樺櫻がこれである。宣長は「和名鈔に櫻桃、一名朱櫻、和名波々加、一云邇波佐久良とあり。邇の上に加の字の脱ちたるにて、加邇波櫻なり」といつたけれど、樺櫻は花が白いから、朱櫻とはいへない。小野博いふ、「樺木は、葉は桑の葉に似て尖れり、四月に白色の細花開く、樹皮白くして黑斑あり、横理ありて櫻皮と同じ、物など纏き綴ぢするに用ゐる」と。○かづけども　潜けども。○なかにはさぐられで　中では探られないで。樺櫻を隱した。

大意 海の底に潜つて取らうとするけれども、浪の中では探り當てられないで、風の吹く度毎に、浮いたり沈んだりする玉であることよ。

評 滄海に珠を撈る趣を思つて、波の白玉を詠んだのである。

すもゝのはな

今いくか春しなければうぐひすもものはながめて思ふべらなり

釋 ○すもゝ　酸桃の義で、李のこと。○うぐひすもものはながめて　李の花を隱した。

大意 春は今幾日あるぞ、もはや幾日も春がサ無いから、鶯も自分と同じやうに、辛氣さうに物思をする樣子であるわ。

評 春上に「鳴きとむる花しなければ云々」と詠んだのと、着想も叙法もおなじで、作者も同じ人である。景樹は、「ながめて物はとは誰れもいふべきを、倒置したるが調のいみじくめでたきに、それはた物名となれ

る、奇なり」といつた。

からもゝのはな　ふかやぶ

あふからももものはなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば

釋 ○からもゝ　杏のこと。韓桃、辛桃の兩義がある。○あふからももものはなほ　杏（カラモモ）の花を隱した。

大意 逢へば嬉しい筈なのを、逢ふにつけてもやはり物悲しいわ、逢へば又別れる事のあるのを、豫て思ふからサ。

評 離別の「別るれど嬉しくもあるか」の歌と、その意は反對である。但これは平叙。

たちばな　をのゝしげかげ

足引の山たちはなれ行く雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

釋 ○たちはなれ　橘を隱くしてある。○行く雲の　「の」はの如くの意。

大意 山を立ち離れて行く雲の、宿り所の定まらぬやうに、行末の止まり所の、知られぬ世の中でサあつたわい。

評 人生を行雲流水に擬へて歎ずるのは、支那の文學に、昔から數多見えたところである。只叙法の流暢さを味ふがよい。秋成いふ、「この題は、山たちばなとありしを、後に、山の字を寫し洩しゝか」と。山たちばなは、今の藪柑子といふ物である。

をかたまの木　とものり

み吉野の吉野の瀧にうかび出づる沫をかたまのきゆと見つらむ

釋 ○をかたまの木　眞淵は、「岡玉の木なり。檜の木にて、その實玉の如し。古へ玉を貴べる習慣より、まことの玉ならねども、圓きは緒に貫きて、身にも帶びたるが故に、かゝる實あるをば玉の木といへり。その岡にあるをいふ」といつた。下に、山柿を竝べたので見れば、岡の玉の木かも知れないけれども、玉の木の說は受け取りにくい。谷川士清、橘守部はいふ、「招魂（ヲガタマ）の木の轉ならむ。神の御魂を招ぎ遷す木の意にて、榊なるべし」と。安齋隨筆、閑田耕筆、茅窓漫錄、松屋叢考にはその圖を出してある。○沫をかたまのきゆ　「たま」は玉である。をかたまの木を隱した。

大意 吉野川の瀧津瀨に、浮び出ては消える水の沫を、玉が出て又消えるのだと、人が見るであらうか。

評 「うかび出づる」と「消ゆ」とを掛け合はせて、沫には消ゆ、玉には浮び出づるの詞を省いた。

やまがきの木　よみ人しらず

秋は來ぬ今やまがきのきりぐすよな〳〵鳴かむ風の寒さに

釋 ○やまがき　和名鈔に、「鹿心柿、柿小而長也、和名夜末加岐（ヤマガキ）」とある。千秋いふ、「世に、信濃柿とも、吉野柿ともいふ。材に黑柿といふもこれなり」と。○今やまがきの　山柿を隱した。

大意 秋ははや來たわ、この風の寒さに、蘿のきりぐすが、今のまに夜な〳〵鳴く事であらうか。

評 すなほな點は、彫琢技巧の作に似ない。

あふひ　かつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかゞつらしと思はざるべき

釋 ○あふひ　二葉葵である。平安の京になつて、加茂の神事には必ずこの草を用ひる。○かつら　桂である。これも加茂の神事に用ひた桂で、和名鈔に、「楓一名攝、和名乎加豆良」とあり、又、「桂一名褄、和名女加豆良」とある。古事記でも萬葉集でも、楓をカツラと訓んだ。この楓は今、紅葉を愛でではやす楓樹ではない。貝原篤信いふ、「其の葉白楊に似て、兩々相對ふ、加茂祭に用ふるかつら是れなり」と。西宮抄に、「四月祭時、近以レ桂爲二挿頭一」と見えてゐる。葵と桂とを合はせて、諸蔭といふとか。葵は臺くこともあるから、こゝのを同じ物に見て、葵蔭の義と思ひ誤つてはならぬ。○あふひ　逢ふ日である。葵を隱した。○いかゞつらし　桂を隱した。

大意 これ程逢ひ見る日の稀になる人を、どうしてまあ、つらい事と思はずに居られようぞ、實に辛い事と思ふわ。

評 平安時代の葵に逢ふ日をいひかける習慣は、文獻上ではこの歌から始まつたと見られる。逢ふ日とあるのでは戀歌によまれた。とにかく二箇の名詞を耳立たぬやうに取り扱つたのは、器用なものである。

○

人目ゆゑのちにあふひの遙けくはわがつらきにや思ひなされむ

釋 ○あふひ　逢ふ日、葵を隱した。○わがつらき　桂を隱した。

大意 人目を憚る故に、これから後に若し逢ふ日が間遠になるならば、その譯も知らずに、自分がつらい仕打をすることのやうに、思ひ成されようか。

評 前の歌の手際にくらべると、大分劣つてゐる。

くたに　僧正遍昭

散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな

釋 ○くたに　童蒙抄に、「苦丹と書く、澤山にある草なり」、榮雅抄には、「蔦の類」などあるは、源氏物語寄木の卷などに見えた、こたにと混じたのだらう。今は少女の卷に、「花橘、撫子、さうび、くたに、などやうの花のくさ〴〵を植ゑて」と見えたくたにである。異名分類抄に、「苦膽」（龍膽ノ一名逍遙院說ハ重藥ト云フ草トゾ）といひ、また前田夏蔭說の「嘉祐本草に、酸漿一名苦耽とあれば、酸漿なり」といふは、俱に韻の假名が差つてゐる。膽も耽もタムで、タニではない。眞淵の續萬葉論に、「木丹の木の音を上略して、くたにと云へるなるべし。字書に、『木丹梔子花也』とありて、卽ちくちなしなり。五月花咲きて、殊に子は黃色にて、絲など染めて、女など翫ぶ物故に、源氏にも夏の方に書きける歟。牡丹の類にて、芍藥かともいふ說は、夏の物なれば叶へども、芍藥にくたにの名あること、未だ知らず」と論じた。契沖は苦丹で、牡丹の類だといつた。想ふに、芍藥の根は藥に用ひ、花は牡丹に似てるから、或は、苦丹の名を負せたのであらうか。○あくたに　芥に、苦丹を隱した。

大意　散つてしまへば、後は芥になる、何の事も無い花であるものを、それをてんで合點せずに、あのやうに迷ふ蝶であることよ。

評　例の色卽是空の觀想であらう。

結句、六帖にまどふけふかなとあるは誤寫であらう。

さうび

我れはけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり　つらゆき

釋　○さうび　薔薇の字音、シャウビの轉。和名鈔に、「薔薇、陶隱居注云營實、和名無波良乃美（ハバラノミ）」とある。又、「うばら、むばら、いばら」と訓じた。高駢が、「一架薔薇滿院香」白居易が、「階底薔薇入夏開」の句の趣を考へると、其の枝は長く生ひ延びて、墻などのやうになる物であらう。この種の薔薇は今でもある。○けさうひに　今朝初（けさ）にである。「うひ」は初冠などの初で、始めてゞある。さうびを隱した。

大意　自分は薔薇の花を今朝初めてサ見たわ、この花の色は、人のいふやうな面白い物では無くて、仇なる物ぞといふべきであつたわ。

評　人の愛で翫んで、面白い花といひ囃すのに對へて、我は仇な物と覺悟したといふ。宣長が、人の仇な物といつたのを、今思ひ當つた趣に釋いたのは誤つてゐる。想ふに、この薔薇は、常の野茨ではないから、支那から舶來の當坐などで、ひどく珍しかつたものであらう。貫之もこの時はじめて見たので、「うひにぞ見つる」といつたと思はれる。

をみなへし　とものり

しら露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも絲をみなへし

釋　○玉にぬくとや　玉にして貫くとてか。○さゝがに　蜘蛛をいふ。もと蜘蛛の枕詞である。小蟹の義といひ、笹原に住む蟹の意ともいひ、又鹿持雅澄は、「笹の根は入り組みたる物故、笹が根の組むといふを、蜘蛛にいひかけたり」といつた。○絲をみなへし　絲を皆綜（へ）しで、綜は延（へ）ふる意。女郎花を隱した。

大意　白露を玉にして貫くといつてか、蜘蛛がこの露の置く女郎花の花にも葉にも、絲を皆引き張つた。

評　秋上「秋の野におく白露は玉なれや」と同想。

○

朝露をわけそぼちつゝ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

釋　○野山をみなへしりぬる　野山を皆歩いて知つたの意。女郎花を隱した。

大意　女郎花の花を見ようと思つて、朝露を分けて濡れ〳〵して、今はサ野山といふ野山を、悉く歩いて知つたわ。

新撰萬葉に、初二句露草にぬれそぼちつゝ、下句しらぬ山べをみなへしりにきとある。

朱雀院の女郎花あはせの時に、をみなへしといふいつも

物名

じを、かしらにおきてよめる　つらゆき

をぐら山みねたちならしなく鹿のこゑにけむ秋をしる人ぞなき

釋 ○朱雀院のをみなしあはせ　秋上「女郎花あきの野風に」の條に既出。宇多帝讓位の翌年、朱雀院の御所で、皇后と競はせ給うたのである。○をぐら山　秋下「夕月夜をぐらの山に」の條に既出。

大意 小倉山の峰を立ち馴して鳴く鹿の、これまで經て來たであらう秋の數を、知る人がサ無いわ。

評 これは折句である。業平がかきつばたの五文字を置いて、「唐衣きつゝなれにし云々」(羈旅の部參照)と詠んだのと同じである。然るにこれは物名に入つてゐる。思ふに、彼れは題詠の歌でないから、その重い意味に從つて、羈旅に收めたのであらう。

拾遺集に再出したのには、下句へにける秋をしる人のなきとあるが、詞が劣る。

きちかうのはな　とものり

あきちかうのはなりにけり白露のおける草葉も色かはり行く

釋 ○きちかう　桔梗の字音。和名抄に、「和名阿里乃比布木」とある。卑しげでもあり、詞も長いから、字音にいひならしたのだらう。○あきちかうのはなりにけり　秋近く野は成りにけりの意。「近う」と音便を用ひたのは本歌には例のない事だが、物名の歌なので、止むを得ぬ變例であらう。桔梗の花を隱した。

大意 野の景色を見ると、夏も深くなつて、物悲しい秋の時節が、思ひがけず近くなつたわ、そのしるしには、この野の露の置いてある草も葉も、おひ〳〵色が變つて行くわ。

評 上句は晩夏、下句は仲秋の頃のさまで、一致しない。雅嘉は上句を助けて、「秋の物悲しき頂上の時節の近づきたる意」とし、景樹は下句を助けて、「萩の下葉などは、五月の末より色付き黄ばみて散りもすべければ」といつてゐるけれど、このまゝではさうも聞えない。

しをに　よみ人しらず

ふりはへていざ故里の花見むとこしをにほひぞ移ろひにける

釋 ○しをに　和名鈔、「紫苑一名紫菀、和名能之、俗云之乎邇」とある。今シヲンといふ。○こしをにほひぞ來しを匂ぞ。「匂」は花の色澤をいふ。紫苑を隱した。

大意 どりや古里の花を見ようと思つて、わざ〳〵來たものを、殘念にもう、花の色澤が變つてしまつたわ。

りうたむのはな　友のり

わが宿の花ふみしだくとりうたむのはなければや此處にしもくる

釋 ○りうたむ　和名鈔に、「龍膽、和名衣夜美久佐、一云邇加奈、味甚苦、故以レ膽爲レ名也」とある。今リンダウといふ。眞淵は、「唐音の轉か」といつてゐる。○ふみしだく　蹂み拉ぐこと。○とりうたむのはなければや鳥打たむ野は無ければにやである。龍膽の花を隱した。

大意 自分の庭の大事の花を踏みにじる、あの鳥を打たうわ、あれは住む野が無いかして、とかく此處にサ來

る、迷惑なことよ。

評 丸子を飛ばして小鳥を彈つことは、支那の詩にしば〳〵見えてゐる。こゝも其の趣であらう。杖などで打たうとするのではあるまい。

二句、六帖、友則集にふみちらす、結句、友則集にこゝにしも鳴くとある。

をばな

ありと見て頼むぞ難きうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ　よみ人しらず

釋 ○をばな　尾花。その義は薄の穂に出たのが、獸の尾に似てゐるからだといふ。眞淵が、女郎花に對して、男花といつたのであらうとて、萬葉集卷廿に「秋野には今こそ行かめものゝふのをとこをみなの花匂ひ見に」の歌を引いたのは疑問である。をとこをみなは花の名ではない。たゞ男女を花に譬へたのである。或は、麻花の義だともいふ。その狀が一總の苧の亂れたのに似てゐるからだらう。○うつせみの　世にかゝる枕詞。○世をばなし　尾花を隱した。

大意 すべて物は有ると思つても、はかなくて頼みには成り難いわ、この世の中をばいつそ無いものと、料簡を着けて見ようか。

評 例の一切空の無常法門である。

けにごし

やたべの名實

うちつけにこしとや花の色を見むおく白露の染むるばかりを

釋 ○けにごし　和名鈔に「牽牛子、和名阿佐加保」とある。今の朝顔である。但支那では花を牽牛花といひ、實を藥用にする時、牽牛子と呼んだ。牛の字は音便で、午の音と同一になつたのだらう。○うちつけにこし　打ち付けに濃しである。「打ち付け」は唐突の意。牽牛子を隱した。○ばかりを　ばかりなるをの畧。

大意 牽牛子の花を見て、誰れも一寸見るからして、濃い色ぞと見ようが、何あれは、花のうへの白い露が染めたまでの、何でもない物であるものをサ。

評 牽牛花をよんだのである。

二條の后の、春宮のみやすむ所と申しける時に、めどにけづり花させりけるを、よませたまひける　文屋康秀

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこのみなる時もがな

釋 ○二條の后云々　「二條后」幷に「東宮の御息所」の事は、春上「春の日の光にあたる」の條に既出。「めどにけづり花」のめどは蓍と馬道との二說がある。蓍は、或は菁萩であらうとも、或は玉箒俗に箒草と呼ぶ物であらうともいはれ、いづれもその莖に削花をさして作つた由である。又、馬道は和名鈔に「俗音、馬多宇、向レ堂之道」とあつて、殿中の眞中の板廊下をいつた。そこに削花をさしたといふことである。削花は木を削り掛けた造花である。延喜式に「金銅花瓶二口、菊削花二枚」と見え、其の他のをも考へ合はせてみると、佛事に多く用

ひたらしい。これは削り木と同じ物で、蜻蛉日記に「紙屋紙に書かせて、立文にて、削り木に附けたり」とある。この文は、源高明公の北の方の尼になるのを弔はうとて贈つたのだから、やはり佛事に緣ある物だとの證據になる。又思ふに、馬道の說は諾け難いやうだ。歌も、花のない木に花の咲いた趣をいつてゐるから、著に削花をさした物である事は確かである。後世削り掛けといふ物を門にさすけれど、それは粥杖の移つたもので別である。○あらざらめども　著を隱した。○このみ　此身に木の實をかけた。

大意　著に附けた削花を見ると、花の咲く木でも無からうけれども、花が意外に咲いたわ、それだから年古りた木にも、實の結る時もあつてほしい、卽ち年寄りました私のこの身も、何卒成り出る時節もあつて欲しいと存じます。

評　上句は、俗に「煎豆に花が咲く」といふのと同想で、春上の「春の日の光にあたる云々」と、同一の情願である。歌も同調。

しのぶぐさ

山高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞちりける　きのとしさだ

釋　○しのぶぐさ　秋上「君しのぶ草にやつるゝ」の條に既出。○あらしのふくさと　忍草を隱した。

大意　近くの山が高くて、常々嵐の吹く里は、咲き匂つて居る間もなく、花がサ散つたわ。

二句、六帖に峰にあらしのとある。

やまし

時鳥みねの雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき　平あつゆき

釋　やまし　山にある羊蹄菜か。和名鈔に「菫、和名之布久佐、一云之、羊蹄菜也」とある。又、同鈔に、知母をヤマシと訓んでゐる。○雲にやまじりにし　山羊蹄を隱した。

大意　時鳥は、峯の雲の中に飛んで混つてしまつたかもしれぬ、鳴聲によつて、居るとは聞くけれども、形は見えようも無いわ。

からはぎ

うつせみのからはきごとにとゞむれど魂の行方を見ぬぞ悲しき　よみ人しらず

釋　○からはぎ　萩花集說に、草萩に對したる木萩の名とした。思ふに幹萩の義であらう。眞淵が「一種枝の細く花の色深きを、唐撫子の類にて唐萩と呼べる歟」といつてゐるのは、論據のない說である。又、千秋が、からをぎの誤であるとして、清暑堂の御神樂の時に、人長の持つ枯荻であらうかといつてゐるのは、妄斷である。○うつせみ　空蟬。現し身の意をかけた。○からはきごとに　骸は木毎にに、棺毎をかけた。棺は古くキといつた。幹萩を隱した。○魂　たましひ。なき魂。

大意　蟬の蛻殼は、木毎に留めてあるけれども、その身は何處にか飛んで、往く方が知れぬ、そのやうに、人間も死んでしまふと、骸は棺毎に留めてあるけれども、魂ひの行方の見えぬのがサ悲しいわ。

評　靈魂不滅の思想は神代からあるが、佛敎傳來この方盛んになつてきた。しかも妄執によつた死者生者の魂は

物の怪となつて迷ふと信じたものゝ、その行方を見屆た者としてはやはりないのであつた。

かはなぐさ　　ふかやぶ

うばたまの夢に何かはなぐさまむうつゝにだにも飽かぬ心を

釋 ○かはなぐさ　和名鈔水菜類に、「水苦一名河苦、和名加波奈」とある。これは河藻である。景樹は、「既に川菜といへるに、草の字を添へむことといかゞ、甘菜草、水菜草といふ事なし」といつた。○うばたまの　夢にかゝる枕詞。「うばたま」は古言ではぬばたまといつた。和名鈔に、「射干、一名烏扇、和名加良須安布木」とある烏扇の實で、其の色は黒い。野にある物故、野眞玉の義であらうとも、野羽玉の義であらうともいふが、判然しない。色の黒い物だから黒と續け、轉じて夜と續け、更に轉じて夢とも續けた。○何かはなぐさまむ　川菜草を隱した。

大意 戀しい人を夢に見たとて、何で心が慰まうぞ、慰むことでは無い、現在見てさへも、まだ飽き足らぬやうに思ふ心であるものをサ。

さがりごけ　　高向のとしはる

花の色はたゞ一さかりこけれどもかへすゞ〳〵ぞ露は染めける

釋 ○さがりごけ　蔦の種類で、蔓に青白い毛が生じてる。深山の古木などに這ひかゝつて垂れる。和名鈔に「蘿、比加介、女蘿也」とあるのがこれである。垂苔とも、さるをかせともいひ、俗に狐のたすきといふ。○一さかりこけれども　さがり苔を隱した。

大意 花の色はほんの一盛りだけ濃いけれども、これまでに染め返しゝ、何遍も露がサ染めたわ。

にがたけ　　しげはる

命とて露をたのむにかたければ物わびしらに鳴く野べの蟲

釋 ○にがたけ　苦茸か。眞淵は、「和名鈔に『長間箏、箏青最晩生、味大苦也』とある物なるべし。今は女竹とも、しのめ竹ともいふなり」といつた。けれどもこの前後、苔、蕨などの間に並べてあるのだから、茸とする方がよいだらう。次のも皮茸を隱した。○わびしらに　侘しの語に、形容のらの尾辭を添へた副詞。

大意 わが命として露を頼みにしても、はかなくて頼みになり難いので、何やら難儀さうに鳴く、野邊の蟲であることよ。

評 結句、この頃には珍しい語調である。

かはたけ　　かげのりの王

さよふけてなかばたけ行く久方の月ふきかへせ秋のやま風

釋 ○かはたけ　皮茸である。今、こう茸と轉じて呼ぶ。眞淵は和名鈔に、「苦竹、加波多計、本朝式用三河竹二字」とあるに據つて、苦竹とした。○なかばたけ行く　皮茸を隱した。

大意 夜が更けて、もう空の半分ほども闌けて行くあの月を、もとの東の方へ吹き戻してくれい、秋の山風よ。

評「月吹き返せ」の狂想が面白い。體格豪宕で雄渾であるが、自然萬葉調と異なつた處があつて、新古今時代の豪傑等が希つた風調の祖をなしてゐる。

わらび　　眞せい法師

けぶり立ちもゆとも見えぬ草の葉をたれかわらびと名づけそめけむ

釋○わらび　蕨。○わらび　藁火。蕨を隱した。

大意　藁を焚く火ならば、烟が立つて燃える筈なのに、さうとも見えぬ草の葉であるのを、誰れがわらびといふ名を附け初めたのであらうか。

評　契沖は、「物名の詠みざまにあらず、この部に入るべきならず」といつた。上に、折句の歌をも收めた程だから、大まかに見るがよい。

さゝ　まつ　びは　ばせをば　　紀のめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ

釋○さゝ　和名鈔に、「篠、和名之乃、一云佐々、俗用二小竹二字一、細々竹也」とある。○まつ　松。○びは　枇杷。○ばせをば　和名鈔に、「芭蕉、和名發勢乎波」とある。蕭韻の字は、ヲの假名に響かして用ひた。その例は澤山ある。○いさゝめに　假初にの意、篠を隱した。○時まつ　松を隱した。○ひは　日はである。枇杷を隱した。○心ばせをば　「心ばせ」は意思である。芭蕉を隱した。

大意　つい逢ふ時を待つ間に、ひどく日數が經つたわ、逢ひ度いといふ心持をば、先の人に、とくと見られ〳〵してサ。

評　覺束なく思つて日を經た間に、度々自分から音信れなどしたのをいつたものであらう。

なし　なつめ　くるみ　　兵衛

あぢきなし歎きなつめそうき事にあひくるみをば捨てぬ物から

釋○なし　梨。○なつめ　棗。○くるみ　胡桃。○あぢきなし　無益、味氣無しの義だといふ。梨を隱した。○歎きなつめそ　歎き詰むる勿の意。棗を隱した。○あひくるみ　遭ひ來る身である。胡桃を隱した。

大意　あゝ無益の事よ、そのやうに一途に歎くなよ、いろ〳〵さま〴〵の憂い事に遭つて來る、自分の身を捨てもせずに居ながらサ。

評　契沖は、「三代實錄に、『仁和三年二月信濃國例貢、梨子、大棗、吳桃子、雉腊、別貢、云々』これをもて思ふに、この貢物をもて來たる時、これを詠めと仰言などのありて詠めるにや」といつた。

からことといふ所にて、春の立ちける日よめる　　安倍清行朝臣

浪の音けさからことに聞ゆるははるのしらべや改まるらむ

釋○からこと　備前國韓琴の浦であらう。○けさからことに　今朝より殊にである。韓琴を隱した。

か。

大意　波の音が立春の今から變つて、長閑に聞えるのは、この唐琴の浦の調子も、春の調子に改まるのであらうか。

評　樂家の說に、春は双調、夏は黃鐘、土用は一越、秋は平調、冬は盤涉調だとか。それ故、春の調子が改まるといつたのだ。地名のからことを、樂器の韓琴に取り成して、浦の立春の景氣を歌つた。韓琴は新羅琴をいつたものか。又、日本琴に對して舶來した箏などの類を總稱したものか。

いかゞさき　かねみのおほきみ

かぢにあたる浪の雫を春なればいかゞさき散る花と見ざらむ

釋　○いかゞさき　蜻蛉日記に、「石山に參りて、舟にて歸るとて、いかゞ崎、山吹の崎などいふ所を、蘆の中より漕ぎ行く」とある。これに據れば、近江の打出の濱から、勢田、田上（タナカミ）あたりまでの內にあつたのであらう。枕草子にも、「崎は辛崎、いかゞ崎」とある。○かぢ　舟を進る櫂、梶、棹をすべて、古くはかぢといつた。○いかゞさき散る　如何が咲き散るである。いかゞ崎を隱した。

大意　舟の櫂に當つて散る波の雫を、今は春だから、何で散る花と見ないことがあらうぞ、散る花とたしかに見る。

評　「咲き散る」の咲きは、熟語として輕く添へたまでゝある。口ぶりから見ると、人に答へたものらしいから、返歌であらう。下の二首、これも題に就いて、水邊の光景を詠んである。

からさき　あほのつねみ

かのかたにいつからさきに渡りけむ浪路は跡も殘らざりけり

釋　○からさき　近江國滋賀郡辛崎。唐崎とも書く。○かのかた　彼の方と、彼の潟との兩說がある。○いつからさきに　何時より先にである。辛崎を隱した。

大意　あの先の方の辛崎に舟があるが、何時からあのやうに、自分より前に渡つたのであらう。渡れば跡のある筈なのに、波の路には、これといふ渡つた跡も殘らなかつたわ。

伊勢

波のはなおきからさきて散りくめり水の春とは風やなるらむ

釋　○おきからさきて　沖より咲いてである。辛崎を隱した。

大意　波の寄せるのが花と見えるが、この波の花は沖から咲いて、磯へさして散つて來ると見えた、水の春には風がなつて、このやうに波の花を咲かせたり、散らせたりするのであらうか。

評　四時の變化のない水を捉へて、春をいひ秋をいふ。この種の着想は、奈良時代にはまだ發達しなかつた。秋下、是則が、

もみぢ葉の流れざりせばたつ田川水の秋をばたれか知らまし

と詠んだなど、共に後世の尖巧派の基を開いた。

かみやがは　つらゆき

うば玉のわが黒かみやかはるらむかゞみのかげにふれる白雪

釋 ○かみやがは　山城國の北野と、平野との間を流れる川で、古へ紙漉き場のあつたところ。拾芥抄に、「紙屋院、圖書別所、在二野宮東一云々」。圖書寮は書寫を司る故に、紙漉く所をも兼管したのである。○うば玉の「わが」を隔てゝ、黒へかゝる枕詞。解は上に既出。○黒かみやかはるらむ　紙屋川を隱した。

大意 自分の黒髪が、白髪に變つたのであらうか、自分が對ふこの鏡へ映つた影に、眞白に降つて居る雪を見ればサ。

評 李白の、「不レ知明鏡裏、何處得二秋霜一」と、その興趣を同じくし、張九齡の、「誰知明鏡裏、形影自相憐」と、その感慨をひとしくしてゐる。三句、かはりぬらむとなくては、時の打合が不都合に思はれる。拾遺集に、二三の句をわが黒髪に年暮れてと直したのは、こゝに見る所があつたのであらうか。

拾遺集に再出したのは、詞書をも、「師走の晦日がたに、年の老いぬることを歎きて」と直してあるが、よくない。この集撰著の頃の貫之は、未だ鏡裏を白了する程の年配でない。題詠であることが分る。

よどがは

あしひきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

釋 ○よどがは　山城の淀川である。○いかにせよとかはるゝ　淀川を隱した。

大意 山邊に住んで居ると、只さへ氣のふさぐものを、どうせよといふ事か、白雪がかゝつて晴れる時が無いわ。

評 「いかにせよとか」の辭樣、既に萬葉集にその例がある。

かたの　たゞみね

夏草のうへは茂れる沼水の行くかたのなきわがこゝろかな

釋 ○かたの　河内交野郡の交野である。○沼水の　沼水の如くの意。○行くかたのなきわが心　交野を隱した。心の行くは、心の滿足すること。

大意 夏草がうへに一面に茂つてゐる沼の水の、流れて行くところの無いやうに、滿足しやうの無い、自分の心であることよ。

評 沼池などの水は、滯留して流れないのを本とした序歌である。初二句はたゞ沼水の修飾で、うへは夏草の茂れるといふべきのを倒裝したのである。これをわが身の世に埋れて人に知られないのを譬喩したと見てはならぬ。又、「かな」の助辭の打合をおもふに、行く方もとある方が妥當であらう。果して六帖には「も」とある。交野の物名に拘はつて、枉げたのであらう。

かつらのみや　源ほどこす

あきくれど月のかつらのみやはなる光を花と散らすばかりを

釋 ○かつらのみや　今昔物語に、「五條西洞院に、桂の宮と申す人おはします。その前に大なる桂の木ある故に、名づけまゐらせたるなり」とあるのが、これであらう。○月のかつらのみやはなる　實やは結ぶの意。桂の宮を隱した。月の桂のことは、秋上「久方の月の桂も」の條に既出。○花と散らすばかりを　「花と」は花の如く、花としてなどの意。「を」は歎辭。

大意 すべての草木は秋は實る物だが、秋が來たとて、月の中の桂の實が結ぶか、いや結びはせぬ、たゞ常よりさやかに、月の光を花のやうに散らすばかりの事よ。

評 月華といひ、桂花の亂れ、桂葉の飜るといふことは、漢詩に多く散見してゐる。たゞこの新案は、桂の實に思ひ到つたのにある。

百和香　よみ人しらず

花毎にあかず散らしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思ふ

釋 ○百和香　和名鈔に、「神傳云、淮南王張錦繡之帳、燔百和香、漢武内傳云、武帝好長生之術、求道、七月七日帚宮掖之内、設座殿上、紫羅席庭、燔百和香、云々」とある。契沖は、「五月五日に百草を取りて合はする香なり」といつた。○いくそばくわがうし　幾何我が憂しである。百和香を隱した。

大意 花といふ花をば、皆殘り多いのに散らした風であるから、どれ程自分が、あの風奴の仕打を憂いと思つた事か、並大抵に憂いと思つた事では無いわ。

すみながし　しげはる

春がすみなかしかよひぢなかりせば秋くる雁は歸らざらまし

釋 ○すみながし　墨流しである。墨汁を水の上に流して、その亂れた狀を紙や布に寫し取つた物。今もあるものである。○春がすみなかし　春霞中しである。墨流しを隱した。「し」は强辭。

大意 春霞の一面に立ち塞つてある中にサ、通ひ路が無いものであつたならば、何時も秋來る雁は、この春に歸らないだらうものを、霞の中に路があるかして、雁が歸つて行くが殘念だ。

評 「秋くる」を「春霞」に對した。秋こし雁といふべきのを、「秋くる」と現在にいつたのは、調をいたはつたのである、といふ說もあるが、いかゞであらう。「秋くる」は、何時も秋には來るといふ意から、形容に置いた詞で、過去の事實をいつたのではない。霞の通路は、白雲の道、雲路、空の通路などと、同じ辭樣である。「なかし」の一語は贅癤だが、物名の事だから、仕方がない。

おき火　みやこのよしか

流れいづるかただに見えぬ涙川おきひむ時や底はしられむ

釋 ○おき火　和名鈔に、「熾、於岐比、猛火也」とある。おこり火の意であらう。○涙川　涙を混喩したのであつて、川の名ではない。○おきひむ　沖干むである。熾火を隱した。

大意 流れ出す方角さへ見えない涙川であるから、底の深さも猶更知れないが、沖の深みまで水の干ようとする

時があつたらば、底の深さも知れようか。

評 景樹が、「愁思の竭きむ時、自然涙も盡きて流れざらむの意を、河になしていへるなり」と、說いた通りである。

ちまき　大江千里

のちまきのおくれておふる苗なれど仇にはならぬたのみとぞ聞く

釋 ○ちまき　和名鈔に、「糉亦作レ粽、和名知萬木、以二菰葉一裹レ米、以二灰汁一煮レ之令二爛熟一也、五月五日啖レ之」とある。支那の例に倣つてした事である。○のちまき　後蒔である。粽を隱した。○たのみ　田の實に賴みをかけた。田の實は實つた稻をいふ。

大意 遲蒔の種で、外のよりは後れて生える苗であるけれども、萬更むだにもならず、秋はやはり實つて、賴みある田の稻であるとサ聞くわ。

評 諷喩である。晩年からの學問だけれども、あながち遲蒔であるとて放棄すべきものではないと、希望に光明ある由を述べたのである。或は、出世などの人に後れた身であるが、末に賴みがあるから落膽すべきでないとの意を比喩したともいはれるであらう。作者の人柄からいふと、どちらでも通用する。

『は』をはじめ『る』をはてにて、ながめをかけて時の歌よめ」と、人のいひければよめる　僧正聖寶

はなのなかめにあくやとて分け行けば心ぞ共に散りぬべらなる

釋 ○はをはじめ云々　はの字とるの字とを、歌の終始に置き、ながめの三字をいひかけて、そして當季の歌を詠めとの意。「ながめ」は長雨の約。○はなのなかめにあくや　長雨を隱した。

大意 花の咲いた中を、目に見飽くかと思つて分けて行けば、花に目が移つて、自分の心がサ、花と一所にあちこちと散つて行きさうな心持がするわい。

評 春の霖雨のつれ〴〵に、眞言祕密の大和上を弄んで、難題をいひかけたものと思はれる。和尙、生憎にこの雕技があつて、綺語罪過を犯し、文字魔を作した。

この部の歌は、しひて精評を加へない。それは作者の目的が、それになく、これにある事を思ふからである。歌として論じたなら、必ずその本意に背く點が多からう。

古今和歌集卷第十一

戀歌一

題しらず

ほと、ぎすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな　よみ人しらず

釋 ○戀歌　男女間の戀愛を歌つたのを、この部に收めた。萬葉集には、男女親子兄弟朋友の相思ふをも一つに收めて、相聞の部を立てた。この集に至り始めて特に戀の部を立てゝ、後來の勅撰集の爲に、先例を開いた。○なくや　「や」は間投の歎辭。○あやめ草　水澤に生ずる香草の菖蒲で、花を賞する所謂花菖蒲とは別である。○あやめも知らぬ　「あやめ」は衣の文目から起つて、何とも筋が立たず分別のつかぬを、あやめなしとも、あやめを知らぬともいふ。

大意　時鳥の鳴くまあ、五月のあやめ草の名の、あやめも目も分らぬ無茶な戀をまあ、自分はすることよ。

評　初戀を歌つた作である。戀は情の火である。その燃ゆるや、多く一時的の性質を帶び、その熾なるや、實に一三昧である。あやめも知らぬ戀にして、始めて人を戀するといふべきである。三句までは萬葉集卷十八家持の歌に、

郭公きなく五月の、あやめ草蓬かづらき、云々。

とあるを序詞に轉用したもので、時鳥と菖蒲とは五月の端午の節をもてなす重要な景物である。これを背景として、梅天陰鬱の候に戀の苦悶を喫する作者の境地は、同情に堪へない。「あやめ」の反復、既に諧調たるうへに、全首語々圓健にして、氣勢流活の妙がある。「戀もするかな」の結句は集中に數多見える。この口氣は我れと我が行爲を怪訝し批判してゐるものである。これ理性と感情との衝突を意味するもので、只自家批判に終始してゐるのではない。抑へ難い戀心に、いかに煩々悶々たるかを表現する。この型式は奈良朝歌人の發明にかかるもので、萬葉集に、

高くらの三笠の山になく鳥の止めば繼がるゝ戀もするかも　（卷三、赤人）

女郎花ささきさはにおふる花かつみかつても知らぬ戀もする鴨　（卷四、中臣女郎）

かほ鳥の間なくしばなく春の野の草根のしげき戀もするかも　（卷十）

言にいでて云はゞゆゝしみ朝顏のほには開き出ず戀もする鴨　（卷十一）

この山の峰に近しとあが見つる月の空なる戀もするかも　（同）

君がきる三笠の山邊居る雲の立ちては繼ける戀もするかも　（同）

庭淨みおき邊漕ぎ出づる海士舟の執る梶間なき戀もするかも　（同）

の類皆同型の先規である。平安朝歌人は、遂に奈良朝歌人の窩套を渾脫することが出來なかつたものか。

素性法師

音にのみきくの白露よるはおきて晝は思ひにあへずけぬべし

釋 ○音にのみきく　噂にのみ聞くに、菊をかけた。○よるはおきて　夜は置きてに、起きてをかけた。○思ひ日を寄せた。○あへず　秋下「ちはやぶる神のいがきに」の條に既出。○けぬ　「け」は消えの約。

大意　風聞にばかり聞いて、まだ見た事も無い人を思つて、夜は寐られないので、聞くといふ名のある菊に、白露の置くといふと同じく起きて居て思ひ明し、さて晝になれば又、日影にその露のえ堪へずに消えるやうに、戀しさにえ堪へずに、この命が消えてしまひさうなわ。

評 噂に聞いて戀するといふ。特別の場合には今でも或はあらうが、この時代には多い事だつた。それは當時の嫁娶の順序が最初は文通のみで、それから訪問といふ段取になるので、いづれも男から仕掛けるのであるから、初は見ぬ戀にあこがれる譯である。寐るべき夜は終宵懊殺されて、夜明の鐘の遲さを怨み、起き居るべき晝は終日愁絶されて、ほけ〳〵として思ひ暮らす。この意を後に大中臣能宣は、

御垣守衞士のたく火のよるはもえひるは消えつゝ物をこそ思へ

と再演した。晝夜の對照は、夙く奈良時代にいひならした言で、

晝はもうらさび暮し、よるはも息づき明し、

の類、枚擧に遑がない。細心巧筆は時にはわるくもないが、警喩餘りに粘密に過ぎて、弄語の巧は、却つて人をして厭惡の感を起さしめる嫌がある。然し延喜以後かうしたよみ方がますゝ盛んに流行した。

結句、六帖にたへず消ぬべしとあり、新撰和歌にけぬべきものをとある。

よし野がは岩波たかく行く水のはやくぞ人をおもひそめてし　紀貫之

釋 ○岩波　岩に激する波をいふ。平安時代の新熟語らしい。○行く水の　行水の如くの意。○はやく　夙くの意。忽ちの意とする説は、結句の「てし」の辭に文法上の時が打ち合はない。

大意　吉野川の岩根に波が高く立つて流れて行く水は、早いことであるが、その早いといふ如くに、疾くの昔に人を思ひ初めて居つたわ。

評　三句までは序である。力強く調さやかにいひ下したのは、よい手際である。想ふにその思ふ人の許に詠んで贈つた歌であらう。長い年月戀の心を胸に祕め來つて、遂に包み切れなくなつた戀の奴が、こゝに慇懃の意を致して、情の露の一雫を待つ趣で、その幽怨の情は甚だ深い。以下、「人」といふ語が、對手又は意中の人を指した場合が多いことを、特に注意ありたい。

白浪のあとなきかたに行く舟も風ぞたよりのしるべなりける　藤原勝臣

大意　白浪のうへの、道の跡も無い方へ行く舟でさへも、思ふ方へ行くには、風といふ物がサ、便りの手引であつたわい。

評　三句の「も」の辭の強い意に用ひられた事は、意釋の通りである。さて、わが戀ふ人に便りのしるべたるべき風乃ち良媒の無い事を怨んだ。諷喩の運意が適切で、爲に幽婉の味ひが生ずる。

おとは山おとに聞きつゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな　在原元方

釋 ○おとは山　山城の山科の音羽山で、名刹清水寺がその西麓にある。逢坂の關の西南につゞいてゐる。旁ら下の、「音」といふ同音の語を喚び起した序である。

大意　音羽山の名の音に卽ち噂に、其の人の事を聞き〳〵しては居ながら、逢坂の關の名の逢ふといふ事もえせずに、越えられぬ關の此方で、年月を經ることよ。

評　早く逢坂の關を越えたい、卽ち思ふ人に逢ひたいの餘意がある。躬恒の歌に、

はる雨に君をやりてば逢坂の關のこなたに戀ひや渡らむ

同樣の警喩である。「逢坂の關の此方」は逢はぬ事を婉曲に轉義した。しかも音羽山は關の此方(コナタ)にある。(京からいふと)かうした地理的關係を考慮においたこの作は、京人達には頗る警拔なものとして喝采されたに違ひない。かく巧中に巧を求めるのは、この作者の慣手である。六帖には、作者を貫之とある。

○

たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら浪

釋 ○あはれ　感歎の語で、下にかはゆい、戀しいなどの意を含む。○よそにても　餘所での意。「も」は歎辭。○心をおきつしら浪　心を掛けおくに、沖つ白浪をかけた。「心をおき」は隔心の意ではない。

大意　思ふ人に言ひ寄るすべが無さに、このやうに餘所ながらまあ、かの人の上に心を掛けて置くので、その置くといふ沖の白浪の、跡から〳〵打ち掛け〳〵するやうに、立ち返つてつく〴〵あゝいとしいとサ息ふわ。

評　剪裁彫琢はたまにはいゝが、屢してはうるさい。乃祖業平朝臣が見たら、何とした凡骨と悲しむ事であらふ。只、「心を沖つ白浪」といひ捨てた語調に、嗟歎の味のやゝ動くのみである。

つらゆき

世の中はかくこそありけれふく風の目に見ぬ人も戀しかりけり

釋 ○ふく風の　ふく風の如くの意で、「目に見ぬ」にかゝる序。○目に見ぬ　風よりいへば、目に見えぬとあるべきだが、一方の意の重きにひかれて、「見ぬ」といつた。

大意　世の中は、皆かうしたタワイもない物であつたわい、吹く風の目に見えぬやうに、まだ一目見た事も無い人さへも、このやうに戀しいものであつたわい。

評　見ぬ人戀し、こんな理窟のあはぬ事はない。然し事實であつて見れば仕方がない。一旦は自己の行爲を怪んで見たが、考一考すれば、矛盾がこの世相だと氣が付いたといふ。蓋し煩悶の餘りに出た語である。三句以下を契沖、眞淵等の、「吹く風の音にのみ聞きて、まだ見ぬ人を戀ふる」と解したのはいひ過ぎてゐる。三句は只、「目に見ぬ」の序のみに過ぎない。夙く萬葉集に「ふく風の見えぬが如く」と所々に詠んである。昔からいひ馴した詞と思はれる。埤雅に「人不レ見レ風」ともある。和漢想を同じうするものか。

右近のうまばのひをりの日むかひに立てたりける車の下すだれより、女の顔の、ほのかに見えければ、よみてつかはしける

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなくけふや詠め暮さむ

在原業平朝臣

釋 ○右近のうまば云々　袖中抄に、「右近の馬場は一條より大宮の方をいふ。それより東の方は左近の馬場なり」とある。拾芥抄には、「一條京極の末」とある。「ひをりの日」は古來の集説である。袖中抄には引折の日の意として、「五月三日左近の荒手詰、四日右近の荒手詰、五日左近の眞手詰、六日右近の眞手詰にして、この六日の右近の眞手詰の日は、紅の下の袴、織物の指貫に、括りをあげずして、そばを挾みて、褐の尾を胯より前ざまに引たをりて、前に挾めり。されば、この眞手番の日を、ひをり日といふ」とある。眞淵、宣長は、「五月の五六日に、武德殿に幸して騎射をみそなはし給ふ御定なれば、右近の馬場に騎射ある事は、他日なる事明けし」と難じた。けれど世々にその式の行はれたことの、史に載せられたのが甚だ稀なことから考へると、その日内裡で式の行はれない時は、左右の近衛の馬場で、代に行はれる例と思はれ、今昔物語にも、「右近の馬場に、五月六日弓行はれけるに云々」とある。「ひをり」を、眞淵は「引櫂又は、標櫂の意ならむ」といひ、近藤芳樹は「褻の衣は萎えばみ、晴の衣はこはく折目正し。このこはきを引折といふ。台記の、皇后御讀經結願の件に『右

大將衣冠出二紅引折一』春日詣の件に、『着二引折一』などある、やがて晴の衣なり。されば、衣の地厚くて、引折るやうに強き義よりつけたる名にて、また如木と云へり。この晴の衣を引折る日は卽ち晴の日の意なり」といひ、伴信友は、右近のうまばの日と讀み切つて、柵の日向ひに立てたりける車と解した。「車の下すだれ」は西宮記に、「婦人之車簾也」と見えて、車簾の下に帷幕の如くに掛けた物をいふ。

大意　一向に見ぬでもない、又たしかに見たでもない人が、かうも戀しいならは、何がなしに今日は一日、辛氣に思ひ暮さうことか。

評　それでは迷惑だから、しかと名告つて下さいの餘意がある。伊勢物語にも、今昔物語にも、「中將なりける男」とあつて、作者が近衛司で、右近の馬場に行き向つたとある。近衛舍人達の騎射があるので、この日は見物人が賑ふ。中には女車もある。簾からこぼれ出た物見車の出衣や、その袖口どもの艶なのには、「天が下の好き者」と歌はれた渠れ業平が、とても默つて通さう筈がない。まして、下簾からその透影が夕日に榮えて見えたとなつては、公用も何もあつたものでない。但歌は只當座の外交辭令に過ぎない。

かへし　よみ人しらず

知る知らぬ何かあやなくわきていはむ思のみこそしるべなりけれ

釋　○知る知らぬ　知る人知らぬ人の略。○わきて　分けての古言。

大意　見知るの見知らぬのと、詮も無いことを差別を立て、何でいはうぞ、いはずともものことである、戀といふものは、たゞ一筋の思ばかりがサ、その成就する手引であつたわい。

評　知る知らぬは問題でない、只信實の心から思ひなさい、さらばその思にめでて逢ふ時もあらうの意だから、女にも多少その氣があるのである。果して、伊勢物語には、「後には誰れと知りにけり」と書いてある。兩箇の才人が互に眷戀の情を含んで、物いひ渡つた當座の狀況は、顧ふに頗る艶なるものであつたらう。贈歌の主意は下句にあるを、これはその初二の句を捉へて、見る見ぬに拘はるは、淺はかな心ぞとそらしてもどいた。人を射るに先づ馬を射る筆法は、返歌の祕訣である。

かすが野のまつりにまかりける る女のもとに、家をたづねてつかはしける　みふのたゞみね

春日野の雪間をわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも

釋　○かすが野のまつり云々　一本、春日の祭とあつて、野の字が無い。春日の祭は、大和國の春日神社の祭祀である。延喜式に、「春二月、冬十二月、并上申日祭レ之」とある。貞觀の頃に朝廷の式祭に加へられたらしい。「物見」は今の見物といふに同じい。○おひ出くる　生ひ出で來る。○草のはつかに　草の如くはつかにの意。「はつか」は僅かの古言。○はも　歎辭。

大意　この春日野の雪の消え間を分けて生えて出て來る草の、チラリと見えるやうに、今日一寸姿の見えた貴女はまあ。

評 存外に深く戀しくて溜らぬの餘意がある。頃は二月の祭と見える。作者は藤氏のある公卿の隨身などで出掛けたか。とにかく舍人はその祭には澤山往つたものである。春日野、雪消の澤のあたり、萌え出した草が未だ短くはつかな眼前の光景を、序詞の材料として、はつかに見た祭見物の衣被ぎの女に詠んで贈つたのである。その家を突きとめて贈るに至つては、その熱心さに驚かれる。女は勿論奈良の里人である。作者はもとより舍人風情の男、まづ程々の懸想であらう。景樹が、物見を物見車と解したのは大業過ぎる。詞書はそんな物々しい身分の人が出てきた趣でない。又事實の上にも協はぬ事である。「見えし君はも」とのみいひ放して餘意をもたせた叙法は、含蓄の味が深い。

結句、六帖に君かもとあるが、詠歎の風味に乏しい。

人の花摘しけるところにまかりて、そこなりける人のもとに、のちによみてつかはしける　つらゆき

山櫻かすみの間より、ほのかにも見てし人こそひしかりけれ

釋 ○花摘　春下「とゞむべき物とはなしに」の條に既出。詞書のやうは、評語を見合はせて心得られたい。

大意 山の櫻を霞の間から見るやうに、餘所ながらほのかに見た事であつた人がサ、戀しくあつたわい。

評 佛の供養の料にとて、木草の花など摘みあつてゐる所に、何かの用で作者の往つた處が、殊更に羞かしがつて物蔭に這ひ隱れた女の許に、後にこの歌を贈つて揶揄つたものらしい。「見てし人こそ」の強き語調、この意を扶けていよ〳〵面白い。「山櫻霞の間より」は、その花摘してゐる野邊の光景である。それを直に、譬喩の材料に取つた。想ふに、その人は花のやうに艶な人であつたらう。下句餘りに說明語が長過ぎて、感じが離れてくる。詞は圓滑であるが、忠岑の「草のはつかに見えし君はも」の含蓄の味ひの深いのには及ばない。

下句、家集に見しばかりにや戀しかるらむとある。

題しらず　もとかた

たよりにもあらぬ思のあやしきは心を人につくるなりけり

釋 ○たより　消息や小包やうの物を配達する使をいふ。もと人の往來の便りに言傳てたのから出た名。○つくる　送附するの意。

大意 使こそ物を人の許に届け附けるが、使でも無いこの思が、不思議な事は、自分の心をかの人の許に届け附けるのであつたわい。

評 何者がこの心を人の許に持つて往つたかと見れば、豈に料らんやわが胸の思であつたと怪みいぶかつた。元來思と心とは、體用の別こそあれ一つ物なのを、姑く名の二つに別れたまゝに、全く分離させて巧み成したことは、雜部に、

身をすてゝいにやしにけむ思ふよりほかなる物は心なりけり

とあるに同じい。戀は人を愚痴にし又神經質にするから、つい瑣末な事にも想到するが、かゝる纖細の構思は感哀に乏しく、氣味が索きる。

後撰集に再出したのは、詞書に、「はつかに人を見て遣はしける」とあつて、作者は貫之である。後撰の頃、夙

く元方の名の脱ちた本があつて、上の歌に列ねて、貫之の作と思つた處から、姑く異說を存する爲に、貫之の名で再選したのだらう。詞書は、前後の歌皆はつかに見聞した戀を排列した例を追つたのみで、歌にはつかの意は更にない。もしは部立の違つたものか。さらずは後撰の如く詞書があるべきである。

はつ雁のはつかに聲をきゝしより中空にのみ物おもふかな　凡河内躬恒

釋 ○中空にのみ物思ふ　空にのみ物思ふといふとはやゝ違つて、何方ともつかず物思ふをいふ。

大意 初雁の聲をはつ〳〵に聞いた時から、又鳴くかと空にのみ心をつけて、氣を揉むことよ、その如く、その人の聲を、はつ〳〵に一寸聞いた時から、思ふ心をいひ出しもえせず、さりとて斷念めも出來ず、宙にばかり迷つて物を思ふことよ。

評 初二句は、初雁の聲をはつかにといひ下すべきを、はつの同音を反復して諧調たらしめる必要上、成るべく近接させる爲に倒置したのである。意解は全體を諷諭の作と見て釋いたが、若し下句を輕く聞く時は、初句の「初雁の」は單なる序詞と聞かれる。いづれか。

42

逢ふことは雲居はるかになる神の音にきゝつゝ戀ひ渡るかな　つらゆき

釋 ○雲居はるかに　空遙かにての意。これを三句に引き續け、遙かになるといふに、「鳴神の」をかけたと見るのは大にわるい。○鳴神の　「音に聞く」といふにかゝる序詞。「鳴神」は雷。

大意 これ程思へども、その人に逢ふことは遠い事で、その癖雷の音を聞くやうに、近く噂に聞き〳〵して、戀しく思つて月日を經ることよ。

評 遠しといふことを「雲居はるか」と轉義して、序詞の鳴神に緣をもたせたことは常套である。但「音に聞く」の序として鳴神を用ひたことは、その音聞の甚しさを思はせるもので、隨つて逢ふ事の雲ゐはるかな事を慨く心持を強める。又見やうによつては、遠近の對照を成してゐるやうでもある。

結句、六帖、及び、家集に戀ひや渡らむとある。景樹は、この方を宜しいと評した。

片絲をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせむ　よみ人しらず

釋 ○片絲　より合はせぬ一筋の絲をいふ。○あはずば　「ば」と濁る。○玉の緒　玉を貫く緒。緒は長く續く物をすべていふ。鳥獸の尾、年の緒、息の緒といひ、さて命をも魂の緒といつて、玉の緒に通はせた。玉の緒に三義ある。一は暫しの意、一は玉を貫く緒、一は命をいふ。

大意 一筋の絲をあちらこちらに縒を掛けて合はせようとして、愚かな賴みをかけてゐるが、結局一つに合はぬなら、何を玉の緒にせうぞい、自分の戀もその如く、こちらばかり、あちらこちらへと心を碎いて見ても、若し逢はれずば、何を命にして生きて居られようぞ。

評 片絲ではより合ふことは絕對にない。その如く片思では逢ひ得る時は絕對にない。この見え透いた結果をも

無視して、おのが慾目になほ一縷の希望を繫ぎつゝ、戀の不安を豫想して、もし「合はずば何を」と憂慮してゐる。よもやに惹かされた戀の迷を歌つたものである。譬喩は例の巧に傷く。片絲の玉の緒は、夙く奈良朝歌人の用ひた材料で、萬葉に「片絲もち貫きたる玉の緒を弱み」「玉の緒を片緒に縒りて」など數ある。この歌、是則集に出てゐるのは誤である。以下悉く詠者不詳の歌である。風調體格を以て推すに、弘仁以降、元慶の頃ほひまでの作が入り交つて居らうと思ふ。

○

ゆふぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を戀ふとて

釋 ○雲のはたてに　「はたて」ははてに同じい。萬葉集卷八に「敷きませる國のはたてに開きにける櫻の花の」とある。又萬葉集卷一、「渡津海の豐旗雲に入日さし今宵の月夜清み明くこそ」、懷風藻の大津皇子の詩に、「雲旗張二嶺前一」など見えて、旗の靡く如く棚引いた雲を、旗雲とも雲の旗ともいふから、雲の旗手にの意とも解してゐる。比較すると前說の方が穩かである。

大意　自分は夕方になれば、遙かの雲のはてにながめ入つて、物をサ思ふわ、自分より遙か高い身分の人を戀ひ慕ふといふのでサ。

評　譬喩の「雲のはたて」の縁によつて、身分高いの意を「天つ空なる」と轉義した。景樹の上句を、夕暮は雲の悲しき景色に物思ふと釋いたのは、氣分はちかいがやゝ誤つてゐる。又、「天つ空なる人」を、舊註はすべて、遠方なる人の意に解いた。捨つべきでもないが、戀に上下の隔なし。かけても及び難い人を戀うた意と見る方が面白からう。拾遺集、

雲居なる人をはるかに思ふにはわが心さへ空にこそなれ

の趣を併せ味ふがよい。夕暮はたゞですら感傷に陷り易い時分だから、戀する身はいよ〳〵思ひ亂れるのである。

初句、六帖新撰和歌には夕されば、顯註の一本には夕ぐれのとあり、結句、袖中抄、奥儀抄には人こふる身はとある。

○

かりごもの思ひ亂れてわが戀ふと妹しるらめや人し告げずば

釋 ○かりごもの　「思ひ」を隔てゝ、「亂れて」へかゝる枕詞。刈つた菰は、埒もなく亂れ混ふ物だから續けた。菰は眞菰である。○妹　廣い意味では、男から婦人をさして、すべて妹といひ、狹い意味では、妻又は情人又は女弟をいつた。こゝは前の義である。

大意　刈菰の亂れるやうに、いろ〳〵と思ひ亂れて、自分が戀ひ慕ふといふことを、あの人は知るであらうか、いや知りはすまい、人がサいひ聞かさずば。

評　情天礙があり、空床輾轉の思に耐へない。然るに意中の人は格別さうとも知らずにゐるではないか。どうかその同情を惹くべく、殷勤の意を取り傳へてくれる人もありたいなと、心中に希望してゐる趣である。古調で風骨が凡でないが、結句は親貼し過ぎて味ひを淺くしてゐる。

○

つれもなき人をやねたく白露の、おくとは歎きぬとはしのばむ

釋 ○人をや　「や」は反語。○ねたく　悔しくの意。○白露の　「おく」にかゝる枕詞。露の置くに、起くをかけた。○ぬ　寢ぬの意。○しのばむ　偲ばむの意。慕ふをいふ。

大意　あの無情なつれない人を、このやうにくち惜しう、朝晩に起きるといつては歎き、寢るといつては慕はうことかい、今からはもう歎きも慕ひもすまい。

評　斷念めたといふは、斷念めぬ人の言である。畢竟熱情の餘りに、三冬暖氣無き的の人の無情を恨んだ激語である。思ふと思はぬとは反比例に進行するもので、時にはもう思ふまいと憤慨もするが、實現はむづかしい。この情致、歌としての無窮の妙諦を具へてゐる。業平の「世の中にたえて櫻の無かりせば」と詠んだのも、この筆法である。朝に晩にの意を、「おくとは」「ぬとは」と轉義し、歎き偲ばむの句を斷ち切つて、上下に按排して、四五に對句を作つたので、語調がおのづから強まつて、常住歎き偲んでゐる趣が強く表現されてゐる。

○

ちはやぶるかもの社のゆふだすき、一日も君をかけぬ日はなし

釋 ○ちはやぶる　秋下「ちはやぶる神代も聞かず」の條に既出。○かもの社　山城國の賀茂神社。上下二社ある。平安時代には、祭とさへいへばこの社のお祭であつた位尊崇された。今も官幣大社。○ゆふだすき　木綿の傳で、社人が神に奉仕する時に掛ける物である。木綿は穀卽ち楮の事である。古語拾遺に、穀の木を木綿なりと註し、豐後風土記に「速水郡柚富郷云々、此郷中栲樹多生、常取二栲皮一、以造二木綿一、因曰二柚富郷一」とある。栲は楮である。

大意　賀茂の社の社人が神に仕へまつるとて、毎日〳〵木綿襷を掛けるが、そのやうに、私も一日たりとも貴方の事を心にかけて思はない日といふは無いわ。

評　三句までは、「一日もかけぬ」にかゝる序である。あながちに賀茂の社の木綿襷をかけたのは、或は、京人の賀茂の御社に詣でて、この戀を祈つたのであるまいか。伊勢物語に、

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

とあるも賀茂の社に戀を祈つた證據である。さてかう詠んで、かの人の憐を乞ふべく贈つたらしい。「日」といふ語の重疊が、意調のうへに、多少の姿致を添へてゐる。語路暢びゝゝして、風韻悠揚、諷すべく誦すべき作である。

二句、顯註にかみの社とある。景樹いはく、「この方事ひろくてよし。枕草子に、賀茂臨時祭の條に、『千早ぶる賀茂の社の木綿だすきと歌ひたる云々』とあり。これはもと神の社のとある歌なるを、かの祭に用ひられし時、賀茂の社のと謠ひ變へしが一說となりて、今の本には入れるなるべし」と。されど、事弘いのが必ずよい譯でもない。評語のやうに見れば、却つて、事狹いのが面白く聞えるのではないか。又、結句を新撰和歌に日ぞなきとある。

○

わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし

釋 ○むなしき空　虛空の直譯語であるから、空におなじい。○思ひやれども　「思ひ遣る」は思を遣り失ふこと。遣悶、排鬱の義。想像の意にも轉じて用ひられる。

大意　自分の戀は、虛空一杯に滿ちくたらしい。心の思を餘所へ逐ひ遣つて見ても、何處へも思の行く處が無いわ。

評　纏綿の情懷は奇愁を催して、如何ともすべからざる人の作である。戀を說いて、虛空に彌漫したの矯語を放つに至つて、始めて詩歌の三昧に入ることを得る。體裁、やゝ疎漫なやうで實は緻密である。上句下句の脚字、同音の韻を蹈んでゐる。奇作妙作。

○

駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし

釋 ○駿河なる田子の浦波　駿河國廬原郡淸見が崎から東へ行けば、薩埵峠の山下の渚に昔の道があつて、其處より向ひの伊豆の山の麓までの海は、田子の浦だといふ。

大意　この駿河にある田子浦は、風の烈しい所なので、その浦波は何時でも立つとはいふ條、それでもたまには、立たぬ日がありはするけれども、私が貴方を戀しく思はぬ日といつては、一日も無いわ。

評　駿河の國人の作か。比興の體が面白い。「日」の語の反復も味ひを永くする。但萬葉集卷十一、唐泊能巨（カラドノリノ）の浦波立たぬ日はあれども家に戀ひぬ日はなし を、些ばかり改竄したに過ぎない。恐らく「唐どまり」の歌の異傳だらう。

○

夕づく夜さすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

釋 ○夕づく夜さすや岡べ　「夕づく夜」は夕就く夜の意であることは、秋下に釋いた如くで、月夜の義ではないから、「さすや」とはいはれない。一本には夕づく日とある、これが宜しい。これは夕就く日の義で、夕暮近く傾く日をいふ。この歌元久時代には、既に兩樣の傳があつたと見えて、千五百番歌合に、公經の「夕づく日さすや岡べの松の雪折」の歌の季經判に「萬葉には夕づく日と侍り、古今の歌を思ひて松を詠まば、夕づく夜とぞ侍るべき、云々」。公經は、夕づく日とある本に據つて詠み、季經は、夕づく夜とある本に就いて判じたのである。「さすや」の「や」は間投の歎辭。○松の葉の　松の葉の如くの意。

大意　あの夕就く日の刺す岡のあたりの松の葉は、四季共におなじ色で、何時といふ別ちも無いが、丁度その如く自分は、何時といふ別ちも無い、えらい戀をまあすることよ。

評　これは戀の遂執を我れから批判したものである。蓋し或機會に理性に立ち返つた瞬間の思索である。夕影の岡邊の松の裏葉を照すのは、誰が眼にも著く面白い景趣である。乃ちこれを序の材料とした。古へは日影の刺すのを、崇高なる觀念を與へる無上の形容語として、或は「內日刺す宮」といひ、或は「朝日の日照る宮、夕日

の日陰る宮」など續けた。萬葉集卷十六に、

夕づく日指すや河邊につくる屋の形をよろしみうべぞよりくる

とあるも同趣である。この初二句を、これは岡邊の松に轉用したので、只眼前の景氣を述べただけに止まつてゐるが、上句の修飾が餘りに花やかに立派に過ぎて、「いつともわかぬ」の譬喩にのみ用ひたのでは、調和がぴつたりと取れないやうな氣がする。又語調からいふと、上句太く逞ましく、二句殊に力量があるので、やゝ下句との權衡を失してゐるやうである。

六帖には、「朝日子がさすや岡邊の松が枝のいつともわかぬ戀もする哉」とある。甚だ劣つてゐる。

○

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

釋 ○山下水の　山陰の水の如くの意。○こがくれて　木隱れて。○たぎつ心　湧き返つて沸る心。

大意　山陰の川水は茂つた樹木に隱れて、餘所からは見えぬけれど、せわしく瀧つて落ちる物であるが、自分の戀も丁度そのやうに、餘所からは見えないで、只一人胸の内に湧き返る心を、水を堰くといふやうに、堰き止めようと思つて見ても、なかなか堰いてサ止めかねたわ。

評　人知れず思ふ心の忍び難さをどうしたらと、打ち歎いた。萬葉集に、

歎きせば人知りぬべみ山川のたぎつこゝろをせかへたる鴨　（卷七）

言にいでていはゞゆゝしみ山川の瀧つ心を堰きあへにけり　（卷十一）

の類型はあるが、これは一層巧緻である。「木隱れてたぎつ」までは譬喩であるが、「堰きぞかねつる」と、水の緣語で仕立てたのは、なまじひに大らかな味ひをなくする。萬葉の歌の結句を參照したら、この點がいよ〳〵明らかにならう。

三句、新撰和歌にうづもれて、結句、新撰和歌、及び新勅詠集にかねぬるとある。しかも作者を六帖には源のよしの朝臣とし、新勅詠には伊勢とし、後撰集戀四に再出したのには能宣朝臣として、詞書を「女の許に遣はしける」と加へてある。

○

吉野川いはきりとほし行く水のおとには立てじ戀はしぬとも

釋 ○行く水の　行く水の如くの意。○いはきりとほし　岩切り通しである。○しぬとも　爲去ともの意。舊註、死ぬともの意に見たのは誤である。必ず死ぬ意ならば「は」の辭は不用で、戀ひ死ぬとも又は戀ひて死ぬともいつてよい。

大意　吉野川は早川で、岩をも切り通して行く水が、烈しい音を立てるが、自分は假令この切ない戀をするとても、その吉野川の水のやうに、音を立てゝ泣きなどして、人には知られまいわ。

評　忍び餘つた人の作である。「音には立てじ」の序は、萬葉集卷十一に、

高山の岩本たぎち行く水の音には立てじ戀ひて死ぬとも

の同想の先型がある。戀ひて死ぬとも、音に立てゝ名には顯はさじと、命をかけて包み忍んだ胸裏の苦悶は、

どんなものであつたらう。これは只、戀爲たりとて音に立てじといふに止まつて、愛の高潮を說く點に於いて、や、遺憾がある。二句は、さうした山川の急流激湍を、よく形容し得てゐる。原作に勝つたのは只この點のみ。四五の倒裝は調を諧へむが爲である。

初句、六帖に三吉野のとある。

○

瀧つ瀨のなかにも淀はありてふをなどわが戀の淵瀨ともなき

釋 ○淀　淵の靜な所をいふ。○淵瀨　淵は水の深い所、瀨は淺い處である。

大意 山川のたぎり落ちる瀨は早い物だが、その中にも淵になつて水の淀む所はあるといふ事であるものを、それにまあ何で、自分の戀は淵の瀨のといふ別ちも無く、何時も心苦しい事であるぞ。

評 反喩になつてゐる爲に、幽婉な姿致があつて面白い。廣蔭いふ、

「ありてふを」といへるが面白し。ものをといひても聞ゆるなれど。てふといへるは、この作者深窓の婦人にて、未だ實際の瀧津瀨を知らず、たゞ淀ありと聞及びて詠めるに、いたく味あり。ものをといふ時は、瀧のやうをも知りていふやうに聞ゆ。

とあるは拍案の快說で、その背景を得て居る。「淵瀨ともなき」は、頻り弛むことの無きの意を、「瀧つ瀨」の緣で轉義したのである。

○

山高みしたゆく水のしたにのみ流れて戀ひむ戀はしぬとも

釋 ○したゆく水　山もとを流れる水。○したに　下にの意に、心の內の意であるし、したをかけた。○流れて　水の流れてに、存在れてをかけてある。存在れてはながらへての約。

大意 山が高いので、あの下の方にばかり流れて行く水のやうに、自分は切ない戀をするといつても、表面には顯はさず、何時までも心の內でばかり戀ひ慕つて居らうわ。

評 初二句は「下にのみ流れ」とかけた序である。境遇か何か知らぬが、心の中に祕めて一生でも戀ひくらさうとは、同情に禁へない。「した」及び「戀」といふ語の反復が相交錯して、聲調を成してゐる。

契沖いふ、「以上四首、寄水戀の類なり。これより下、この卷の中に、忍ぶ意を詠めるは、戀ふる人みづから忍ぶなり。後の卷なるは、世人に忍ぶなり」と。

○

思ひいづるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しきものを

釋 ○思ひいづるときはの山　夏部に既出。「思ひいづる時」は「いはねば云々」と續く。○岩躑躅　「いはねば」の語を喚び起す序詞。和名鈔に、「羊躑躅、和名以波豆々之、一云毛知豆々之」とある。和名本草に、「羊躑躅、和名以波都々之又之呂都々之、又毛知都々之」とある。されば花の色の白い躑躅と思はれる。景樹說に、今の

方言に據つて、紫の花の咲く躑躅だらうとあるのはどんなものか。

大意　思ひ出す時には、當磐山の岩躑躅の名のやうに、口へ出していはずにこそ居れ、それは〳〵戀しいものをサ。

評　少しは察して下されと、相手にその同情を希つた。素より打ち出した戀でないから、その人は知る筈もないのを、なほこの浸道理の言を爲すのは、蓋し戀の窮竟で面白い。「いはつゝじいはねば」の反復、例の聲調に任せた序である。上句の「思ひ出づるときはの山」のいひかけは少しくどいかも知れない。

○

人しれず思へば苦しくれなゐの末つむ花のいろに出でなむ

釋　○くれなゐの末つむ花の　「くれなゐ」は吳藍（クレノアヰ）である。和名鈔に、「紅藍、久禮乃阿井（クレノアヰ）、吳藍、本朝式云、紅花、俗用之（ニホルヲ）」和名本草に、「紅藍花、和名久禮乃阿爲（アヰ）」とある。秋分に實をおふし、春に至つて莖が延び立つて高さが三五尺になる。夏月枝の末毎に紅の花が咲く。もと吳國から渡つたので、吳（クレ）の藍草といつたのだらう。「末つむ花」は、その花の紅くなつた時、衣類などを染むる料に、末を摘み採る故にいふ。宣長は、萬葉集にある末摘花を、ウレツムハナと訓んだ。○末つむ花の　末摘花の如くの意。○いろに出でなむ　ほに顯はさむと同意。

大意　人に知られずに心の内で思つてゐると、ひどく苦しいわ、これでは叶はぬからいつその事、あの紅の末摘む花の色に出るやうに、うち出してあの人に知らせようわ。

評　いつそ思ひ切つてうち出さうか、けに羞かしい限りである。忍んで思はうか、心の苦しみに堪へぬを何ようぞ。とつ追ひつ煩々悶々の末、やはり、「色に出でなむ」としも決心したのは、どんなに切ない戀であつたらう、況や作者が織手紅花を摘む婦人であつたらうと想像すると。但萬葉集卷十、

よそにのみ見つゝを戀ひむ紅のうれつむ花の色に出でずとも

とあると同喩で、意を表裏に取り成してある。創作とはいひにくいかも知れないが、出でずともは無骨である。「出でなむ」は心火の劫掠するに耐へず、その餘燄を吐かうとする趣で、感哀が深い。調も流麗で、阻澁の跡が更にない。

○

秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや戀ひむ逢ふよしをなみ

釋　○咲く花の　咲く花の如くの意。その花は何の花と定まつてさしたのではない。八千種の花などいつて、秋草の花はくさ〴〵ある。

大意　このやうに心の内にばかり思つて居ようよりは、秋野の尾花に交つて咲く草花の、色に出でゐるやうに、いつその事包まず打ち出して見ようかしら、これでは一向逢へさうな樣子が無いによつてサ。

評　色に出でて戀ひもしたら或は逢はれる事もあらうかと、はかない事を頼みとするまで煩悶してゐる。上と同想同趣で、上句は序である。長け立ちの高い尾花隱れに、野菊桔梗などの咲いたけしきを、「まじる」とは、けに妥當の表現である。

○

わが園のうめのほつえに鶯のねに鳴きぬべき戀もするかな

釋 ○ほつえ　上の枝をいふ。秀つ枝の義。○ねに鳴きぬ　「音に鳴く」は音に立てゝ鳴くをいふ。たゞ鳴くといふとは異なる。

大意 あれあの庭の植込の梅の木の高い枝に、鶯が聲を立てゝ鳴くが、自分もあのやうに、聲を立てゝ泣きもしさうな、切ない戀もすることよ。

評 思慕の情にかきくれてゐる折しも、鶯の鳴くのに驚かされて、ほんに自分もあのやうに泣かれさうなといふ。見聞する處のもの、皆傷心の種となる。情はもろいものである。抑も「音に泣く」は、人の視聽も憚からぬ絶對の戀であるが、これは「べき」の一語に、多少商量の餘地が存する。

普通の序歌の體ならば、二句は、梅のほつ枝のとある方が、意は疏通し易い。に文字の近く重複したのも、聲調上不快である。

○

あしひきの山時鳥わがごとや君に戀ひつゝいねがてにする

大意 貴方の戀しさに、夜も寢られぬまゝに聞けば、頻りに山時鳥が鳴くが、あれも貴方に逢ひたくて、戀ひ慕ひくゝして寢にくいのであらうか。

評 時鳥は君に戀ふやら何やらわからぬ。然らば何を以つて「わがごとや」の直喩を用ひたか、それは外でもない、夜通し寢ないで啼くといふおなじ事實があるので、自分は君に戀ひつゝこの苦悶を味ふ處から、時鳥をも同境遇に推想した。啼くの一語を絶對に著けないのに、餘韻の饒さが見える。秋上に敏行、

秋の夜のあくるも知らず鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ

と同型である。只秋思の蟲と相思の時鳥との差あるのみである。どれが先きか。詠人知らずの歌には、敏行以後のもあるらしいから俄に判じ難い。なほ「秋の夜」の歌の評を參照されたい。

六帖に、「わが如く君に戀ふれや時鳥この夜すがらをいねがてにする」とあるは、この歌の二樣に傳はつたものだらう。

○

夏なれば、やどにふすぶる蚊遣火の、いつまでわが身、下もえにせむ

釋 ○ふすぶる　燻るに同じい。○蚊遣火　萬葉集には、蚊火とも詠んだ。

大意 この節は夏なので蚊遣火を焚くが、その燃え上がらずに何時までもくすくと、下にばかり燻つて居る蚊遣火のやうに、自分の身は思ふことを人にえ言はずに、内證で胸を焦して居るが、何時までであの蚊遣火のやうに下燃えにして居ようぞ、いつそ打ち出して見ようと思ふ。

評 庭前の蚊火の下燃えに燻るのを見て、忽ち聯想はわが下燃えの苦悶に及び、寧ろ快活的に炎え出したらばといふ。上の「末摘む花の色にいでなむ」「咲く花の色にや戀ひむ」などの儔で、忍び餘つた情懷を陳べた。溜ら

なくなつて一時興奮はしたもの、、やはりつ、ましく臆病勝な作者の心持が窺はれる。恰當の比興である。但萬葉集卷十一の、

足引の山田もるをぢがおく蚊火の下こがれのみわが戀ひをらく

を粉本として、更に一歩を進めた。六帖、

難波潟すく藻たく火のうち忍び下もえにてや世をばつくさむ

は、「わが戀ひをらく」の意を、さながら承けてゐる。「いつまで」の語、この主眼である。下に反動辭のかを添へて、その意を綜ぬるがよい。

初句、六帖に夏くれば、新撰和歌に夕されば とある。

○

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも

釋 ○みたらし川　いづれの神社でもいふが、これは賀茂の御手洗川だらう。神山より流れいでて、賀茂の御社を貫流する小川。○みそぎ　身滌で、水で身を洗ひ清むるをいふ。そして祓除するのである。○うけず「うけ」は諾である。納受である。

大意　わが戀の思ふに任せぬことの切なさに、どうぞ戀をしはすまいと思つて、御手洗川でした身滌を、神は意外にお諾け下されずにサ、なつてしまつたさうなわ。

評　「苦しい時の神頼み」人情は古今東西かはりもない。戀すれば人に疎まれ、戀せじと願へば神に見放さる。失戀失望の極は、恐らく氣が狂つてしまうだらう。おなじ事ながら、萬葉集に見えたのは、おのづからその時代の風調をそなへて、

いかにして忘るゝものぞあめつちの神を祈れどわが思ます　（卷十二）

天地の神をも我れは祈りてき戀といふものはすべてやまずけり　（同上）

などあるが、いづれも叙法が卒直で、この「うけずぞなりにけらしも」の辭樣の婉曲で、蘊含の味ひの深いのに及ばない。六帖に、

つらき人忘れなむとてはらふればみそぎかひなく戀こそまされ

模倣の作、この好處をすべて沒却してしまつた。

四五の句、伊勢物語にはうけずもなりにける哉とある。本行のは、聲調やゝこはぐしい節はあるが、意は優つてをらう。又四句、一本にうけずもとある。

○

あはれてふことだになくば何をかは戀のみだれの束ね緒にせむ

釋 ○あはれてふこと　あはれといふ言。「あはれ」は歎辭、あゝと同じい。愛憐の義ではない。○束ね緒　物を把ぬる緒又は紐。

大意　思が胸に迫つて心の亂れた時は、聲を擧げてあゝと溜息を吐けば、少しは心も靜まるが、そのあゝといふ言葉なりとも無くば、何をまあ自分の戀の心の亂れを靜める汐、卽ち亂れた物を引き把ねる束ね緒にはしよう

ぞ、他には何物もないわ。

評 ひどく苦悶した擧句にはあゝと息吐く、又苦悶してはあゝと息吐く。丁度それが亂れ散つた物を束ねる緒のやうな具合なので、もしこのあゝの吐息がないとしたら、戀の亂れは〆括もなく亂れるだらうといふ。「戀の亂れ」のとあるより、心を靜むる機會を「束ね緒」と轉義したのである。少し技巧に走り過ぎた感がある。又意釋の一說は、「人の、あはれとだにもいはずば、何をか亂れたる戀の束ね緒にせむ」の意とした。さうも聞えるが、前後の部立から考へると、その意ではこゝに竝べられない。

○

思ふにはしのぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを

大意 人を思ふ心と、それを怺へ忍ぶ心とが、自分の胸の内で爭つてゐたが、怺へ忍ぶ方がサ負けてしまつたわい、それでつい思ふ色目を人に見られたさうな、えゝいつまでも色目には出しはすまいと思つたものを。

評 糾紛した胸中の苦悶を描き出して、餘蘊がない。思ふと忍ぶとの兩者の格鬪、いかによく堪へ、いかに強く戀うたものだらう。下句の如きは誰れにでもいはれる。平兼盛も、「忍ぶれど色に出にけり」と詠んでゐる。上句の落想に到つては、所謂天外よりした奇想で、面白い擬人である。但伊勢物語に、

思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

とあるが、伊勢のはこの歌を作り換へたものだらう。雅嘉が、「しのぶる」を、世に忍ぶ意と解したのは誤つてゐる。

○

わが戀は人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ

釋 ○しきたへの　枕にかゝる枕詞。袖、袂、衣手、床などいふ語へもかけて、枕詞とする。「しきたへ」は下に藉きて寢る布をいふ。「たへ」は栲で、楮の纖維から織つた布であるが、轉じて布帛の總稱ともする。○知るらめや　「や」は反動辭。

大意 自分の戀は一途に忍んで居るから、このやうに思ふことを、あの人が知るであらうか、とても知りはすまいわ、しかしこの閨の枕ばかりはサ、若し知るならば知るであらう。

評 それとても知りはすまいがの餘意がある。想は後人のやたらに踏襲する所となつて、新硯を發したやうにはかない。結句の語調は、春上の「げふこそ櫻折らば折りてめ」と同じだから參照されたい。「知る」の語、ふと見ては無意味に三疊したやうだが、然うではない。短歌の體製を案ずるに、三四五句は、初二句の反復である。形に於いて調子に於いて、同じにゆくのが定律である。故に初二のと同意同語を、三句以下に於いて、同調に折り返すことは珍しくない。時に或は意を表裏し、叙法を順逆にして、姿致を取ることはあるが、なほ同語同調を追ふこと、この歌の如きもある。

初二句、六帖にわが戀を人知らめやも、下句、新撰和歌には枕ばかりぞ知らば知るともとある。

以下忍戀の歌をつらねてある。

○

浅ぢふの小野の篠原しのぶとも人知るらめやいふ人なしに

釋 ○浅ぢふの　「野」にかゝる枕詞。「浅ぢふ」は茅草のまばらに生へた所をいふ。茅はつばなの草。生は生ふの略語で、草木などの發生する處をいふ。○小野の篠原　小野の「小」は美稱で、小さい野の義ではない。又地名でもない。篠原は小竹の生へた原で、同音の響で「しのぶ」といふ語を喚び起したので、上句はすべて序である。○しのぶとも　「知るらめや」に續く。忍ぶと人は知らうかいの意。「とも」を重く聞いてはいけない。

大意　このやうに怨へ〳〵て忍んで思ふとまあ、先の人は知るであらうか、知りはすまいわ、誰れもいつて聞かす人無しにはサ。

評　「人知るらめやいふ人なしに」は明らかに理窟であるけれども、我が行爲を我れと批判して、非難らしい口吻を洩した點が面白い。否さう自省はしながらも、やはり祕めた戀心を打ち出す勇氣がなくぐづ〳〵してゐる。その矛盾が詩味をそゝる。蒼古な格調である。

四句、一本に妹しるらめやとある。人を親み思ふ意も顯はれ、且「人」の語の重複も避けられ、又第二者第三者の差別も明らかになつて宜しい。六帖には、下句妹はしらじなとふ人なしにとあつて、作者を人麿とある。新撰和歌には、初句夕されば、三句忍ぶれどとある。

○

人しれぬ思やなぞとあし垣のま近けれども逢ふよしのなき

釋 ○なぞと　「なぞ」は何ぞの意。「と」の辭が下に續かないので聞え難い。顯昭、眞淵の、詞の助に置いたといふ説は妄りである。千秋いふ、「このとは字形の似たるより、必ずもを寫し誤りて傳へたるにて、もとはなぞもにてぞありけむ。なぞもは古歌に例多く見ゆ。近くはこの卷の中にも、『かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく云々』とあり」と。この説は既にこの集の一本になぞもとあるから、從ふべきである。山田常典は「本の儘にて下に、思ふまでといふ詞を補ひて聞くべしといつたが、さう詞を補つて行けば、聞えない詞といつては世にないことになる。○あし垣の　「ま近」にかゝる枕詞。蘆で造つた垣は粗末な垣で、少々づつまばらなので、間近きと續ける。顯昭の説には、「蘆の細きをこまかに組みて、ひま無ければいふ」とあるが、萬葉集に、「岩橋の間近き」とも續けた例を推せば、前の説が可いと思はれる。

大意　思ふ人に知られぬ内々の思は、何たる事ぞまあ、ほんの間近な所に住んで居れども、逢ふ仕方が無いわい。

評　いくら近隣でも心にだけ思つてゐるのでは、先方が御存じなしだから、逢へる筈がない。この見易い道理を忘れて、懊惱の極、「人知れぬ思やなぞも」と、わが思のかひなさを咎めた幽怨の趣は、一寸捨て難い。廣蔭が、「先の人にこの思を知らせなば、逢ふ由もあらむ」とまで、餘意を詭いたのは過ぎてゐる。

二句、六帖に思やなにぞとある。これは意が明らかであり、二句で切るべき證とされる。

○

思ふとも戀ふとも逢はむ物なれやゆふ手もたゆく解くる下紐

釋 ○逢はむ物なれや　「や」は反動辭。上の「秋の野におく白露は玉なれや」。又、西行の「津の國の難波の春は夢なれや」のやは、各これとは別意である。○ゆふ手もたゆく　結ふ手も弛くの意。○下紐　下裳の紐をいふ。

大意　如何に思ふとも戀ひ慕ふとも、その人に逢はれようものか、とても逢はれるものでは無い、それにその人が自分を思つて呉れるかのやうに、結ぶ手もだるい程に、何返も下紐が自然に解けるわ、昔から、「人に戀ひられる時は、下紐が解ける」といひ習はしてはあるけれど、あてにならないなあ。

評　奥儀抄に、「人に戀ひらるゝ人は、下紐解くるといふことのあるなり」とある。いにしへさうした諺のあつたことは確實である。萬葉集卷十一に、

君に戀ひうらぶれをればあやしくも我が下紐のゆふ手倦しも

これは下紐のやたらと解けるのを見て、さては思ふ人に逢ふ前兆だらうと、悅んだ趣である。然るにこれはその前兆が一向事實に應現しないので、何と馬鹿な下紐奴と憤慨した口氣である。結句は下紐解くるとあるべきを調の爲に倒裝した。婦人の作であらう。なほ、萬葉集卷十二に、

都べに君はいにしを誰れ解けか吾が紐の緒のゆふ手たゆきも

これも類型である。二三の句、清輔、顯昭等の「思ひ戀ふとも我は逢ふまじきを、それも知らず戀ふるにやあらむ」と釋いたのは木强の言で、更に人情の眞諦でない。又詩歌の本旨でない。こは、逢はれむのれの略かれた一格である。逢はむの意に見るは誤である。

○

いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ

釋 ○いで　允恭記には「歷乞」、萬集葉には「乞」の字を訓んである。乞ひ望むの意の歎辭で、發語にのみ用ひ、後には轉じて、口語のサア、イヤ、モウ、ドレヤなどの意に用ひる。こゝも後の意である。○とがめ　異しむこと。○大船の　大船の如くの意で、「ゆたのたゆた」にかゝる序。大船は動くにもゆくらくと漂ふのでいふ。○ゆたのたゆたに　萬葉集卷七に、「吾が心ゆたにたゆたに浮きぬなは邊にも沖にも寄りがてましを」とある。「ゆた」は口語のゆつたりの意。これにたの接頭語を加へて、「たゆた」といふことは、靡くをた靡く、謀るをた謀るといふに同じい。このゆたにを重ねたゆたにたゆたにが「ゆたのたゆたに」と轉訛した。意は大やうに迫らぬ狀なので、ゆくらくと搖くにもいふ。

大意　いやサ自分の樣子を、これ人達よ、必ず怪んで呉れるな、自分は今どうしようかかうしようかと、落ち付かずに物思をして居る、この節であるぞよ。

評　いかにしても、思の色が顏に出て隱し切れないので、まゝよと腹を据ゑて、物や思ふと人の怪しまぬ先に、此方から打ち出した。もとより冷靜の思慮ではない。既に戀の甘い香に醉ひ切つた人である。狂してゐる作者である。それでこそ歌も面白くなる。大船の譬喩は、萬葉集に「大船のはつる泊のたゆたひに」「大船のたゆたひ見れば」など數多ある。

結句、六帖に物思ふ頃をとある。

○

伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる

釋 ○うけ　和名鈔に、「泛子、鉤別名也、宇介」とある。今、うきといふ。鉤に附けて、その動靜によつて魚の餌についたことを卜する。

大意　戀する自分の心は、この伊勢の海に釣をする漁師の使ふ泛子であるかして、うかゝと浮かれて、どうしようかかうしようかと、この心一つをいづれとも定めかねたわ。

評　浪に搖られて出頭沒頭、打東打西するこの泛子のやうな心は、まことに意緒百端で、いひ出すのは羞かしからう、思ひ切るのは苦しからう。羞かしいのもはた苦しいのも、共に耐へられない業である。これいひも出さず思ひも切らず懊惱する所以、乃ち定めかねつる所以である。「伊勢の海の」といひ出したのは、この作者が他國人だからである　もとよりの伊勢人ならば、さう斷る必要がない。又、「都わたりに近き海にて、御贄の魚なども多く奉れば」といふ說もあるが、この叙述の趣によつても、譬喩の上からしても、眼前に泛子の浮沈するを見た狀でなくてはをかしくない。萬葉集卷十一、

　住のえの津守網引の浮笑緒のうかれや行かむ戀つゝあらずは

よりは譬喩が一層巧妙で、妥當である。それは直喩によらず隱喩を用ひた爲だらう。

○

伊勢の海のあまの釣縄うちはへてくるしとのみや思ひ渡らむ

釋 ○釣縄　海中遠く數多の鉤を附けた枝縄を、一條の元縄を延ばしておいて、よい頃にそれを繰り寄せて、餌についた魚を捉る。これを長縄といふ。卽ち釣縄である。伊勢尾張では、ながの、釣（長縄の釣の訛か）といひ淡路ではは、へ縄といふと。○うちはへてくるし　打延へて繰るに、苦しをかけた。

大意　この伊勢の海の海士の釣縄は、長く延ばして置いては又繰り上げるが、自分は戀故に、その釣縄の長く延へたやうに長い月日をかけて、それを繰るといふやうに苦しい事ばかり思つて居ようか、思ふ人にはいひ出さずしてサ。

評　上の二首は、ゆたのたゆたに物思して、心一つを定めかねたのを、これは一方に心一つに思ひ忍ぶと決心した。如何にはかない戀であつたらう。釣縄の序、これはいよ〳〵目のあたりに、海士の爲業を見ての作と斷ぜられる。

「釣縄」、一本に栲縄とある。楮の皮で綯つた縄で、網などの綱に用ひる。四句、六帖にこひしとのみやとある。

○

なみだ川なにみなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり

釋 ○なみだ川　涙を川に喩へていつた。固有名詞として伊勢國にあるといふ説は、前二首が伊勢の海とあるに引かれての附會と思ふ。

大意　涙川の水上を、餘所にばかり何で尋ねたことであらう、よく見ればその水上は、戀故に物を思ふ時の自分の身であつたわい、涙がこれこの通り身から出るわサ。

評　自身の涙を自身と切り離して、別々に考へてゐた趣である。いかに戀に目の眩んでゐたかが思ひやられる。實に涙の水上を尋ねる事ではないが、ふと冷靜に返つた時、おゝこれは皆自分の涙であるわと、氣が付いての思索から出てゐる。漢の張騫が河源を窮めて天に到つた故事を聯想したとするのは蘊であらう。二句の辭樣など面白さうだが、技巧の間に、漸く眞情が逃げてゐる。

吉野川そのみなかみを尋ぬれば苦のいは間のしづくなりけり

とその樣式を同じうしてゐる。

○

種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひば逢はざらめやは

釋 ○種し　○戀をし　「し」はいづれも強辭。

大意　種がサあれば、生えさうにも無い岩の上にも、松は存外に生えたわい、されば、假令出來にくい戀でも、一生懸命にこの戀をサ戀ひ徹さうなら、逢はれぬ事があらうか、いや逢はれぬといふ事はあるまい。

評　蟻の思も天、戀を戀として、その最後に到達するまで、戀ひて後已むである。その間或は無窮の障碍もあらう。或は、獻身的の活動を要する事もあらう。それは一向辭さないのである。この高潮の情熱があつてこそ、始めて愛の神聖を語ることが出來よう。上句と下句とは合拍せしめたもので、初句の字餘りは、四句の强い語調に均當して平衡を得た。比興も奇警で古樸の味ひを帶び、表現が又平凡でない。佳作。

三句、六帖に生ひぬるをとある。又、結句の「やは」、季吟本にはやも、打聽本にはかもとある。

○

朝なゝ立つ河霧の空にのみうきておもひのある世なりけり

釋 ○河霧の　河霧の如くの意。○うきて　うはゝして。

大意　人を戀ひ慕へば、毎朝立つあの川霧が、宙にばかり浮いてゐるやうに、何時も心がうはゝして、一向に落ち着かぬ思のあるこの世であつたわい。

評　上句は、「空にうきて」にかゝる序である。川づらの宿に住んでゐる人が、眼前の實景から關聯して起した戀の感懷で、煩悶のはては遂に世を恨み世を呪ふに至るのである。六帖、及び新古今集に、山口女王の作として、

鹽がまの前にうきたる浮島のうきて思のある世なりけり

を擧げてあるが、下句のさまは、決してこの女王の時代の風體でない。萬葉を見知る人は知るであらう。されば、鹽釜の作は、この歌より後の物か。「ある世なりけり」は、景樹以後やたらとこの口調を眞似て、厭はしい程の陳語となつた。飛んだ作者に取つての迷惑である。

○

忘らるゝ時しなければあしたづの思ひ亂れて音をのみぞなく

釋 ○あしたづの　あしたづの如くの意、「あしたづ」は蘆鶴で、鶴は蘆邊に住むので付いた名。或は「蘆の花の色に據れり」といひ、或は「求食鶴（アサリタヅ）の約なり」といふ說もあるが采らぬ。

大意　戀しさを忘られる時がサ無いから、蘆鶴の飛び亂れて鳴くやうに、いろ〳〵と思ふ心が亂れて、聲に立てて泣いてばかりサ居るわい。

評　「蘆鶴」は、「亂れてなく」にかゝる序である。鶴に亂れることをいふは、萬葉集にも、「朝露にたづは亂れて夕霧に蛙は騷ぐ」（赤人）などある。同集卷三に、金明軍の大伴旅人の甕を悼んで詠んだ、

君に戀ひいたもすべなみ蘆鶴の音のみし泣かゆ朝よひにして

は同想の同喩で、唔合か模倣か。第二句、原作はひどく切迫した調子であり、これはやゝ比較的のびてゐる。三句以下の調子が又、おの〳〵初二句に相應して仕立てられてある。中古鶴の內地に數多棲んでゐたことは、既に上にいつておいた。

○

からごろもひもゆふぐれになる時は返すぐ〳〵ぞ人は戀しき

釋 ○からごろもひもゆふぐれ　韓衣紐結ふに、日も夕暮をかけた。

大意　着物の紐を結ふといふやうに、けふの日も夕暮になる時は、何やら寂しくなつて來て、衣を返すといふやうに返す〳〵サ、かの人が思ひ出されて戀しいわ。

評　何時とても戀しくない時はないが、わけて夕暮はあらゆる感哀のすゝむ頃であるから溜らない。況やまた當時の慣習として、夕暮は男女相逢ふ時だから、いよ〳〵人戀しさが取り詰めてくる。この意を萬葉集には、

何時はしも戀ひぬ時とはあらねども夕方まけて戀はすべなし（卷十一）

とある。只これは韓衣を取り入れて、緣語で鎖り續けてゐる。萬葉集のは荒削のこはく〳〵しさが見えるが素朴であり、これは小巧を弄して却つて氣味が盡きる。殊に初二句のいひかけ、すこし卑しけである。拾遺集に貫之、

忘らるゝ時しなければ春の田をかへすぐ〳〵ぞ人は戀しき

この下句と、上の歌の上句とを取り合はせて、序詞を春の田に換へたやうな歌である。

○

よひ〳〵に枕定めむかたもなしいかに寢し夜か夢に見えけむ

釋 ○枕定めむかたもなし　枕を落ち着けようすべもないの意。「方」は方角の意ではない。

大意　この頃は毎晩〳〵物思に責められて、あちらこちらへと寢返りして見ても眠られぬ故、どうしたら眠られようやら、枕の定めうようも無いわ、あの何時ぞやどのやうにして寢た事であつた晩か、よく眠られて、思ふ人が夢に見えたのであらう。

評　始めの間こそ眠れもして、人を夢に見るほどの餘裕もあつたが、今はいよ〳〵思が募つて、夜もろくに眠ら

れない。戀の深みに段々はまり込んでゆく趣が見える。毛詩にいはゆる、

窈窕淑女、寤寐求之、求之不得、輾轉思服、悠哉悠哉、輾轉反側。

と同一の境致である。萬葉集卷十一の、

敷妙の枕うごきてよるも寢ず思ふ人にはのちもあはむもの

敷妙の枕うごきていねらえず物念ふ此宵ははやも明けぬかも

はまた同想である。而してこの歌、風調といひ語調といひ節奏といひ、遙かに萬葉のに勝つて、全く洗煉の作である。「いかに寢し夜か」の疑問、一番弄巧の處ではあるが、しかも纖俗でない。

初句、六帖には夕されば、新撰和歌には戀ひ〳〵てとある。

○

戀しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞあるべかりける

釋 ○しに　死ぬの連用言をいひ据ゑた體言。

大意 この戀の苦みに命を換へられる物であるならば、死ぬといふことは、造作無いことでサ、ありさうな事であるわい。

評 しかし命が思ふまゝにならぬ故くち惜しいの餘意がある。恐ろしい強烈な戀の聲である。戀に對して古人は自殺を考へてゐないが、後世は死を濫用するやうになつた。後世の人情から、この歌の死を希つたことを輕く考へてはならない。但萬葉集卷十二に、

なか〳〵に死なばやすけむ出づる日の入わき知らぬ我れし苦しも

とあるは同想同型であるが、これは敍述が說明的になつてゐるのが疵である。遊仙窟に「他言愁勝レ死、兒言死勝レ愁、愁來百處痛、死去一時休」とあるのは、これらの藍本か。

○

人の身もならはしものをあはずしていざ試みむ戀ひや死ぬると

釋 ○ならはしものを　慣しがらの物であるものを。

大意 人の身といふものも、すべて慣しがらのものであるものを、戀しい人に逢はずに居て、それが習慣となつて逢はずにゐられるか、それとも亦怺へられずに、焦れ死にに死んでしまうかどうかと、どれ試して見よう。

評 習慣によつて性情の變化することは、古人も夙く認めたと見える。然し何も戀ひ死ぬかどうかとわざ〳〵試す必要もない。實は戀ひ死ぬばかりの間柄に邪魔がはひつて、思ふまゝに逢へぬ人の感懷で、心から物好きに逢はぬのではないだけに、強ひてかうした矯語を弄することが哀れである。畢竟逢ひたい心の募るのを抑へる爲に、一工夫を案じたのである。所謂「出來ない相談」ではあるが、そんな事までも思ひ寄せて、千々に心を碎くのが、戀の情であらう。誹諧部に、

ありぬやと心みがてらあひ見ねばたはぶれ難きまでぞ戀しき

これは既に試みて、悶々の苦を嘗めた趣である。相對へて意得るがよい。初句の「も」の辭、如何に廻護して見ても妥當でない。

○

忍ぶれば苦しきものを人知れず思ふてふこと誰れにかたらむ

大意　打ち出さずにじつと怺へて居れば、いよ〳〵切ないものを、このやうに内々に思つて居るといふことを、誰れかに話したいものであるが、誰れに話さうぞ。

評　大鏡に、「おぼしき事いはぬは、けにぞ腹ふくるゝ心地しける。かゝればこそ、昔の人は物言はまほしくなれば、穴をほりてはいひ入れ侍りけめ」と見え、上にも「あはれ」と歎息するばかりでも、「戀の亂れの束ね緒」となるとある。まして「思ふてふこと」を打ち明けたなら、如何に胸の明く心地がするであらう。けれども、この胸裏の祕密をまことに開くべき鎖鑰は、卽ち戀ひ焦れるかの君の御手にある。たゞ如何せんこの心を先方に通ずる手段がない。せめてこの祕密を聞いて貰へる親身の友でもあるなら、幾分か戀心が緩和されもしようが、さてその人がないとなると、殆ど途方にくれる。これ「誰れに語らむ」と煩悶する所以である。伊勢物語に、

思ふ事いはでぞたゞに止みぬべき我れと等しき人しなければ

などを思ひ合はせてよい。

○

こむ世にもはやなりなゝむ目の前につれなき人を昔とおもはむ

釋　○こむ世　未來の世。○なむ　希望の辭。○目の前に　直にといふに似てゐる。

大意　いつそこのまゝ來世にまあ、早くなつてしまつて貰ひたいわ、そしてあのつれない人を卽座に、前世の事と思はうわ。

評　構想を佛經の三世流轉說に采つた。前世の事は「隔生の如し」と說いて、現在世では一向に聞知する所がない。されば早く來世となつて、卽座に現世の戀の苦患から遁れたいといふ。いかにその戀が熾烈であるかゞわかる。況や對手がつれないとなつては、厭世觀は當然起つてくる。來世になるには、先づ死んだうへの事だが、そんな分別を離れた愚痴が、戀の爲に血迷へる人の態度である。この歌の妙味は、全くこゝに存する。廣蔭が「人を戀ひて焦れ死にすべく思はるゝ故、同じ死ぬ程ならば、來む世にも早なれかし」と釋いたのは、戀せぬ人の理窟である。又景樹が、「來む世は今經て行かむ世にて、年經たらむ後をいふ」と、佛說の來世の意とするのを否認したのは、好んで樹てた異說で隨へない。「目の前に」は卽座に、直になどの意の轉義である。これで印象が更に鮮明になる。

○

つれもなき人を戀ふとて山彦のこたへするまで歎きつるかな

釋　○山彦　夏部「時鳥聲はきこえず」の條に既出。○歎き　長息の動詞となつた語、溜息を吐くこと。

大意　つれないあの人を戀ひ慕ふといつて、谺の應へて響く程にまで、さても〳〵大きな聲で、溜息を吐いた事よ。

評　「山彦の應へするまで」は、歎聲の甚しさを誇張したものである。無情の山彦の應へるのは、則ち有情の人の、

手答ない無情さを反映するもので、この誇張の程度の高ければ高い程、面白い對照をつくる。景樹が「餘り仰山にて眞實の歌ならず、只讀み上げたる調のみよきなり。新撰萬葉に山彦の音のするまでとある、この山彦は音といふ枕なり。これは面白し」といつたのは、更にこの間に於ける微妙の消息を曉り得ぬ論である。「天彦の音羽山」など續けたのを一つにして、山彦を枕詞と思つたのも稚い。

山彦の答へするまでほとゝぎす妻戀すらし小夜中に鳴く（萬葉卷十）

と一寸似たらしいと見えるが、全く別趣のものである。

新撰萬葉には二句待つとて、四句音のするまで、寛平歌合には四句を答ふるまでとある。

○

行く水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

釋 ○かずかく　數書く。一つ二つ幾つと線を書き付けるをいふ。

大意 流れて逝く水に、一本二本と線を引くは、書くそばから消えて、はかないものであるが、それにもまだまさつてはかないのは、此方を思つても呉れぬ人を、此方からばかり思ふのであつたわい。

評 我が戀は、卽ちその最もはかない物といふ事を暗示した。客觀的に見たのではなくて、自嘲の語である。しかもその愚を知りながら、なほ執著してゐる人の作である。上句は、既に萬葉集卷十一に、

水のうへに數書く如き吾が命妹に逢はむとうけひつるかも

とある。只その比喩を對比に轉用したのが、この特徴である。但萬葉のは更にまた出處がある。涅槃經に、

是身無常、念々不住、猶如電光暴水幻炎、亦如畫水、隨畫隨合。

來歷を吟味して、その叙法の異同に注意を拂ふ時は、これも亦面白い。下句「思はぬ」「思ふ」と、同語を反對の意に掛け合はせて曲折を作り、姿致を取つた。意旨幽怨で、語路聲調兩つながら流麗である。

○

人を思ふ心は我れにあらねばや身のまどふだに知られざるらむ

釋 ○我れにあらねばや　我が身に存在せざればやの意。中古文のあるの語の用法は、多くこの意である。諸註、「我が物にあらねばや」の意に解したのは誤。

大意 人を戀しく思ふ心は浮かれ出して、自分の身には無いせるかして、大切なこの自分の身のうろたへ迷ふのさへも、知られないのであらう。

評 戀は一種の精神病である。或物に對してのみ發作する情狂である。戀ゆゑに身をはたすことは、昔も今もかはりはない。たまゝ本性に反つた時、我れと我が行爲を訝り、我が心を疑ふ。この撞着が乃ちこの歌の成る所以である。好處は上句にある。

○

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき

釋 ○思ひやる　排悶の意が本義だが、こゝは一轉して、想像の意に用ひた。

大意　戀しい人のことを常住思ひ遣つて居るまゝに、その思ひ遣る路も段々深入りして、場所が遠く遙かになりもするのやら、あちこちと思ひ惑ふ夢の路には、一向に出逢ふ人が無いわ。

評　夢を夢路と混喩にいふことから、遠い野山に惑ひあるく旅路には、行き逢ふ人も無いことを聯想して、夢路に人の子一人にも逢はぬは、餘り思ひ遣り過ごして、そんな途方も無い遠境に行き惑つたのかと訝つた。「逢ふ人のなき」と弘くはいつてゐるが、その人はやはりかの戀人一人を斥してゐる。想ふに實はその夢すらも結ばないのであらう。構想尖奇。

○

夢のうちに逢ひ見むことを頼みつゝ暮せる宵はねむ方もなし

釋　○宵　夜といふに同じい。

大意　せめては夢のうちに戀しい人に逢はふことを、ひたすら頼みにしくて、やつと日を暮した宵は、却つて心が澄んで、どうして見ても、寐よう方角も無いわ。

評　夢中の會合を頼むのは、現實に逢はれぬからである。「暮せる」とある、如何に晝の内から心待ちに樂しみとしたかがわかる。生憎や目はさゆる心は焦燥る、輾轉反側して寐付かれない。戀は一種の神經衰弱である。然し當人にとつてこの位意地のわるい情ないことはない。起きても逢はれず寐ても逢はれず、その當惑のうめき聲が卽ちこの歌となつた。「宵は」と差別を立てたのに、常は眠りもした趣が反映されて面白い。かく些少の潤色はあるが、通篇一氣呵成の渾體である。廣蔭が、「人のつれなくて現には逢はれぬまゝに」と、餘意をいひ添へたのは蛇足である。景樹の説に、「夢を見るにさまゞくの修法などして、暮るゝとやがて閨に入りしなるべし、淫佛の弊なり」とあるも、この歌を釋くには無用の繁説である。

○

戀死ねとする業ならし、うば玉のよるはすがらに夢に見えつゝ

釋　○よるはすがら　夜は夜通しの意。夜すがらを分けていつた語。○うば玉の　「よる」にかゝる枕詞。物名「うば玉のわが黑髪や」の條に既出。

大意　これはまあ必ず戀ひ焦れて死んでしまへといふ心で、思ふ人のする爲業であるらしい、なぜといふに、夜は夜通しに思ふ人が夢に見えくして、現實には更に逢つても呉れぬわ。

評　戀の爲に神經昂奮して、非常に過敏となつた人の作だらう。まゝならぬ戀路は、なまじいに夢にその俤を見るだけつらい。かう寐ても醒めても戀に責められては、全くやりきれない。そこで餘計な邪推が起つて、戀ひ死ねとて思ふ人のする事かと、一途に人の上のみを怨みがましく咎めたのが面白い。實にこの道は賢者をも愚にする。但この句、萬葉集卷十一に、

戀ひ死なば戀ひも死ねとや玉ほこの道行き人にことも告げなき

戀ひ死なば戀ひも死ねとや吾妹子が吾家の門を過ぎて行くらむ

など、夙く古人の道破を經たもので、奇警で目につき易いので、また後人の踏襲する所となつて、六帖にも、

戀ひ死ねとする業ならし玉章のたよりも見えずなり行く見れば